

きを相手にするのではないと云ふのを善く知つて居たのです。

實は父親の知つて居たよりは、もつと鞠緒の氣位は高かつたので、幾年も一處に住みながら敏詮をば穢いものか何ぞのやうに傍へも寄付させない、敏詮の方でも更に寄り付かない。此二人ばかりは近くて遠いは男女の中と謂ひたいほどでありました。鞠緒が美男の敏詮に鼻洩も爲かけぬばかり安く見てゐた理は、色戀などを離れた大望があるので、其は何かと云ふと、自分は立派なものを夫に持ちたい、位が有つて、財が有つて、勢が有つて、神々とした人の奥方と仰がれて、榮耀榮華が盡したのでありました。幾多男振が好くても内の代診では此相談には乗りかねる、因で、此驛には貴族だの多額納税者だのが四五軒もあるから、それらの屋敷へ出入をして、交際をして居れば、其から其へと顔が廣くなる、敷の中から種の好さうなのを擇取つて夫に定めやうと云ふ鞠緒の了簡。尤も餘程の器量自慢でなければ是程の大望は起らぬのであります、有繫に鼻に懸けるだけの美人ではあつたので。幸ひ父親は病家として其等の屋敷へ出入もすることであるから、何とか紹介してくれるやうにと、やい／＼頼みます、澄洲先生も精々頼み込むのであるが、先方では又田舎醫者の娘は一向珍重しません、夜會もある、茶話會もある、園遊會もあれば晚餐會もある、

幾度も種々の會がありますが、一度でも鞠緒に招待状の來た例はありません。病人が有れば折節父親だけは呼れます。それで、鞠緒と敏詮の二人であります。右の有様であるから自然中でも悪いかと云へば然うでもない、互に嫌つて居るかと云へば然うでもない、唯愛するなどと云ふ念が双方に微塵も無いまでの事で、其辯二人を並べると、實に得難い一對の玉のやうな夫婦であります。

(三)

澄洲先生の庭へ出ると直に垣の外は海で、極めて眺望が宜しい。天氣の好い朝の事でありました、敏詮は庭を散歩しながら海を見晴して居りますと、朝霞を吃しながら先生新調のフロックコートを一着して出て参りました。

「敏詮、私はな差當つて氣遣ふほどの患者も無いから、ロンドンまで用達に行つて來うと思ふのだ。二三日だから何分留守中を頼むよ。」

「承知致しました。而して直にお出掛でございますか。」

「九時半の列車で。それから屹度お前に言うて置くが、汽船會社の木古(原名キプリング)な、彼等とは餘り

親しく爲んが可いよ、私の留守中は猶更だ。」

「彼は何も那樣に悪い男ではないと思ひますが、何故でございますか。」

「何故でも宜しいから、私の言を守ると爲るのだ。彼男にセメント屋の垂藤(原名タルドン)彼の二人は遠けなけりや可かん、お前は近來彼等と一所に行くと云ふことを聞いたが、然うかな。」

澄洲先生は苦々しい顔をして居るのに、敏詮は一向平氣なもので、

「はい、三四度彼の二人と一所に球戯を行りましたが、別に毒の無い面白い男でございます。然し深く交際をする譯ではありません、些の遊友達なので。」

「氣を着けにや可かん。屹と私が言置きましたぞ。私の言を守る、宜しいか。」

「屹度守ります。」と口では言つても肚の中では、何の彼等が自分如何し得るものか、子供ではあるまいし、自分が又彼等に如何爲れる者かと、敏詮は寧ろ空耳を走かして、先生の老婆心を嗤つてゐたのであります。澄洲は急に時計を出して見て、

「や、遅うなつたわい。私は銀行へ寄つて行かうと思つたが、然しては居られんで、お前行つてくれ、な。」

と內衣兜から五磅の紙幣を十枚取出しました。唯今の相場で英國の一磅は我邦の九圓四十一錢一厘でありますから、五十磅は四百七十五圓五十錢になります。

「此に五十磅ある、之を銀行へ拂込むのだ。お前忙しけりや今日には限らんけれどな、火曜日を通さぢやならんよ、宜しいかい。」

「確に。」と紙幣を受取りますと、先生は直に行くと云ふので慌忙しく握手をして別れたのであります。

是から敏詮は廻診に出掛けて、五六軒も廻つた歸途であります、此驛端の藤浪(ブチヤナン)と云ふ貴族の門前の角を通りますと、一頭曳の桃色に輪を塗つた華車な馬車が乗捨て有つて主が見えませんが、華車な、可愛らしい、之に乗る人は如何なる美人であらうなと考へて、茫然と其前に立つて居りましたが、不圖横手のだら／＼坂の草原を見ますと、底光のする崩黄の服を着て、白い飾毛を溢れるばかりに付けたボンネットを冠つた、漸く十六約の令嬢が疾亂れてゐる忍冬の花を餘念も無く摘んでゐるのであります。其の嬌媚なことは心も消ゆるばかりで、咬ひつきたいほど可愛らしい裏に自から氣高い所があつて、給に蓄かされたからとて恚う揃つて申分なく出来るものではないと、敏詮は立竦んで眺めておましたが、令嬢は一向知

西洋娘氣質

らずに精々と花を摘んで居ります、其隙んだ態と云ひ、花を束ねて持った手元と云ひ、ボンネットの毛が飄拂と顔に懸るのを拂ひもせずに懐惚さうに爲る眼色と云ひ、何處も彼處も好い所ばかりで、敏詮は氣が遠くなつて我を忘れて了つたのであります。

すると令嬢は場所でも變へやうとしたのか、身輕に立ち起ると敏詮と顔を見合せたので、可差さうに小走をして、馬車に乗るより早く馬を追ふと、車は一散に走り出す、取残された敏詮も身動は爲ずに車の後影を見送つたが、可怨しさうな顔をして、はや馬車は見えなくなつて了つたのに、何を見送るのやら未だ見送つて居りました。

敏詮は家に歸つたのが午後の六時、獨で旨くもない晚餐をして、それから室へ入つて讀書でも爲やうと思ひましたが、蒸熱い晩のことで、内に引込んで茫然もして居られません、それに今日の花を摘んで居た令嬢の姿が目について、左右に其事ばかりが考へられます。氣が蒔蒔して耐らぬから飄然と門を出まして、海岸でも散歩しやうと云ふので二三町も來ますと、前面から笑聲がして面白さうに話しながら來るものがあります。星月夜であるから誰とも知れませんでした、擦違ふと聲を懸けられました。見ると汽船會社の木古に

セメント屋の垂藤。

「何方へ御散歩ですか。」と垂藤は元氣の好い男で、木古は澄し屋の方でありますから、愛想に笑ひかけたばかりで、葉巻の良い香のするのをすばりく吃して居ります。

「君方は何方へ。」

「私も今其處で木古様に會ひましたから、海岸へ行つて一ゲエム遣らうかと思ふのです、御用が無ければお附合ひなさいませ。ねえ、入らつしやいよ、貴方此間は木古様と勝負別ぢやありませんか。今夜是非あの勝負を拜見したい。」

と誘ひかけると、木古も一處になつて勧めます。敏詮は此二人と親しくするなど堅く先生から誡められたのは今晚の今朝でありますから、決して其言を忘れません、二人の顔を見ると興に先生の苦々しい顔が目に見えたのであります、間暇ではあるし、退屈してゐる所へ、球戯と聞くとは好む所であるから頭付くほど行きたい、然し先生の言があるから、善くなからうと考へたものと、何故に善くないと云ふ理由を先生は言つてくれなかつた、大方悪友であるから近けるなど云ふのであらうけれど、俺も一個の男子なら、人の爲に

西洋娘氣質

西洋娘氣質

左右されるやうな意氣地無しでもない、親友として一身上の相談を爲るのではなし、高が球戯の敵手を爲せる迄の事だと手製の道理を付けて、

「それでは一ゲエ願ひませうか。」と是から三人連立つて海岸の球戯場へ出掛けたのであります。汽船會社の木古と云ふは年輩三十五六で、會社の手代を勤めて居るので、一寸有福さうな服装をして、苦味走つた男振の、日本風で云へば、切離れの好さうな、苦勞人と云ふ質であります。垂藤と云ふのはセメント屋の才取で二十八九になります。此方は誠に堅氣な扮装で、世辭の好い、敏捷さうな男で、如何さま此二人と並べて見ると、敏詮は全でお坊様でありますから、一處に球を突いたり、酒でも飲んで居ましたら、澄洲先生にあらざるも眉を擧めるに相違有りません。勝負を始めると、二番續けに敏詮の勝、三度目は負けました。木古はジャンパンを一本着つて、敏詮にも一盃と言ふので、飲むと少し酔つて來ました。酔ふと大分面白くなつて勢が付いて來る、因で圖に乗つて又四五番も遣つたのであります。敏詮の勝が込んで、結局大勝利と云ふ事になりました。すると垂藤の言ふには、
「球は時間が掛つて、勝負が小く面白くありませんから、氣を替へて骨牌を一番遣らうとやうな事ありませんか、

西洋娘氣質

食事も爲なければならぬのですから是から俱樂部へ行つて、如何でせう。」

木古は勿論賛成でありましたが、敏詮は有繋に躊躇しました。此體を見ると木古は冷笑を爲ながら、

「白柄君如何ですな、勝遊ですか。」

敏詮はぐつと癪に障りましたが、黙つて居ると、垂藤が言を盡して勧めます。其を生返事をして待ひながら考へて居る傍で、木古は小聲で垂藤に、

「止し給へ、駄目だよ、持つて居ないのだから來やしないと云ふのに。」

敏詮は之を聞いたからもう恠へられない。おのれ、失敬なことを言ふ、持つて居るか居ないか知りもせぬ癖に、俺を年が少いと思つて馬鹿にするのだな。善、善、それなら一番荒肝を挫いでくれやう、とは血氣に任せで前後を忘れた敏詮であります。

「御一所に参りませう。木古君さあ出掛けませう。」

(四)

三人は俱樂部へ参ると直に骨牌卓を出しかけて、「ルウ」と云ふ勝負を始めたのであります。又マシヤ

西洋娘氣質

シパンを抜きまして、今度は垂藤の奢りでありました。遣つて見ると又敏詮の勝で。二三番で四五磅の儲でありますから、唯もう面白くなつて来て耐らない。段々盛に始めますると益勝つ。

「是は如何も勢當るべからずですな。」

と垂藤は少々凹んで来たが、木古は平氣な顔で、而して一向躁りません。其内に風向が替ると、とんく拍子に敏詮の頁が込んで来て、瞬く間に勝つた。けを手拂にした上五磅ばかりの持出しになつたのであります。

「白柄君可うございますか、五磅の貸になりますよ、可うございますか。」

と知れ切た事を木古が馬鹿念を入れて聞きます。是が頗る敏詮の疍に障りました。

此奴め、俺が金を持つて居るまいと思つて怪しからん事を言ふな。見て居れ、今に撲き伏せて遣るからと、益憤れ込んで、

「心得て居ますよ。五磅が十磅でも、二十磅でも御迷惑は掛けんですから安心してお勝ちなさい。」

面は烈火の如くなつて、聲も怒氣を帯びて居ります。因で又掛ると又敏詮の頁で、今度は垂藤に借が出来

ました。面憎くも木古は又言出しました。

「白柄君、可うございますか、私に五磅と垂藤君に二磅……。」

「え、能く判つて居ます。」と言つたものゝ實の處懐中には二圓足らずより無いのであります。然し今朝先生から預つた五十磅の一束を心得て居るので、之に手を着けるのは濟まぬ事とは知りつゝ、驕虎の勢で已むを得ません、餘り面が憎いから奇麗に支拂つて一泡吹せて遣らうと、預り金の中から十磅ばかり引抽いて、勘定をすると木古は驚きました。醫者の代診が紙幣の束を持つて居るのは意外であります。

「是はどうも恐入りましたな。第一金の出し振の清い所は到底素人ぢやない、私は其處に感服した。凡そ賭事は勝つばかりで上手と云ふのぢやないのです、勝つても負けても平氣で、勝つて盛らず、負けて衰へずでなければ可けません。第一は拂です。甚ものも拂は清く出来かねるものです。その拂の清く出来るのは負けて衰へない證據で、然云ふ人は長い勝負には屹度最期の勝を取るとしたものです。恐入つた、白柄君のお手筋には實に感服しました。垂藤君油断はなりませんよ、先は手剛い、長い勝負には勝たれる人だから。」

西洋娘氣質

西洋娘氣質

なご、好い語を言つて、今度は紙幣の束を持つてゐると見たから迷すまいといふ算段です。處が敏詮も今の十磅は銀行に預けなければならぬ金の内でありませうから、木古が迷さうと云つても今は逃げられぬ場合であります。如何かして今の貢だけを取返して、それで切揚げやうと、懸るが、益負けて無残にも五十磅は盡く捲上げられて了ひました。

敏詮の顔の色は青白くなつて、顔ひ出しました。呼吸が過んで思ふやうに口も利かれぬ始末。

「もう私はお暇にしませう。」と言つたのが漸くで、胸が裂けるほどの無念であります。先生から預かつた五十磅紙幣は惜しい木古の前に算を亂して積んで在ります。其を見ると實に己の親兄弟が敵の手に渡つて弄殺にでもされてゐるやうな想で、起つにも起たれませぬ。

シヤンペンの酔とランプの熱とで蒸れる上に怒で熱つて居た體が、星月夜の潤い空の下に出て涼しい風に吹れると、迷夢は忽ち覺めて敏詮は始めて正氣着いたのであります。

全く一時の迷だ。迷とは謂ひながら如何して那麼迷を起したのだらう。考へて見るほど我身で我身が解りかねる。一錢でも減しては申譯の無い大事の金を、五十磅悉皆奪られて了つた。先生から預つた金で、而も

西洋娘氣質

明日中には銀行へ持つて行かなければならぬ金、連も才覺の道は無い。彼等を近けるなど屹と言はれた奴等と一所に遊んだ上に、其人の預り金を奪られたのであるから、先生に此話は出来ない。それでは此事が知れぬやうに才覺するのであるが、五十磅といふ大金を借りやう方が無い、如何したら可からうと思ふと、氣味無く冷たい汗が顔に入染出して、鐵の緊木に掛つて緊付けられる想であります。來るとも無く我家の門に來たのが十時、内へ入つて投首をしながら憎々階子を昇らうとする時、

「白柄さんお歸りですか。」と聲を掛けたのが照佐(原名テレサ)といふ此家の親類の娘で、生家が餘り宜しくないで、仲働同様厄介になつて居るのであります。齡は鞠緒より二歳ほどの年長で、器量尋常であります。可愛らしい、深切氣のある優しい女で、而して小々敏詮にはホの字なのであります。呼掛けられたので顔を擧げると、面色は灰色をして、目が血走つて居りますから、照佐は仰天して、

「貴方、如何なすつたのです。まあ、大變なお顔色をして、御病氣ですか。」

「今日は一日歩いて、非常に疲れた所を酒を少し飲過ぎたものですから、頭痛がして耐らんのです。」

「然うでございますか、では早くお寝みなさいませう。」

西洋娘氣質

照佐は其なりに別れました。敏詮は寢床に入つたが、目の合ふ所ではない。甚麽事にも五十磅といふ金を調へなければ先生に合す顔が無い。十年や二十年の命を縮めても苦しくないから此金は拵へたいものだと思へたが、實は五磅出来る道さへ無いのであるから、心配で横に成つて居る空は有りません。一晚眠き道して其夜は明けました。

脱物つて照佐でございませう、其朝鞠緒の室へ参りまして昨夜は恙々であつたが、白柄さんが劇く不快なれば可いかと心配さうに話を致すと、

「自分が醫者だから、自分が診察して、自分が處方をするでせうよ。」

と今朝の麵包の焼過ぎたほども氣にしない様子。彼顔色では生易い病氣ではあるまいと思ふから照佐は心配でく成りませせん、けれども鞠緒の言ふ通り當人が醫者であるから傍から手を着ける譯にも行かぬので、如何したらうくと氣遣ひながら用事を爲てゐる内に、敏詮は例の如く廻診に出た様子であります。敏詮は家を出まして、長の一日出来ない相談を考へるばかりで方が付かない。銀行の支配人は夙て識つても居れば、話も解る人であるから、彼へ行つて事情を話して、頼んで見やうか、とした所で五十磅の金を貸してくれやう

事は有るまいから、銀行の方へ拂込んだ體にして、十日なり半月なりの猶豫をして貰つて、其内に何とか工夫が着くだらう。時計を見ると午後四時、銀行はもう閉ぢて了つたので、自宅を訪問しやうと其途上又考へて見ると、逆も受け付けられる相談ではない。談が付かないほどなら、這麼恥辱は人に聞かせたくないと思直して引返して了ひました。

人は窮すると思知になるもので種々な出来得へからざる事を念ふのであります。此の絶體絶命の那裏で敏詮は未だ誰れか来て五十磅を貸してくれるやうな氣もするし、道に五十磅遣ちて居ないとは限らぬやうにも思はれる。然しながら到底地道に此金の出来る望は無いと諦めたので、己むを得ない、此上は事情を先生に打明けて如何やうとも罪を待つ外は無いと思つたのではあるが、敏詮は律義なだけに小心で、先生の面前で這麼事が言出される譯ではないと考へたのであります。

之を言ふ事は出来ず、金は猶更出来ずとすれば、其身は如何して可いのであらうかと考へると、此言譯には死ぬるより外は無い。生きて此苦痛を受けるより死ぬるが覺に勝であると胸狭くも思過つたのであります。遺書をして澄洲先生に罪を詫ひやうと、敏詮は燈が點くと室に閉籠つたのであります、顔の色と云ひ様子

西洋娘氣質

西洋娘氣質

と云ひ、尋常事ではないと照佐は氣遣でなりませんから、又其話を鞠緒に致します。

「白柄さんの様子が如何も變ではございませんか、貴方はお氣が着きませんか。」

「私は白柄さんの番はして居ないから。」

「何爲少々加減の悪い位なら私も心配は致しませんけれど、病氣なんぞではなくて何か餘程心配事でもお有なさる様子ですか。」

「お前さんは一體心配性で、少しの事を仰山に思ふのが癖だよ。那樣に他の事まで心配した日には限が無いぢやないか。」

逆も合手にはならぬので照佐は獨で氣にしながら室へ歸つて行きました。鞠緒は讀未了の小説を見て居りましたが、有繋に敏詮の事が氣にならぬでもありません。其間に宵も過ぎて、世間も大分鎮つた頃、二階の敏詮の室の邊で物音が致します。

(五)

敏詮は斷然自殺と覺悟を致して、何で死なうかと考へたのであります。最初は家業だけに斯篤里規尼涅を服

さうか、然うすれば手間日問要らずに絶命が出来るとも思ひましたが、狭い室の内毒を食つて斷死をするのは鼠か何ぞの最期で甚だ見苦しい。それよりは外へ出てピストルで轟然と遣らうと、先生の護身用のピストルを持出しまして、これから海岸へ行くと……海の中に離れ岩がある、今丁度引汐だから那まで行つてドンと遣れば、死骸は波が來て葬つてくれる、其が一番死恥を曝す段が無くて好いと、テーブルの上澄洲先生宛の書遣を載せて、ピストルをば衣兜に入れて、敏詮は竊に室を立出でました。

此方は娘の鞠緒であります、敏詮の室で何かとく物音が致すので、熟と聽耳を飲て居りましたが、旋て階子を降りて來る足音が致します。時計を見るとはや十一時を過ぎて居ります。その足音は用有りさうに降りるのではなくて、人の聞くのを偷むやうに極めて靜に、極めて重くいたしますから、はてなと鞠緒は持つて居つた小説を置いて椅子を立ちました。すると足音はことくと廊下を歩いて、玄關の方へ行く様子でありますから、鞠緒はランブを持つて室を出で、後を追懸けると後影は敏詮でありますから、

「一寸白柄さん。」と叫び止めて、傍へ行つて其顔を見ると震ひあがるほど驚きました、驚いたよりは怖れたのであります。慥に照佐が驚いた時の顔色は失望の苦痛に堪へぬのでありましたが、此時は自殺と覺

西洋娘氣質

悟したのであるから、唇の色は無くなつて、目は釣糸つて殺氣の満ちて居る物凄さと云ふものは、それを夜更に一人と一人で顔を合せたのであるから鞠緒は惣毛堅ちました。

「今時分何處へお出なさるのです。」

敏詮は何と思つたか其凄い目で呢と鞠緒の顔を視て、一言も言はずに行かうと爲ますから、鞠緒は益氣味が悪す。

「白柄さん、お待ちなさい。」と前途に立塞つて、ランプを置いて通せん坊をしました。それでも行かうとするので、男の肩に手を掛けて、其顔を氣遣しように眺めたのであります。十年ほどの間に娘の鞠緒が敏詮の體に手を觸れて而して浸々其顔を視たのは是が初故なので。

「今時分何處へお出なさらうと云ふのです。貴方大變顔色が悪いぢやありませんか。何か心配事が有るのでせう、然うでせう。」

と言ふと敏詮は目を瞑つて俯きました。

「私に話して下さいいな、ええ白柄さん。」

「お話の出来ん事なのです。どうぞ其處を通して下さい。」

「何處へお出なのだから、行先を言はなければ私は通しません。」

「それぢや行先を申しますから、通して下さい。」

「あゝ有仰す。」

「自殺を爲に参るのです。」

「ええ。」と一度は驚いたが、氣丈の女でありますから、

「然うですか。自殺を爲さうと云ふには定めし深い事情がございます。其を話してお聞かせなさいませう。な、ねえ、白柄さん。まあ、左も右も彼方へ入らつしやいよ。」

と無理に男の手を取つて、今迄居た座敷へ伴れて参つて、

「さあ、其事情を伺ひませう。而して私の力に及ぶ事なら御話相手になりませう。」

敏詮は未だ死ぬ氣で居ります。

「はい、御深切は難有うございますが、自殺を思立つほどの事情ですから、此御話ばかりはどうも出来かね

ます。」

「それぢや私誓ひませう、甚麽事であらうとも此事は一切口外しません。それなら宜しいでせう。」

死なねばならぬとまでに便の無い身に鞠緒が常に似ずして眞實を願して言つてくれるのでありますから、故詮は世にも嬉しく思ひまして、裏まず一部始終を物語致したのであります。鞠緒は委細聴きまして、

「それは成程貴方が悪い、けれども今更言つた所が爲やうがありませんから、是から十分御注意をなさるが宜しいでせう。何にしても死ぬの何のと云つてお騒がなさるほどの事はありませんよ。」

「私も好んで死にたい事はありませんけれど、其金が出来なければ申譯が有りませんから、死ぬより外は無いと覺悟したのでございます。先生にお話をした所で逆も御免は無いに極つて居ります。」

「それは然うでござります。私は娘でござります、その娘の私が五十磅失しても父の氣質では決して免しません、ですから父に話を爲るのは無駄でござります。」

「然うでござりませう。五十磅は扱置いて五磅の金策も出来ん身の上なのでありますから、どうも死ぬより外は無いでござりませんか。今から考へると實に夢でも見たやうな一圖の迷ではあります、先生の金を無断に私

用したのは正に賊の所業です。私は五十磅の才覚が出来んよりは、紳士たるものが賊を働いたのが、如何にも心外なのです、残念なのです、私の一身の大恥辱なのです。」

敏詮は涙を潜々と流して、

「此大恥辱は一生消えませんが、其を思ふと私は益々生きて居られん體なのです、那樣不面目な思をして生きて居るより一思に死んだ方が勝と考へますから、いづれにしても私は自殺の覺悟でござります。」

「父も貴方の事は始終陰で誓めて居ります、將來望のある方だと申してね。それですから、是から未だ長い貴方の一生ではござりませんか、其間に是れぐらゐの落度を埋合せる事は幾多でもお出来なさるかと思ひます。悪い事には違有りませんけれども、若い内には随分有りさうな事なのです、茲で貴方が死んだ氣になつて御勉強なすつたら、貴方も大死にならず、父にも迷惑を懸けずに済むのではありませんか。死ぬの何と云ふのは卑怯法です、氣の弱い人の爲る事です。ねに白柄さん、私は然う思ひますわ。」

「それはもう貴方の有仰る所が理なのです。然し此に五十磅といふ金が無ければ落度を埋合せるにも勉強を爲やうにも、其命を懸けることが出来んのですから……。」

「然うです。私も其工夫をして居るので、如何がして上げたいと思ふのでございます。」
と鞠緒は卓子の上に腕を支いて指の頭で顔を拵ながら顔に思索をして居ります。

「貴方が、あの貴方が、如何かして………御心配下さるのですか。」
と鞠緒の顔を覗めて敏詮は歎歎に泣出しました。

「五十磅ばかりで貴方の命を捨てるよ云ふのは餘りお氣の毒でありますから、お助け申したいと思ふのでござります、それぢや恠爲なござります。」

恠爲をいまして聞いたので敏詮は歎歎が込上げて、

「はあ、はあ、はあ、」と乗出しました。

「私は自分の貯金が四十磅あります。それで餘の十磅の不足は、照佐さんが持つて居ますから那の方から借りるとなござります。」

「それはどうも御深切に難有うでございます。何ともお禮の申しやうもありませんが、御存じの身の上ですから、如何いふ方法にして御返金したら宜しいでございます。」

「何程づでも可うでございますから、貴方の手にお金の入つた時お返しなすつて下さい。」

「はあ、それは難有うでございます。お陰で私は一命を拾ひました。今日から私の命は貴方の物でございます。今後事の有つた時には貴方の爲には一命を捨て、私は盡します。」

「五十磅ばかりで貴方の命を買つた意ではありせんから、那樣に有仰ると却つてお氣の毒でなりません。」

唯お頼み申して置きたいのは、此後何ぞ貴方の力を拜借するやうな事であつた時には何分ぞうぞ。それぢやもう遅うございますから行つてお賤みなさいまし。お金は明朝お渡し申しますから、而して貴方も之にお懲りなすつて、後來はその二人の者と附合ふのも、又賭事なども………」

「いや、もう今度と云ふ今度に懲りましたから、一生慎みます。」

と敏詮は喜び勇んで室に歸りました。

さて翌朝であります、敏詮は鞠緒に會ひます、と嬉しいやうな可憐いやうな、面目無いやうな、得も謂はれぬ變な具合でありましたが、鞠緒は平氣なもので、不斷と少しも變つた様子はありませぬ。唯變つたのは、今迄曾て那樣例の無かつたのが、握手を爲るとして手を出したので。之が鞠緒の心には改めて親友になつた

と云ふ證なのであります。

獨りで嬉しくてならないのは照佐であります。他は洋からうが痛からうが自分の知つた事かと云ふ風の鞠緒が、今度四十磅といふ金を出して白柄の雞儀を救ふとは見上げたものである。救はるゝ人も仕合なれば、救ふ方も神の心で立派なもの。自分が五十磅持つてゐるものなら、鞠緒などに彼人を難有がらせるのではなし、と少々は妬ける氣味もあつたのであります。

十一時に客間まで来てくれと娘の言でありますから敏詮は出向いて行きますと、五十磅の紙幣を持つて居て、「それでは之をお渡し申します。昨夜もお話しましたとおり、四十磅は私ので、十磅は照佐さんから借りたのです。直に銀行へ持つてお出なさいませよ、父が歸つて來ると可けませんから。それから金錢の事ですから堅く爲たうございます、一寸證書をお書き下さいませんか。」

證書を書いて五十磅を請取つて、敏詮は何に爲よ一命を助けられたのであるから、類に禮を述べて、歐羅巴人の事であるから、

「予は如何にして此感謝の意を十分に表し能ふか、吾慈悲ある女神よ。」 などと忝ながつたのであります

が、鞠緒は一刻も早く銀行へ持つて行くやうに急立てゝ敏詮を出して遣りました。

其夕方澄洲先生は歸つて参りました。殿しい人であるから、歸ると直に留守中の様子を檢分したのであります。誠によく調つて、投遣にした迹も見えませぬ。敏詮を呼んで病家の模様をも一々聞いたのであります。之も手落なく廻つて善してありましたから、平生餘り氣に入つた事の無い先生も口を極めて其働を賞めたのであります。それから預金の事を訊ねましたが、之も仔細無いので、格別の機嫌、其に就けても敏詮は娘鞠緒の實意が骨身に徹したので、もし五十磅が出来なかつた日には、今日あたりは岩の上でツドンの死骸が波に漂はされて二三十里の沖合を浮波々々して、家では行方が知れぬと云ふので、今頃はどつた返して騒いで居る事であらうと想ふと、悚然慄然と寒くなりました。此日から敏詮の動振が違つて、從來とてゝ怠るやうな事は無いのでありましたが、折々は奉公人根性の出ぬでもありませんでした、それが全く一變して、何でも主人大事と心掛けて、家の爲になるやうにとばかり身を惜まらずに勤めまするので、澄洲先生は益信用して、自から疎略にもせぬ狀であります。

(六)

一週間ほど経ちますと、廻診の途で例の悪友の木古に出會ひました。

「いや是は白柄さん、其後は如何です、先日の復讐に又一勝負願はうぢやございせんか。」

這ビストル野郎め、又うせやがつたな、と敏詮は木古の顔を見ると五體の血が沸返るやうな心地であります。躍起つて撲仆して、骨の摧けるほど蹂躪つても懲らぬくらゐに思ひましたけれど、熱と慄へて苦笑をしながら、

「もう御免を蒙りませう。あれだけ差上げたら勘辨して下すつても可いぢやありませんか。」

二度と再び相手にするのではないのでありますから、體好く敬して遠ける氣でも、忘れぬ恨があるから異に絡んだことも不知言ひたくなるのであります。

先方も然る者であるから是位の氣障には悉くも爲ません、御常談ものだと言はぬばかりに空笑をして、

「那樣言を有仰らなくても宜しいぢやありませんか、白柄さんでもない、勝負は時の運です。勝ちもすれば負けもするので勝負ですわ。一度負けただからつて其で懲りて引込んだ日には賭事の味は解るものぢやありません。あれぞりお止しなすつたら見すく五十磅の損を爲さる。此間は取られた、今日は取つたと云ふ所に

面白味があるので、辛抱して些と遣つて御覽なさいませよ。お暇なら是から一番如何ですか。垂藤君は大分懐中が暖いのですから面白うございます。幸ひ私も持合せて居りますから、貴方の大いに復讐する時です。」

「それは折角ですが小さな勝負は面白くありませんから、もう十年と辛抱して四五百磅も拵へてから又一番願ふやうな事にさせよう。」

と敏詮はついで別れて了ひました。

一命を救れた五十磅でありますから、一日も早く返辨しなければ恩に背く譯と、敏詮は出来るだけ身を約めて、五十錢でも一圓でも入ると其を鞠緒に渡すやうに心掛けて居りました。

敏詮は生得律義な、志の潔白な人間でありましたから、主人の預金を利用したといふ事を賊を働いたも同じの大罪に思つて、深く悔悟いたして居るのであります。此恥辱は一生涯除去ることが出来ん、切めては其償罪なりとも早く爲たいものであると、日夜其のみの苦心でありましたが、一方には命の親の鞠緒、此人にも恩返を爲なければならぬので、今迄は陸々口も利かぬぐらゐでありましたが、もう然は参りませう。

西洋娘氣質

せぬ、大恩人として仕へなければ義理が濟まぬと云ふので、鞠緒の爲なら此方から進んでも用を頼れる、暇があれば小説を読んで聞かせる、外へ出れば花などを買つて土産に持つて来る、といふやうな次第であるから、従来とは打つて變つて、二人の間は親友であります。陸に話も爲なかつたものが急に話を爲る。餘り逢はなかつたものが急に頻りに逢ふのでありますから、家内を始め近處の者は誰も敏詮が媚り出したとばかり思つて居りました。

此は又情合でありますから、今迄は然も思はなかつた間でも、つい譯が出来るのは幾度も有る例で、實際男女の愛は寧ろ恁云ふ呼吸から陥つて深くも成り易いのであります。容の美醜などは此の期に臨んでは問ふ所でありません。敏詮と娘鞠緒の二人はお互に美男美女でありまして、而して恁云ふ關係になつたのでありますから、磁石の傍へ鐵を持つて行つたのと變らぬのであります。前世は定めて仇同士でもあつたのか、双方ともに愛情は少しも起らなかつたのであります。それで鞠緒が男嫌ひと云ふのもなければ、敏詮が道徳堅固の偏人と云ふのもないので、現在忍冬の花を摘んでおた令嬢を見染めて茫然立つておた人なののであるから、これでお互に可憐ならぬのは極めて不思議であるが、事實は双方とも冷淡したものであります

た。

(七)

或朝のことでありました、澄洲先生は珈琲を飲みながらタイムス新聞を見て居りましたが、廣告欄に何ぞ一
大事件を見付けたと云ふ顔で、慌忙しく敏詮を呼びます。早速参りますと、一寸之を見いと新聞を出して指
した所を、何事かと讀んで見ますると、

●謝金五十磅!

醫士白柄民人と結婚せし呂谷(ロドニー)眞照子(マデリン)の所在御承知の仁は下名まで御通知被下候はと乍
失禮前記の謝金差上可申候
として辯護士早虎(サドラ)安敦(アントニー)の住所姓名が記してあります。敏詮は「はあ」と言つた限で醫
と廣告を噴めて居りますので、澄洲先生、

「所在御承知の仁も何も有りはせん、お前の母親の事ぢやないか。」
「然でございます。」と敏詮は煙に捲れたやうな顔をして居ります。

西洋娘氣質

「然でございませうではない、早く通知をして遣らなければ可かん、お前の事だ。」

「はてな、妙な事もあるものだ、何でせうな。」

「何だか私にも解るものかな。」

「私にも如何も心當がありません。」

「現在の子のお前にさへ心當が無いものが、何で私に解るものかな。」

敏詮は速りに首を擦つて居たが、更に合點が行かない。「はてなく」と言つては其廣告を眺るばかりであります。傍に娘の鞆緒は何事であらうか、早く吉左右が聞きたさうな顔をして敏詮の顔を眺めて居たのであります。旋て敏詮は通知を爲ると云ふので出て行きました。迹に澄洲先生も考込んで居れば、娘も頼に考へて居りましたが、

「阿父さん、何でせう。」

「さあ、何であらうか、私にも全然解せんて。」

「吉い事でせうか。私は何か吉い事のやうな氣がしますけれど。」

「悪い事ではなからうよ、のう。」

善悪は廣告の文面では全く解らない、敏詮を始め家内の者は一日此謎の爲に苦められたのであります。

澄洲先生が彼白柄民人の臨終に概略聞いた通り、敏詮を産落して歿つた母親なるものは歴とした貴族の娘であります。白柄民人が始めて開業したのはロンドンの場末で、其の折の病家に眞照と云つて十九になる美しい娘がありました。之れといつか懇懇になつて、擧句が二人手に手を取つて出奔したのであります。此眞照と云ふのは早く母親に死別れて父と二人で隠居居住を致して居りましたので、貴族ではありませんが、極めて有福ではなかつたので。

然し家柄は樓府(ロルフ)家と云つて子爵ではありますが一廉の由緒ある系統で、父は其の三男に生れて、出雲(エスモンド)といひました。次男は茂世(モセス)、家督が準人(ハロオド)、此の準人と末の二人とは至極兄弟中が悪いのであります。次男は陸軍へ出まして、クリミヤ戦争に出陣して大分の功名を致したのであります。其折の負傷が根で、還ると間もなく歿しましたが、死ぬまでも惣領の兄とは仲を直さんで丁みました。此の人は一生獨身で暮したのであります。三男の出雲は兄から見ますと、氣の引立たん、少し

西洋娘氣質

く鈍い質でありましたが、蚤くから結婚いたして、一人の女子を持ちました、是が眞照であります。呂谷と云ふのは母方の姓を名乗つたので。

眞照の十九の年、父は俄に病氣に罹つたのでありますが、富裕でもないから善い醫者を好む事情にもゆかず、急病人ではあるし致しますから、近所で手輕なものと云ふので、白柄民人に診せたのであります。是が縁の始りで、二人は命も惜からぬほどの中にはなつたものと、苟も貴族の娘であるからは、貧乏醫者に添せるなどとは、父親に話した所で許の出やう筈は無いと、終に家出をして丁つたのであります。

さて話轉つて本家の榎府家では二人の男子が出来たのであります、皆殺つて嗣子は絶えたので、単人は其歎の爲に病氣付いたが、猶其上の心痛は、榎府家をば讓るべきものが無い。弟の茂世は死に、季の出雲も病死、血統が絶えると云ふ騒で、百方穿鑿して見ると、出雲に一人の娘があると知れば知れたが、十九の年から家出をして、今に行方が知れぬといふ近所の噂。因で榎府家が廣告を出したのは百計盡きたのであります。

右の廣告に名を出してある辯護士早虎安致といふのは榎府家の顧問に抱へられて居るので、自分は立派に事務所を構へては居りますが、事とある時には萬端引承けて整理する譯になつて居ります。扱榎府家唯一人の血統の呂谷眞照も歿つたとすれば、其子の敏詮より外に血統は無い、然すれば田舎醫者の代診が一足飛に子爵の殿にならうと云ふのであります。人の運ほど解らぬものはありません、つい三月前には生きて居られぬと五十磅の爲に血眼になつた人が、忽ち榎府家の御前に成るので、夢のやうといひたいが、夢よりは未だ途方も無いことでもあります。

四五日経ちますと、廣告を出した早虎辯護士が訪ねて参りました。敏詮は面會致して、兩親の死亡の事から、自分が忘形見である旨を話しますると、辯護士は、笑を帯びて頷きながら、

「然やうでございませう、貴方にも確に榎府家の御容貌がございませう、御血統たることは疑有りませぬ。御邸へお出になりまして、代々の御肖像が掛けてございませうから、それを御覽になれば能くお解りになります。」

と是から殿の餘命も無いのであるから、後嗣は貴方に定つたのであると一部始終の物語を致したのでありますから、之を聞いた敏詮は天へも昇るばかりの歡喜でありさうなるものを、一向嬉しい顔も爲ぬのみか、熱と

西洋娘氣質

西洋娘氣質

考込んで、寧ろ有難迷惑らしい氣色でありましたから、辯護士は強合が抜けて、釣落した魚の大いのを見送るやうな心地。

「で、貴方が樓府家をお嗣になるとなれば、同家は十萬圓の歳入があるのでございます。如何でございますか、名族の後をお殿になる上に十萬圓の歳入、世にも希な貴方の御出世、聞くさへ實に好い氣持が致すではございませんか。それにお見受申す所更に御歡喜の御様子が無、如何いふ譯でございますか。」

「喜ぶべき事ではありませうが、私如きは到底然やうな名族の後を嗣ぐべき價値のあるものではありませんから。」

早虎辯護士は之を聞いて、凡人の言ふべきことでは無いと、心中大きに感服したのであります。

「いや、恐入つた御言で、その御了簡であれば立派に樓府家の御相續は出来やうかと考へられます。左も右も御同道申して、殿に御面會なさるといふ事に願ひませう。」

と辯護士は更に主人の澄洲に面會致したのであります。類に敏詮の事を譽めます。

「其際者でも飛立たなければならん話、それを自若として、而して名族を嗣ぐべき價値が無いといつて御辭

退を爲さる、凡人の出来る事ではありません。實に樓府家の血統たるに愧ぢん大きい所がございます、優れた所がございます、確に見所がございます。」

と口を極めて稱賛する。澄洲先生も敏詮が出世の門出と思ひますから、此を先途と譽めます。

「實に田舎醫者などにして置くのは惜い人物、と夙て思つて居りました。容貌と申し、性質と申し、品行と申し、技術と申し、天晴なものでござります。それに幼少より艱難を嘗めて居りますから、世情にも通じて善く解つて居ります。此の大英國の貴族中でも恐く屈指の人物でござりませう、はい。」

此話を聞くに歡喜を極めたのは娘の鞆緒であります。

「私はどうも白柄さんは凡人ではあるまいと始終然思つてゐた。」と家中を觸れて歩くと云ふ始末。十磅貸した照佐などは今更岡惚をしてゐた手鈍さを悔しがつて疝癪を起して居ります。何に爲よ、澄洲の家内は沸えるやうな景氣で、五色の雲が底の邊に棚引いても、なか／＼是程の騒はありません。

澄洲先生は早虎辯護士を一泊させまして、明日敏詮を同道するやうにといふ事で、其夜は手厚く饗したのであります。席上の話は無論樓府家の事で持切りました。

西洋娘氣質

西洋娘氣質

早虎は業體ではあり、辯舌爽の上に極めて話上手でありますから、物語が面白い、まづ樓府家の家柄の由來から始めて、生活の模様、館の様子、庭園の景色、別荘の結構、當主の性質、秘藏の寶物などに至る迄、樓府家なるものは凡そ如何いふものであると云ふ事の能く判るやうに物語を致したのであります。誰も耳を傾けて面白く聴きました。就中娘の鞠緒は白兔の目ほどの紅玉があつて、それは代々の子爵夫人になるものが頸飾にするのであると聞いた時などは勃々として居りました。聞けば聞くほど道は名族の事でありますから、一から十まで結構すくめであります。敏詮は宛然雲の上を轉がされてゐるやうな心地で、何が何だか更に理が解りません。

「それは如何も大變ですな。到底私などが其邸の主になつて遣つて行くことは出来ません。」
と猶且可喜しうな顔も致しませんから、早虎辯護士は不思議さうに眺めて居りましたが、

「始めてお目に掛りますると同時に然う思ひましたが、實に白柄さんの御容貌は樓府家の血統たることは疑ひありませんよ。樓府家には一件の不思議な事があるのです。それは代々の殿に御容貌の美しからん御方は唯の一人も無いのでございます。すると今度の白柄さんでございますね、依樣お美しくて在つしやる。未だ

最一つ不思議なのは、奥方です、奥方の何方も皆黒いお目なのです。而して又お髪も黒い。是が樓府家の二大特質なのです。」

と何氣無く話して居りましたが、不圖見ると娘の鞠緒が昵と自分の顔を覗めて居る、其の目が同然黒いので、辯護士は思はず妙に感じたのであります。はてな、此鞠緒と云ふ娘と敏詮、何方も若し、美しいのだから、是は兩方で唯は措くまい、定めてもう約束は出来てゐるのであらう。此娘なれば樓府夫人として差支は無い、立派なものだ、それに目の黒いのも詭向であるから、殿に於ても御不承知は恐らくあるまい。是は丁度好かつた、と肚の中で獨り極めて居たのであります。之は然う思ふのも無理は無いので。

さて翌日となると、昨日の今日であります。近所では早くも聞知つて、彼方でも此方でも此噂であります。敏詮は男は好し、第一病人に優しく深切ではあるし、平生の心懸が善いと云ふものであるから、近所の者は皆此出世を大喜であります。交誼のあるものはや續々と詰掛けて賀に参るので、澄洲の應接室は大師の日の川崎ステーションを見るやうな大混雑であります。之に一々挨拶をするので敏詮は茹つて了ひました。午過ぎると一場濟んで障と息を吐きました。今日は左も右も辯護士と同道してロンドンへ立たねばならぬの

西洋娘氣質

西洋娘氣質

でありますから、然う落付いては居られませんので、娘鞠緒には例の大恩があるから、話もあります。一寸顔を云ふので、鞠緒を庭へ呼出しまして、

「借何からお話して可いやら、私は夢を見て居るやうで氣が落付きませんから、悉しい事は追而寛りお話しはいたしますが、改めて先頃の御禮を申します。」

鞠緒は嬉しうな顔をして、敏詮の様子を見てばかり居ります。

「ほんに夢でなければ小説のやうですね。然し何に爲る這際結構なことはございませぬ、貴方は嘸嬉しくしておいでせうね、實にお察し申します。」

「是と云ふのも全く貴方のお蔭で、如何したらは那の御恩返が出来やうかと、始終其のみ心配して居りましたのですが、此度計らん事から出世を致すやうな譯で、これで如何か私の志も達かうと思へば、唯其が嬉しいのであります。甚麼にしてなりと御恩返を致す覺悟でございます。」

「那樣に有仰つては却つて迷惑いたします、けれども白柄さん。貴方は那を其程に思つておらしやるのですか。」

「貴方は命の親ではありませんか、子爵樓府敏詮の命の親ではありませんか。」

「屹度。」と鞠緒は意有りげに男の顔を覗込みますから、

「之を忘れて可いものですか。」と敏詮も立派に答へたのであります。

「其言をお忘れなさんと私は肯きませぬよ。」

「ピストルを持つて海岸へ出やうとした彼晩の事を忘れん限は、私は誓つた言も忘れませぬ。」

早虎辯護士は廊下の口からひよつくり庭へ出やうとすると此體で有りますから、小隠れをして様子を窺つて居りました。

「成程、然うに遠無し、然うだらうと思つた。成程な、離別と云ふので色々話が有るのだらう。歸邸の上は早速此趣を殿へ申上げやう、あの娘なれば必ず御異存はあるまい。樓府夫人として可愧からんよ。」と何でも彼でも其に極めて了つて早虎は獨合點をしたのであります。

其日も暮れて、いよく發足の時刻と云ふので、門前には知己の者が大勢見送に待つて居りますと、旋て辯護士早虎安敷を先に立て、敏詮が出て参ります。其後から澄洲先生、娘の鞠緒と並んで照佐は顔も得擧げ

西洋娘氣質

西洋娘氣質

す飲泣をしてゐる。鞠緒は萎れて居るのでもなく、妙に沈んで、顔の色が青くなつて居ります。澄洲先生は親しい顔をしながら倉皇と動廻つて老人形氣に世話を焼いて居りましたが、辯護士と敏詮の二人はとや門前の馬車に乗移らうと致します。澄洲先生も子飼から仕立てた敏詮でありますから、別となれば有難に悲い、少し眞を塞らせて、

「敏詮、彼方へ行かうとも今迄通りに醫學は捨てずに益研究爲るやうに私は切に望むよ。」
泣聲を張揚げて、「グードバイ」と言ふのは照佐であります。

「白柄さん、又尋ねて来て下さいませよ。」
敏詮は鞠緒と握手を致しましたが、其の片手に持つて居るラムプであります、それは三月前自殺に出るところを廊下で留められた折のラムプもラムプなれば、持手も持手でありましたから、火影に顔を見合せると、二人とも其夜の事が胸に浮んだのであります。鞠緒はとつと思つた顔色であつたが、敏詮は忽ち青くなつて唇まで顔はせました。

車に乗ると齊しくグードバイと云ふ聲を大勢が一度に揚げます。馬車は景氣好く澄洲先生の門を出ました。

(八)

一晩夜汽車に乗通して、餘は迎の馬車で、樓府の邸に著きましたのは午後もはや夕方までござりました。彼此致す内に夜となつたのでありますが、殿は輕からぬ病氣であるので、夜中の會見は見合せて、翌日でありました、敏詮は辯護士に導かれて病室に通りますと、殿は病室で餘命も長からぬ容體で、敏詮の入つて來るのを見まして枕を擧げたのでありますが、それが漸くで、

「あゝ好くお出だ。はい、此度は不思議な事です。乃公もな此通の病氣で何時目を瞑るやら知れんのに、後來の事を頼むものが無いに因つて大きに心痛しました。お前が出雲の孫なれば縁も遠くはないから乃公も満足に思ひます。あゝ、それから早虎、書類は如何であるの。」

辯護士は數通の書類を持つて殿の身近に進みまして、

「はい、出雲様の御誕生、御婚姻、御死去、眞照様御夫婦の御誕生、御婚姻、御死去の證明書、猶敏詮様のと併せて四通是にござります。」

西洋娘氣質

「あゝ然やうかい。それでは今日から敏詮は白柄の姓を捨て、樓府を名乗るやうにのう。敏詮、お前もそつ

と進んでおくれ。」

と殿は敏詮の顔を熱く眺めまして、

「おゝ、樓府だ。」と至極満足の體で、辯護士の方を見向きまして、

「早虎、お前手柄であつたのう、樓府の血統に相違無い。」

辯護士は此言に目禮を致しまして、

「御意の通で、これほど確な證明書はございませぬ。」

「乃公は大相氣に入つた。もそつと近う、……お前に言うて置くが、未だ齡が若い、此樓府家の主となるには齡が若過る、位が有つて、此財産が有つて、齡が若うては、十分注意を爲んと慾の爲に惑される。人が惑はすやうに誘ひかける、別けて婦人がのう。婦人は慎まんければならんよ。お前が此婦人ならばと信じて決して他に心を移さんほどに思つて居る者でもあるかな。」

と問はれたのでありますが、敏詮は胸を据ゑて、

「はい、御坐います。」

聞いて居た早虎辯護士は成程大有りと思つたのでありますが、是は見當違も太甚しいので、敏詮は決して澄洲先生の娘を指したのではない、いつぞや忍冬の花を摘んでおた娘の事を未だに思つてゐるのであります。意中の人が有ると聞けば、甚麽者であるやら殿は其が又心に懸ります。

「後刻にでも彼方に樓府家代々の肖像が懸けてあるから、行つて見るが宜しい。その夫人は一人として樓府を辱しめるやうな者は居らん。のう、お前も樓府の家督であるから、此家名に疵の付くやうな事の無いやう能う注意をしてもらねば成らん。」

と其とは無しに釘を刺したのであります。

殿は敏詮の人品を見て殊の外の歡喜であります。容貌と云ひ、風采と云ひ、言語から行儀まで、天稟の光を有つて、田舎醫者の土臭い所などは氣も無い、誠に氏は争はれぬもので、樓府の世繼に生れ付いたのであらう。此養子なれば心遣り無く目を瞑られると賞美をされるほど、敏詮は嬉しいよりは身を研られる想であります。賭博の爲に主人の預り金を私用して、百計盡きた擧句が淺ましい最期を送げやうとした此體、それが樓府家の殿と仰がれる理のものであらうか。主の金を私した大罪人でありながら、ぬけくとして名族の跡を繼ぐ、

思へば空可憐い、良心に對しても愧づべき事であると、は殿の言を聞き、と浴びたやうに冷汗を掻いて唖んで居たのであります。

生れてから見た事さへ無い廣大な座敷を居間にして、衣食は更なり、葎一本にも榮耀の至つた貴族の生活で、下にも置かれず若殿の待遇を受けるのでありますから、敏詮は何に就けても呼、漬れた此體と、そのみを憶出しては後悔する心の苦痛は謂ふにも謂はれぬので、恰も善盡し美盡したる牢屋に入つて居るやうな心地であります。因で、熟考へました、所詮一日犯した罪は百度千度悔いた所で今更消るのではなから、せめては、其償に今後名族の世繼たるに恥ぢぬぐらゐではならんから、樫府家代々にも無いほどの主と言はれるほどの人にならうと覺悟を致して、病氣の殿には神の如く仕へ、下の者には届くだけ情を懸けて、自身は飽くまで勤儉を旨として、看病の隙々には醫書を繙くと云ふ鹽梅でありますから、邸内の受の好いことは夥しい。殿などの機嫌は一通でありませんが、敏詮を傍に引付けて置いて片時も離さぬといふ始末でありました。それらの爲でもなからうけれど、はや四五日の餘命と見えた病氣も快方とは行ぬながら、此上衰弱の増すやうな氣色も無くて、一月二月と持耐へたのであります。ある朝の事で、敏詮は未だ室に居りま

すると、殿から急の御召であります。

「外の事でも無いが、病中彼此取込んでをるもので、未だ朋友やら出入の人やらにお前を紹介せんで居つたが、折からじや、野内(原名ノルキツチ)伯から次の週の晩餐會の招待がお前に來たから、出るが可いの。」

身に抜ける所があると、誰に限らず曠の場所へは出たがらぬのが人情、敏詮も伯の晩餐會と聞いて尻込をしたのであります。

「折角でございますが、御病氣中のことでございますから、私は當分外出は見合せたいのでございます。」

「いや、それは可うない、是も務の一つじや。乃公の代理としても出てもらにはやならん所を、伯から懇篤にお前を招待したのじやから、其に對しても不登するは禮でない。是非行くが宜しいの。」

「はい、然やうなれば孰とも御意次第でございます。」

「後來懇親を願はにやならんものじやから、行くが可い。而して伯の令嬢に逢うて見るのじや。お前は心に定めて居る婦人が有ると云ふ事ぢやが、此令嬢を一度見てもらひたいのじや、乃公は此齡になるが、伯の令嬢ほどの美人を見たことが無い。能う見て、お前の思うて居る美人と何方が好いか、一番較べて欲しいのじや。」

西洋娘氣質

と殿は瘦衰へた顔で莞爾と笑ひました。

(九)

野内伯の邸は樓府の館から一里許隔てた所にござります。敏詮は殿の言でありますから進まぬながら參會致しました。

野内伯は年輩五十餘で、一目して貴族と見ゆる風采の、極めて温和な、大兵肥満な人物で、奥方は瘦削けて弱々とした、人の善さうな婦人であります。大の娘自慢で、敏詮が來ると直に娘を紹介しやうといふので、はや大分來賓の見えまする大廣間へ案内を致しました。途々二三の客にも引合せながら廣間の隅の密際に伴れまして紹介したのが、噂に聞及ぶ令嬢の征矢子(原名ソフア)であります。其顔を見ると敏詮は思はずアツと聲を出しました。紹介されたのは今が初度、征矢子といふ名を聞いたのは纔に五日ほど前のことであるが、其妻は片時も忘れぬ、彼の忍冬の花を摘んで居た令嬢其人であります。

初對面であるから話も有りません、二言三言語を交して征矢子は其場を立ちましたが、敏詮は唯茫然として何處までも其姿を見送つて目を離しません。征矢子は東道振に彼地此地と行て客の取持を致して居りましたが、

西洋娘氣質

麥魚に鉄を投げたやうに征矢子の行く所へは四方から燕尾服を着た連中が陸續と寄つて來るのであります。旋て晚餐が始るといふので、座敷を替へて一同テーブルに就くと、山海の珍味に美酒の数々で、盛なる饗應でありましたが、敏詮は何が出たのやら、食べたのは何やら、陸に覺の無いくらゐで、大客の事であるから非常に賑なもので、皆歡を盡すのでありましたが、其中で敏詮は人と話を爲やうでもなく、チビチビと飲みながら唯令嬢にのみ心を奪れて居りました。食事が済むと、今度は舞踏會を始めるので、一時ばかり休憩と云ふので、一同又大廣間に復りましたが、敏詮は征矢子の傍を通ると一寸顔を合せたので、征矢子は愛相に笑ひかけましたから、敏詮は其を機に立留つて、

「私は貴方には一度お目に掛つた事がござります、未だに忘れません。」

と話しかけると、征矢子は不思議さうな氣色の中にも可憐らしい笑顏をして、

「おや、然やうでござりましたか、私はどうも覚えませんが。」

「然やうでございませう。私の方ばかりでお見受け申したのでござりますから、御存のない理でござります。夏の朝でありました、貴方が花を摘んで在つじやる所を。」

「何地どこでもございます、私は花が所好すきで方々へ採りとに参りますから。」

「所はランデエルの海岸道の坂の上で。」

「あゝ。」と征矢子は手を拍ちました。

「あのランデエル！景色の宜しい所でございますのね、参つたことがございます。藤浪ふじなみと申す知己しよちがあるの
でございますから、其處へ泊に参つて居りました。」

「那時私は直にお傍を通りまして、餘り餘念無く摘んで在つしやいましたから、暫く立留つて拜見して居つ
たのでございます。」

敏詮は意あり氣に言たのでありますが、征矢子も其謎が解けたと見えて、一寸顔を根あかめました。

「あら、お人が悪いぢやございませんか。」

舞蹈ぶたよが始る様子で、追々人が起ちます。

「もう始まるやうでございますから、彼方へ参りませう。」と征矢子の起たうとする時、敏詮は少し進み
寄りまして、低い聲で、

「どうで一度組になすつて下さいまし。」

「どうぞ。」と征矢子は頬を桃色にして俯うつむきました。

(十)

敏詮は此夜會から還りましても、殿が自慢をした令嬢の事に就いて格別の話も致しません。然しながら其後
は折々野内伯の邸やしきへ遊びに参ります。伯夫婦に於ても段々敏詮の様子を見るに就けて、此人物ひとならば可愛
い娘の婿むこにしても可は慚づかしい、願ねがは此人をも内々懇望して居りましたが、娘の口から一向敏詮の噂も出ま
せん。餘所目よそめには二人は唯親しい朋友ぐらゐに見えたのでありますが、敏詮の心中は那樣生易なまやしいことでは
ありません、如何にしても此令嬢を一生の妻に爲せんければ子爵になつた効も無い、是非此戀は協あへねば措はか
ぬとまでに思込んで居るのでありますが、何に爲せよ殿と云ふ翌日あすをも知れぬ大病人を抱かへて居るのでありま
すから、今は嫁の話などを持出すべき場合でない、實は憤いんで居るのであります。

其内に野内伯親子は佛蘭西フランスから獨逸ドイツに漫遊まんゆうに出たのであります。敏詮は今では樓府家の若殿といふ位置も定
つて、自身も邸に落着きまして、段々家風も解り、殿の代理をも立派に勤めるやうになつて、自由も利いて参

りましたから、例の恩借の五十磅に手厚い禮狀を添へて、鞠緒には寶石の髪飾、照佐には玉入の腕環、其外喜びさうなものを種々一箱づゝ、澄洲先生にも相應の贈物を届けたのでありますが、一家の恐悦と云ふものは譬へむ方ありません。大病人があるやら、殿が病中に捨てらあつた用事を形附けるなどで、出る暇と云つても無い故、今暫くは不本意ながら無沙汰を爲る。又此方へ御招も致したけれど、右のやうな始末で何分取込中の事であるから、いづれ形附次第寛りと泊掛に御出をも願ふ心得といふ手紙でありましたが、鞠緒や照佐は敏詮が今では甚麽に立派になつたやら、それが見たいと、贈物を出して見ては其噂のみで暮しました。殿の命數も盡きて、終に敢無くなりました。臨終にも敏詮の手を握て、更に此世に思遺す事もなく、結構な往生を遂げたのでありますが、それに就けても敏詮の内外の受は益宜しいので、樓府家は繁昌との噂でありました。さて敏詮は富主であります。十萬圓の歳入で、地所田畑が幾個所と無く有つて、立派なる館に住んで、家には貴重寶物類が傳はつて、身分は子爵と云ふのでありますから、敏詮は殆ど世に此上の望は無いのであります。唯一日も早く野内伯の令嬢を嫁に迎へて、可愛い子どもを生んで、家内睦しく暮したい念のみでありましたが、不相變寐覺の悪いのは五十磅の一件で、それも大罪ながら謂はゞ若氣の快で、一旦

は主の金を私消したには違無いが、鞠緒の情を以つて即座に償つて了つたからは、強ち私消して主に迷惑を懸けた次第でもない。其上に借りたものは奇麗に返辨して、然るべき禮もしたことであれば、其の恩に背いたのでもなし、何が心に疚しい所のあるのでもない。若氣の快と云ふは誰にしても有る事と考へて見れば、然して今更苦に病んで明暮の氣懸になるほどの事でもないと諦めては見るもの、左右に其が忘れかねて、未だ何ぞ古疵が残つて居るやうな心地がして、敏詮は終始氣が霽れません。

一旦犯した罪は到底消えるものではない。成程其贖も爲れば始末も爲たのであるから、此上は恁云ふ事があつたといふ事をば世間へ知らせたくない。で、之を知るものとは鞠緒一人、鞠緒の口から洩しさへ爲ねば、世間に知れやう事は無い。鞠緒は秘密を洩すやうな女ではないから可いやうなもの、其秘密を知つてゐる者が一人でも他に在ると思へば、自分の名譽は其者の手に握られてゐるも同然、吁、心地の快くない理だど、敏詮は得る謂はれず之を鬱陶しく思つて居るのであります。

間もなく野内伯の家族は漫遊から歸つたので、敏詮は早速見舞に参りますと、伯夫婦は知己の中でも格別敏詮を好いて居るのであるから待遇が宜しい。然し生憎去り難い用事が有つて他出するが、ゆるく遊んで行

西洋娘氣質

つてくれと伯は馬で出掛けました。旅歸りと云ふので入換り立換りの來客でありますから、奥方もおちく敏詮の對手ばかりは致して居られぬので、娘が庭に居るから出て遊ぶやうにと中座を致しました。敏詮は其所望む所と、奥庭へ出て彼地此地尋ねますと、大な栗の樹の陰に噴水の仕掛けてある其傍に居ります。征矢子は敏詮の顔を見ると笑ひかけながら手を出します、敏詮は其手を執つて熱と握手を致して、

「大相御寛りでございますでしたね、此月始には御歸であらうと私はお待ち申して居りました。」

と敏詮は征矢子の顔を見るのが何よりの樂事なのでありますから、そはくして様子花落着きません。栗の樹の陰に四阿があります。まあ、那へといふので、征矢子と一處に腰を掛けたのでありますが、此時ばかりは五十磅の一件も何も忘果て、唯愉快で胸が破裂するやうであります。是から敏詮の古里ランデルの昔話になりましたが、征矢子は不思議な縁に思ひまして、其處に居た事情や、其時分の事を話して聞かすやうにと云ふので、敏詮は有體に物語を致したのであります。無論鞠緒の事も話したのでありますから、誰しも然う思ふのは當然で、關係が有つたのであらうと云ふ疑は征矢子も起したと見えて、

「その美しい鞠緒さんといふ方が貴方に御深切だったのでございますね。」

其と口に出したところでないが、征矢子も實は敏詮を深く思つて居るのでありますから、若し其娘と約束でもあるようなら自分の願は協はぬ譯、因で聞捨にならぬのであります。敏詮も然う取られては迷惑と思ふから、

「深切にはしてくれましたが、唯其限の事なのです。お話申したやうな性質の婦人ですから、私は極好か

るので、それは世話になりましたから未だに恩は忘れませんけれど、私は人物は好かんのです。」
之を口々に敏詮は着々自分の意中を微見したのであります。養父の思服中でもありますから、打明けて言ふことは遠慮したのであります。けれども段々の話の中に征矢子も男の心は解りました。敏詮も其氣色を曉りましたから、

「私の始めてお目に掛りましたのは夏の末でございましたから、此末になりましたら、是非貴方にお訊したいと思ふ事が一つあるのでございますが、宜うございませうか。或は失禮な事を申すかも知れませんが、宜うございませうか。」

征矢子は唯一言イエスと答たのでありましたが、尋常のイエスとはイエスが違つて念入極製のイエスであつ

西洋娘氣質

たから、敏詮は餘りの嬉しさに我ながら可憐しいほど胸を轟いたのであります。

すると、伯爵の家族は又ライドと云ふ所の貴族から招待を受けて、一月ばかり遊びに出掛けるのであります。其處は二三十里もある處で、其貴族の領地に湖水がありまして、夏は風景も好し、涼しくもあり、別けて當年は湖水際に別荘を改築したと云ふので招待を受けたのであります。或日敏詮が遊びに参ると此話でありましたから、太く失望して、

「それでは又一月ばかりお目に掛られんのでございませぬ。」

「私は行きたくないのでもございませぬ、義理なのでございませぬ。成丈早く歸るやうに致します。」

「是から一月と云ふと、あゝ、夏も末になります、末になると先日もお話申した通り御訊することがありますよ。宜うございませぬか、お忘になると私は背きませぬよ。」

「忘れるものでございませぬか。」

「彼方へお出になつても、時々はお便を爲すつて下さいな。一月もお目に掛らん上にお便も聞かなかつたら、私は逆も寂しくて居られません。私からも手紙を上げますから、貴方からも是非……。」

「屹度ですよ。」

「屹度」と言ひながら敏詮を見る目の沙は情を含んで滴るばかりであります。

「屹度ですな。それでは今日の別の紀念と、それから又屹度といふ證據に何ぞ下さいな。」

征矢子は四邊を胸しました。四阿の後の石の陰に白薔薇の半開が在りましたので、其をば折つて来て、黙つて男の手に持せました。敏詮も黙つて其薔薇に接吻したのであります。

(十一)

野内伯の家族が發足をした翌日、彼の澄洲先生からの書面で、此月末にはいよく泊掛で尋ねて行くこと云ふ案内でありました。夙て敏詮からも是非遊に來てくれるやうに、と音信の度に言遣るのであります。先生も緊用の軀であるから、其内にくくどばかりで遷延になつておたのであります。近來少しく健康を害して轉地療養の必要が起つた所から慙く速に思起ちましたので。就いては娘鞠緒も同道したい。自分は家業の爲に醒醒して、若い時新婚旅行をした以來嘗て遊山旅をしたことも無い、即ち二十年來保養に出た事がな

いのであるから、此度の旅行は最も愉快に思ふ。別けて鞠緒は天へも昇るように樂にして居るなど書いて参つたのであります。因で今は十萬圓の歳入のある貴族たる敏詮は、此舊主人と恩人とに對して如何なる待遇をしたものであらう、何でも手一杯に出来るだけの執持をせんければならぬと大きに考へました。

さて娘の鞠緒も来る、久しぶりで恩人の鞠緒に逢ふと思ひますと、敏詮は何と無く可厭な心地になりまして、欺待の用意をする氣などは失つて、可恐い目に遭される日の近いたやうな想、有繫に昔、馴染の顔を見るのは嬉しいが、鞠緒に逢のは如何も好ましくくない。それが決して恩人の鞠緒を嫌ふのもなければ、舊惡を知つて居るといふので憎むのでもない。謂はゞ、敏詮は始終五十磅の一件を心苦しく思つて、如何にもして其事を忘れたいくと、胸の莞結の解ける隙も無いくらゐでありますから、此で鞠緒の顔を見たら、折角少しは忘れた事までも憶出させられる、その辛さを考へたものと見えます。

然し思直しまして、其は其の己の事、今樓府の殿といふ身になつたも其人の恩と謂はなければならぬ。鞠緒に對しては十分感謝の意を表する時であるから、鞠緒が満足して氣の毒がるほどの饗應をしなければ義理が濟まぬと云ふので、館の内でも最も好い座敷を鞠緒の室に充てまして、先生の室にも可然きのを見立て、それ

掃除を爲せまして、裝飾なども疎略の無いやう自身に指圖を致して、鞠緒の爲に一輛の美しい小馬車を新調致して、馬も温順いのを二頭買入れて、是が泊つて居る内は遊歩に用ゐて、歸去には直に土産にならうといふ趣向であります。鞠緒は花が所好でありますから、財に飽して珍花の種類を聚めて、之を幾鉢となく其室に飾りました。

約束の日の夕方澄洲先生と鞠緒の二人は無事に着きました。待設けた樓府子爵は館の入口に出迎へて居りましたが、門を入つて来る二人を見ますと、相見ざるは僅の間であります、思つたよりは人の姿の變つたのに驚きました。

澄洲先生は急に年が寄つて、老の衰といふ様子が見えます。其に引換へて鞠緒は數段も標致が上つて、英語で云ふと「ブライト」即ち輝くやうに美しいのであります。

「いや、廣大な御住居で、驚き入りました。」

と澄洲先生は肝の潰れたやうな顔をして入口に行んで居ります。鞠緒は顔を見合せると笑を含みまして、「ラレデメルに御一處に居りました白柄さんとは私には如何しても思はれません。然かと思つて夢でもなし、

何だか唯不思議で、貴方も始めて此へ入つた時は然ぞ不思議でございましたらうねえ。」

「それはもう、始めて先殿に會ひました時などは何が何だか解らんでした、唯もう不思議で。」

澄洲先生も鞠緒も話には聞いて居たが、話は毎も實際に五を掛けて二で割つたものと、高を括つて居た譯ではないが、これ程とは想はぬのでありましたから、屋敷の結構を見ると啞然として、先生は其驚嘆を裏みかねた氣色でありましたが、鞠緒は例の氣性であるから故と自若として居りました。

敏詮の目には見違へるばかり鞠緒は美しくなつたのでありますが、鞠緒の目に敏詮の様子の變つたことは、なかく其所ではありません。如何見ても生拔の貴族で、内の代診生で此間まで診察所を奔走してゐた人とは考へられんくらゐ立派なものでありました。代診生で居た時分は好い男も糸瓜も無い、首から下目に見て、道塵人物の嫁になる娘もあるものであらう、と冷々淡々として氣に留めなかつたのであるが、今樓府子爵として始めて之を仰ぐと、信に多く獲易からぬ美男で、風采と云ひ、調子と云ひ、適れ貴族中での貴族と目覺しく思ひました。

「貴方大相お變りなさいましてねえ。」

「はあ、如何變りました。」

「大相大人染みて。而して重々しくお成なすつてよ。」

旋て二人は設けの座敷に案内されましたが、夙て用意に用意致して置いたのであるから、程無く其へ並びまする献立の結構窮極は謂ふにも及ばず、酒から水菓子に至るまで澄洲先生の凡そ所好とあるほどの好物を寄せたのでありますから、先生は極樂で有卦に行つたやうな心地、無上に悦喜して大満足、大愉快の極でありましたが、鞠緒は心中少しく不平でありました。成程自分たち親子を待すに於ては痒い所へ手の到くと謂ふよりは猶一層の配慮で、恐く此上の待しやうは有るまいと思ふほど申分は無いのでありますが、それは金錢の力を以つて爲れば孰も成ることで、歳入十萬圓の貴族の敢て難しと爲る所ではない。舊主人の娘、二つには大恩人のおのれに對する敏詮の仕打が、何と無く然で無いやうに思はれたので。之は固より形に顯れて、彼所を慙しなかつた、此所は那するのではなからう、と指して如何が然でない仕打といふ所は無ないのであるが、今では子爵になつて歴々の貴族である、お前は高が田舎醫者の娘ではないかと云つたやうな肚が有つて、外面だけ昔に變らぬ様子をして居るらしい、と鞠緒は甚だ氣悪く思ひましたから、膳に着いてゐる間も餘り

楽しさうにもなくて、類に敏詮の様子に注目して居るのであります。

敏詮の方でも胸に忘れられぬ例の件がありますから、奥歯に物の介つたやうに何と無く鞘緒が氣になる、因そこで自そのから目を離さぬやうにして居たから、直に此様子を見付けると、心頭むなごころに釘を打たれる如き思でありました。

澄洲先生は自分の息子が出世をしたやうな氣で、何でも御辭儀無しに頂戴して、榎府の殿たるものに親の如く敬うやまつひ冊まがしれるのが何より嬉しいのであります。

翌朝は敏詮に案内されて奥庭を散歩しながら、

「實にお前さんぐらゐ好運かういんの人は世間に無い。持つべきものは親だ！此結構な館、此廣大な庭、是が誰のかと言へばお前さんの物だ！噫、好い親御を持つたのがお前さんの仕合、持つべきものは親だ。」と類に感歎しては、見られて間の悪いほど敏詮を眺めるのであります。

「全く親の御蔭でございます。残念なのは其の親たちを生うかして置いて、一目でも此邸やしきを見せたくてございまして。好ければ好いに就けて人間と云ふものは慾の出るものでございまして。然し御覽の通り立派な住居ではござ

います、貴族的おほげふすに大業過おほげふすて、それに又住馴れん所爲しよゐもありませうけれど、まことに寂さびしくてなりません。」

「何有な、それは些ほんの當分の事で、恚いらして立派な邸を持つてゐるからには立派な奥方を求めるのも容易やすさ。然すれば寂しいも何も無くなるから、早う奥様を持つたら可からう。」

之れを聞いた敏詮の心中では既に野内家の征矢子といふ美人が定つてゐる。此月の末には表向おもてむき申込まをこむ意、申込んだらば常人は勿論、両親にも十が十まで異存は無からうから、先生の深切は忝かたじけないが、その心配は無用にして欲ほいと、實は氣の毒でなりません。然うとは知らぬ澄洲先生は懇々と説得いたします。

「若い者が結婚を急ぐは宜うないけれど、それは身分の極らん内に係累けいろを拵しらへるからで、お前さんの結婚せんければならぬ必要のある身分なのだ。此廣大な邸に住んで、財は有る、名譽はある、何不足無いと謂ひたいが、可然たしかき奥方の無いのが是が何よりの不足と私は思ふが如何であらう。早く美しい嫁を迎ひ給へ。此榎府家ならば幾許でも美しい嫁は来る。一日も早く氣に入つた婦人を奥方にして、愉快な生活をしたら可いではないか。這こん立派な第宅うちに住んで何不自由無く暮して居ながら、寂さびしくてならんなどは怪あやしからん事

西洋娘氣質

だ。世間に美しい娘は幾多も在る、而して甚麼に美しい娘でも樫府子爵が所望とあれば、否を言ふものは唯の一人も無い、それは私が保證する。」

何の間に來たのやら鞠緒は直傍の噴水の畔に立つて、此話を聴きながら木の葉を撈ては水の中へ投込んで居たのであります。澄洲先生の話が切れたので敏詮は俯いておた顔を擧げると、思も寄す鞠緒が其處に居たので偶然顔を合せると、愕然と一目見られた敏詮は、宛然氷の刃をば心頭深く突込まれたやうに感じたのであります。何故に自分は那樣に感じたのであらうかと考へて見たが、我身ながら更に解りません。尤も鞠緒の面前に居ると、何か不安心のやうな、氣味の悪いやうな心地で、未しも機嫌を好くされておれば、それで幾分か氣丈夫に思はれるのであるが、鞠緒は昨日抑も到着してから通して餘り機嫌が好くない、と云つて不興らしい顔色をして居るのでもないが、何か頻りに考込んで、甚麼に愛相をしても然ほどは喜ばぬので、敏詮は益々氣味が悪いのであります。

時に不圖胸に浮んだのは、先生が切に結婚を勧められる、成程今のおのれの身分であつて見れば夫人が無ければならぬのであるから、老人の心配されるは尤であるし、且又其言はるゝ所に底意が有るとは考へられん

けれど、此場の様子が何と無く譯有りさうで、若や此鞠緒を娶つて欲い謎ではあるまいか。萬が一にも那樣事でもあつた日には、自分の不幸は之より大なるは無しで、縦や征矢子といふ戀人が無かつたにせよ、自分は決して鞠緒の如き娘を樫府子爵夫人に爲やうとは思はぬ！命に懸けても此縁談は破らんければ措かぬ。大恩人でこそあれ、夙て鞠緒の人物は虫が好かぬのに、其者と添はんければならぬならば、寧ろ自分は甘んじて此地位を棄てる。心に染ぬ鞠詮と夫婦になつた日には敏詮が貴族になつた効は無い。況んや身にも世にも換られぬ征矢子といふものが有る限は、我心は鐵の巖の如く一盤たりとも動されることではない。然し其父は幼きより世話になつた親同然の主、其娘は今日有るを致せし大恩人であれば、見込れたが因果で、其形を付ける難局に當つて、脂を搾られるほどの愛き目を見ずは濟むまい。唉、どうか然云ふ苦勞の無いやうにと、敏詮は思はず冷汗を掻いたのであります。

然う想ふと先生の結婚の話も爆裂彈の前を通るやうで、一つ錯つたら甚麼怪我を爲るかも知れぬと、敏詮は故と語頭を轉じて、

「あゝ、鞠緒さん、貴方にお目に掛ける物があるのです。」

西洋娘氣質

「何んで御坐いますか。」

「好い物です、屹度貴方がお喜びになる物です。」

「何でせう？」と有繫は娘氣で鞆緒は嬉しそうに驕然と笑ひました。

「まあ此方へ入つしやい。先生も入しつて下さい。」

「何かね。」

「何でせう。」

「好い物です。」と敏詮は二人を導いて表門の方へ参ります。

支關の前を横ぎつて、沿いて曲ると、楡の大木が二本並んで傘を開けたやうに涼しい蔭を成してゐる下に厩がありまして、其隣に今を盛と咲いてゐる一列の護謨の樹を隔てゝ馬車小屋があります。其處に参ると敏詮は二人の馬丁を呼んで、新しいリンネルの覆を被けた小形の馬車を曳出させまして、その覆を取らせまると、すつさりと華車に仕立てた婦人用の遊歩馬車であります。内は薄樺色の天窓絨張で、外は光澤出しの銜色髹、車輪は惣銀鍍であります。眞新しいのであるから水の滴るやうに美しい。敏詮は鞆緒を見返

つて、

「是です。何ぞ珍しい物をと色々心配いたしましたのですが、別に思付もありませんでしたから、是に致しました。一寸新形で當時ロンドンでは大層流行して居るさうです。唯今馬を付けさせますから、此近邊を見物

旁一番乗試を爲すつて御覽なさいませ。」

剛情に見識の高い、滅多に物に驚いた顔を爲ぬ鞆緒であります。馬車の贈物には肝も少しは潰れたので。

「まあ、好いのでございませぬ、私は此天窓紙の色が大好。誠に意氣で高尚で、變つた好い形ぢやありませんか。」

と馬車の周圍を廻つて彼方此方と飽かず眺めて居ります。

「之を鞆緒に下さるのかい、それは如何も痛入つた。有繫は貴族の贈物は異つたものだ。はあ、是がロンドンで行る新形、なるほどな、種々と工夫をして、好く出来て居る。」

と先生は車の出来に感じたのか、貴族の贈物の思切つたのに感じたのか、敏詮の志に感じたのか、左も右も切に感じて居りました。其處へ馬丁が牽いて参つたのは、銀金具の馬具を着けた鹿毛の對のポニーといつて

西洋娘氣質

小馬であります。

「是は良い馬だ。此馬車には此馬でなければならん。然し是は逾大相な贈物になつて来たわい。鞠緒、如何だ。」と先生も今は怏へかねたと見えて、髭を撫でく馬車の周囲を廻り始めたのであります。鞠緒は未だ馬を付けて居る内から車に乗つて待切つて居りましたが、馬丁が轡頭を執つて二歩三步出ると與に徐に手綱を搔繰りながら、

「それぢや一寸行つて参ります。」と敏詮に挨拶をして馬を追ひますと、先生は其後から足早に跟いて玄關前まで来ると、車は丁度前庭の半を軋つて行くのを、圓柱の側に立つて門を出るまで見送つて居りました。

鞠緒を出して了ふと敏詮は先生と與に内へ入つたのであります。彼此一時間ほど経つと歸つて参りましたが、ランデエルの留守宅から来る筈の手紙があるので、門を入る時郵便函を見付けると、車を下りて函を開いて見ました。六通ほど受信が有つたので、家郷からの有るかど調べて見ますと、皆于爵へのでありましたが、中に一通分と董花の匂のするので、目を留めて見れば厚紙の小形の状袋で、手跡は女文字

であります。我邦とは違つて男女の交際する歐羅巴であるから、女の玉章、更に怪くない。けれども状袋の小形で厚紙が惜い、董花の匂に至つては逾惜い。鞠緒は其文を眺めて熟と考へて居りましたが、旋て六通の手紙を持つて又馬車に乗つて、玄關へ横付にすると、車の音を聞付けて敏詮は出て参りました。

鞠緒の渡す書状を受取つて、一々上書を見て行く中に例のが出ると、敏詮は然も珍しげに打目成つて居ります。その様子が尋常でないと思んだから、鞠緒も其文と敏詮の顔を一様に睨んで居りました。

此文は彼の戀人の征矢子が旅先から寄來したのでありますから、敏詮は手に取るからにゆらぐ玉の緒で、未だ中を見ぬ前から可憐い面影が目立添つて、爪に打香る董花の匂を嗅げば、つい傍に其人が居るやうな心地も致します。熟と鞠緒が看入つて居るとは知らず、旋て顔を擧げると目と目を見合せたので、敏詮はぼつと顔を赧めて、慌忙しく其文を他の中へ突込んで、

「那邊まで行つておらした。」と無理に其場を取繕はうとすれば、變な様子と見て取つた鞠緒は故と皮肉に、

「お友達からのお手紙ですか。」

西洋娘氣質

「いえ、何、近所の邸で茶話會を催すとか云つて居ましたから、その招待でせう。」

「へえ。」と胡亂らしい生返事をしながら鞠緒は男の顔を尻目に掛けました。敏詮は悚然として身が縮

むやうに覺えて、續く語も無いのでありました。鞠緒は不興な顔をして其儘衝と奥へ入つて了りました。

文の件は然し是限事濟になつたが、鞠緒は益面白くなさうな顔ばかりして居て、如何にも敏詮は誠に機嫌

が取難い。歐羅巴では禮として婦人を大事に爲なければならぬのであるから、澄洲先生と鞠緒と恚う親子し

て来て居れば、正客として娘の方を立てねばならぬのであります。其正客の機嫌が悪いのであるから主たる

者の氣の揉めることは一通りでない。まして例の恩人と云ふ容易ならざる肩書が付いて居るゆゑ、それでは

益濟まぬ。敏詮の意では少しでも鹿略の無いやうにと残る方も無き配慮で、勤めに勤めて禮を盡して居

るのに、何等の不足が有つて鞠緒は樂まぬのであるか。先生は道塵に丁寧に爲れては却つて氣が窮つてなら

ぬから、何處までも昔馴染で構はれぬ方が勝手だと言はれて、十分だくと口癖のやうに満足して居られ

るのに、鞠緒は何を思つて居るのか、五十磅の恩に對して是では未だ不足であるのか知らぬ。

是でも不足とあるなら未だ幾許でも出来るほどの事は爲やう。自分が今日樓府子爵たるを得たのも、畢竟鞠

緒が五十磅の恩であることを忘れぬ限は、彼の望むほどの事、而して自分の身に稱ふほどの事は何なりと爲やう、それを吝む敏詮ではない。然し是迄に盡しても一向不足らしい顔をしてゐるとは、見下げ果てた穢い了簡、始に一命を拯つてくれたのは、決して剩錢を取らう意で爲たのではなからうに、今更恩を賣るとは情無い、那塵に食らすとも、此敏詮には血もあれば涙もあれば、爲るだけの事は辭まれても爲すには措かぬ。其が解らぬ敏詮と思つて居るのか、但しは女皇の如く敬はぬのが不足なのか。吁、今となつて見れば由無

い者に拯られたが敏詮の身の因果と謂ふのもあらう。一生忘るべからざる大恩人ながら、其名を口に爲るさへあた汚はしい下司女と、然らぬだに虫の好かぬのが一層劇甚しくなつて、敏詮は爲に寢食をも妨げられ

るほどの思でありました。

(十二)

爾來二日ほど過ぎての事で、朝飯を了ふと鞠緒は椅子を起ちながら、敏詮に向つて、

「貴方、樓府家の御代々の肖像を拜見したいのですが、御案内下さいませ。」

今朝は可珍しく鞠緒の機嫌が悪いのであります。

西洋娘氣質

「はあ、御案内致しませう。」

「私御代々の奥方の肖像が拜見したいので。而して種々其の方々の御話を伺つたら然て面白からうと思ひまして。」

「さあ、昔の貴族の事でもありますから、随分異つた話が種々有るやうですけれど、私は詳しいことは覚えて居りませんが、一遍はお話を致しませう。先生もお出になりませんか。」

「お父さんは畫などは好かないのですから。」

「私だつて不風流な、畫を好かんことは無い……………」

「それでも不斷畫の話などはお嫌ひぢやありませんか。お父さんが一所だと直に飽きておしまひなすつて、他を遺して藤直先へお出なさるから、氣が急いで身にならないから可厭よ。」

「は……それぢや今日はお父さんは諭旨免官としやう。」

「何有、宜しうございます、入らつしやいましたな。」

と敏詮は鞠緒と二人限は甚だ好ましくないから先生を連れたいので。鞠緒は胸に一物有るから無理に遣いて

行かうと爲る。

結局先生は又いづれと云ふので、二人して行くことになりました。

悠云ふ貴族の邸、又は物持の家などには、畫院と稱へて、所藏の油畫の額を掛聯ねた展覽室が、別に一間設

けてあるのでございます。樓府家のは二部に分れて、一部は人物山水花鳥などの名畫、一部は先祖累代の肖

像を飾つて在ります。敏詮は愛相もこそも盡果てた鞠緒の案内を爲るのは、可厭で、克はぬけれども所望

とあるので、色には出さぬが心の中は厩所の歩で、溢々ながら連立つて畫院に入つて参りました。

鞠緒は二面三面見て行く内に大きく半身に畫いてあるのを指して、

「此御方はお美しいぢやありませんか。」

「それは四代の夫人で卷照（マクダリン）と申したので、此夫人に就いては芝居のやうな話が有るのです。

深い事は知りませんが、此屋敷に輿入をしたのは親兄弟に逼られたので、實は外に命を懸けた戀人が有つた

のださうです。

因で操は破れる、添ふには添れぬのを苦に病んで、嫁に來は來たが、其日から全一年も疾通して終に歿つた

西洋娘氣質

西洋娘氣質

さうです。男子でも婦人でも心に染まぬ者と義理などに逼つて結婚したらば、其苦痛は死ぬにも易へられぬでせう。互に愛して居らなければ、人間第一の樂と云ふ結婚も忽ち人間第一の苦になります。

鞠緒は一向那樣話は氣にも留めぬ氣色で、他の顔を見ながら徐々と進んで行きました。急に立止つたのは、眞珠を飾つた黄金の輪冠をした美人の像の前であります。美しいことは凄く、男勝りの氣象は眉宇の間に飛動して女ながらも凜然として一癖ありと見えます。

「是は何方ですか。」

「あゝ、是です。是は眞照（マチルダ）と云つて、六代の夫人ですが、榎府家代々の中での名物で、此人に就いては面白い履歴があります。」

「然うですか。此奥方は私所好。女でも恠う確乎した所が無くては可けません。好いお目ね。」

「實に才氣の溢れた凄くお目です。」

「好い目ぢやありませんか。」

「而して面白い履歴といふのは甚慶事なのでですか。」

「それは此肖像で見ても大概解りますけれども、此夫人の氣位の高かつたことは非常なもので、何にしろ當時並ぶ者も無い美人であつたさうですから、戀慕ふ者は數知れんほどあつたのですが、皆其の氣位の高いのに恐れて、誰一人思切つて言寄る者は無かつたさうです。此凄々しい顔ですから随分然うであつたらうと思はれます。で、又其數の中で一人も此婦人の意に充ちた人は無つたといふ事實なのです。所が六代目の殿は平馬（ヘルバート）と申したが、此殿も眞照を一目見ると同じく戀の俘となつて了まつた。苟も貴族と生れた効には是程の美人を手に入れたい、と大きに心を碎いたのでした。有繋の眞照も殿にばかりは一目置いて、始めて此人ならばと思染めたのですね。

成程那樣な様子も見込んでおはなし、又自と噂も立つて、榎府子爵が勝利を得たと云ふ話が耳に入らんでもないでしたけれど、殿は容易に信じなかつたのであります。それは其理で、聞ゆる歴々の貴族が大勢蒐つても靡かすことの出来ない美人が、先からも愛して居やうなどは。然し然云ふ事情でありましたから殿は益々力を得て、一生の手柄にしても必ず従はせて見やうといふ念は熾であつたが、依據其の氣位の高いのに恐れた組でしたから、滅多な事を言出して恥でも掻いたら榎府家の家名を傷けると、大事に大事を取つて、靜に

西洋娘氣質

西洋娘氣質

様子を見て居つたのです。

然うすると、或時の事、夫人が花園に出て紅薔薇ベニバラを探つて居る所へ行合せました………御覽なさい、書の隅に薔薇が一輪描いてありませう、是です。殿は傍に立つて薔薇を探るのを見て居りますと、夫人が此薔薇を殿の前に出して、私が之を五十年の間持つて居やうとも、誰一人與れと言ふものはありますまい、と慥たしかう言つたのですね。」

鞠緒は先から壁に片臂を寄せて聞惚れて居りましたが、

「へえと、面白いのね。殿は其時何とお答へなすつたでせう。」

「どうも何といふ意味だか解らなかつたのです、全で謎なぞのやうなものですものな。」

「然うですね、謎ですね、一寸解りませぬわ。」

「解らんです。殿も解らんかつたから、其は何故ですかと問返したのです。すると夫人の言ふには、他ひとは私を氣位が高いと思つて、誰も與れろと言出す勇氣が無いのです。私も亦他の人には遣りたくない、貴方が買つて下さるなら私は上げますけれど、と夫人の方から求めた譯なのです。」

「あゝ。」と鞠緒は喜んで思はず足拍子あしふしを踏みました。

「因よこたで立ろに結婚の約束が出来て、當時絶世せつせいの美人と聞えた眞照は遂に樓府夫人になつたのです。」

「實に面白いお話ですね。」と鞠緒は此物語の訖おはるのを待つて次の顔面の前へ進みましたが、如何なる理か、速に顔の色を蒼くして、物も言はずに熱と考始めたのであります。其次の顔、次の顔と進んで参りましたが、全然屈托くつたくして了つて、最早書には目の留らぬ様子で、突然顔を擧げると敏詮を見返つて、

「貴方は如何お考へなさいませぬ、今の夫人の爲すつた事を。」

不意を撃れて敏詮は少しく狼狽まごつしました。

「如何とば。」

「女らしくない………はしたたないとお考へですか。」

「さあ、何と謂つたら可いでせうかな。婦人の所業としては如何あらうかと思ひますが、那の夫人の性質としたりば………」

「許しますか。」

西洋娘氣質

「許すと謂ふよりは、避け難いせう。」

「それでは那の夫人として許すのですね。」

「まあ然うです。然し許すと断言は出来ない、告めないのです。随分場合に因つては定規でばかり責められん事もありますから、那の夫人の一身上から謂つたら適れ出来たのでせう。まあ然う謂つて措きませう。之を聞くと鞠緒は折返して更に一件の問を出したであります。」

「それでは若し或婦人が有つて或人に向つて結婚を申込んだらば、貴方は如何お考へなさいませう。其婦人を陋みますか、又は其人に因つては御告めなさいませんか。」

「さあ、それは一寸答が爲難いですね。婦人の方から然云ふ事を言出すと云ふのは例外で、まあ無い事と謂つても可いでせう。」

「それを假に有るとして。」

「有ると爲れば、其には其だけの事情が必ず有るのでせうね。然も無くては婦人の方から言出すと云ふことは決して無いです。」

「それだけの事情が若し有るとすれば、貴方は随分お許しなさいませうか。」

「それは許します。」

「許しますか。」

「許して差支無からうと考へます。」

鞠緒は是限其話を罷めて、「一遍顔面を巡覽したのであります、尾に懸けてあるのが単人の夫人則ち敏詮の養母の肖像で、其側の空いて居るを見まして、

「此は貴方の奥方ですね。」

敏詮は薄い髭を燃つて微笑みながら、

「其内に懸るでせう。」と心中大に得意で有りました。是で肖像の部は終で、次の室が名藪の類であります、鞠緒は頭痛がすると云ふので、是で出て了ひました。

此夜は月が良かつたので、敏詮は二人を案内して納涼亭へ買物に出ましたが、歸ると澄洲先生の所望で、権府家重代の寶として傳はる紅玉が一覽したいとあるので、敏詮は早速取出して参りました。嘗て早虎解

護士の「兎の目ほどある」と噂を致したのは是であります。

古びた天鵝絨張の小匣が三個、中は頸飾と腕輪と簪であります。何れに飾つてある紅玉も噂に違はぬ希代の大きさでありますから、先生は蓋を啓けて一目見ると、ほうーと口を拳めて驚きました。鞠緒は例の驚くことは嫌ひの不貞魂でありますから、然しては騒ぎませんが、内心はなかく驚いたので、

「結構なものでございますね。之を美しい人が着けたら其塵に引立つてせう。」

と頸飾を取上げて眺めて居りましたが、旋て其を頸に懸けて、腕輪も貫めれば簪も挿して、鏡見の前へ行つて切に映して居るのを、

「お前にも好う似合ふよ。」

と澄洲先生は此方から見物して酷く嬉しいのであります。彼此する間に食事の支度が出来たといふ通知が有つたので、右の三品は納めて、食堂へ出向きました。

晝をも欺くばかりの月夜でありますから、先生は食後の食を吃しながら獨り先に庭へ出て了ひますと、跡は二人の相對、庭で涼みたいから連れて行つて下さいませんかと云ふ註文であります。婦人から懸言はれた日には否と言はれぬので、内心は大いに否でも、「願ふ所であります。」と挨拶をして、すぐに椅子を起つ

のが西洋の禮、傍へ行つて右の臂を出す女が之に手を掛けて、そこで出掛けるのが式になつて居ります。

二人も此式で内を出て薔薇園を散歩致しました。

園の中央に小高い臺を築いて、其上に据ゑてある女神の石像は「フロラ」と云つて花の神であります。其像が満身に露を帯びて居るのに月の光の射添つた所などは得も謂はれぬ觀で、周圍は一面の薔薇の花盛でありますから、天は清く地は靜に、一點の塵も無いやうに想はれる冷々とした空氣の中を馥郁たる花の香の浮動するの、フロラの神の息かと疑はれて、歐羅巴風に此景色を形容したならば、正に是愛人の手を携へて其美しき夢にも似たる架に耽るべき恰好の小天地とも謂ふのであります。

二人は石像の前の庭椅子に腰を掛けて暫く月景色を眺めて居りましたが、

「敏詮さん。」と鞠緒が用有りさうに呼掛けますから、

「は。」と見向くと女の顔は月の光を一杯に浴びて、何とも謂はれず美しい裏に思窮めたらしい眼色が鏡く人に逼るやう。敏詮は慄然としたのであります。

「貴方は、あの先刻の眞照様の話を覚えて在つしやいませうね。」と云ふ極めて奇しい問でありますから、

西洋娘氣質

敏詮は愈漸氣味が悪い。

「はあ。」と返事が鈍ると、鞠緒は少しく苛立つて、

「貴方、覚えて在つしやいませう。」

「ええ、覚えて居りますが………」

「あゝ然なら可うとさいます。」

何が可いのか敏詮には更に解らぬのであります。すると鞠緒は衝と起りました。是に於て益解らない。何を爲るのかと熟と視て居りますと、石像の側に一叢、四面は白ばかりで雪の如く咲亂れた中に、紅薔薇の枝も鼻々に大輪の花を着けて居るのを、徐に楯の露を分けて一朶ぶつりと折採りました。解らないのが三乗羅となつたから敏詮は唯目を据えて、手品師がコップの中へ物を入れて水を注いだり、裁片を被けたり、異つた事ばかり爲るのを、後で如何なるのかと半は待ち、半は疑ひつゝ見物するやうな氣持で、固唾を嚥んで居りました。鞠緒は花を探ると、葉振を正して、刺を撈りくぐ舊の座に歸つたのであります。其花をば敏詮の前に出して、

西洋娘氣質

「那話を覚えて在つしやいませうね。」

敏詮は飽氣に取られて、花と鞠緒の顔とを見較べて黙つて居ります。

「私が假に眞照様です。貴方が六代目の殿です。可うとさいますか。私が持つて居る此薔薇を貴方は貰つて下さいませうね。」

敏詮の前に差出した薔薇の花はぶるぐと顛つて居ります。

「それは如何いふ理ですか。」と鞠緒を見ますと、石の如く立つたまま、胸が轟いて口の利かれぬ鹽梅で、答が無い。

「私には一向解からんですな。」と敏詮も聲の調子が少しく變つて居ります。

「お解りにならない事は無いでせう。」

「いや、全く解らんです。」

「六代目の殿が眞照様の花をお受けなすつたと同じ意味で、貴方も之をお受け下さいと申すのです。」之を聞くと敏詮は手を組んで熟と俯いて了つたのであるが、鞠緒は差出した薔薇を一寸でも返させせん、而

して此時は、や度胸も据つたと見えて、葩の顫動も全く止つて、聲も平生の落着いた調子に復つたので。

「貴方は先刻に有仰つたぢやございませんか、其には其だけの事情が無ければならない、其だけの事情が有つたら決して咎めない、許しても差支は無いと、然う有仰つたぢやございませんか。」

貴方と私の間には、貴方が許しても差支の無い事情があると信じているのですから、是非之は受けて戴かうと思ふのでございます。何卒お受け下さいませし、貴方、お手をお出しなすつて下さいませしな。」

南無三寶と思つた敏詮は組んだ兩手を脇の下に緊めて、目を閉ぢた面を伏せて一言も發しません。之を見るど、鞠緒は從々と敏詮の身近に腰を掛けて、件の善哉を鼻の前に差寄せて、

「さあ、お受け下さい。之を受けて下さらんと云ふ理は無いでございませう。その理を貴方はお忘れですか。近日貴方の有仰つた言がございませうよ、此恩返には一命をも惜まない、今後私の身に事でも在つた時には命に換へて盡すと、那際に立派に有仰つたことを貴方は得もや反古にはなさいませう。丁度今私の身に貴方の力をお藉申さなければならぬ事が起つたのですから、何卒那約束を履行して下さいませし。然し私は貴方の命を左右といふほどの難題を言掛けるのぢやございません、私の所望は唯榎府子爵夫人になりたいのです。」

から、貴方に取つては容易い事だらうと考へるのです。貴方が私を夫人にさへなすつて下されば可いのです。那恩返には大事の一命をさへ惜まない貴方の御心ならば、是くらゐの事は何でも無からうと私は思ふのでございますよ。然う申しては何ですが、若し私に榎府子爵夫人たる資格が無いのならば、是は無理難題かも知りませんが、私は自分に其資格は有ると信じて居りますから、それで申すのです、標致でございませう、教育でございませう、性質でございませう、品行でございませう、何の點に於ても私は榎府子爵夫人とて決して自分で愧ぢない意でございませう。」

一期の浮沈は此時と鞠緒は兩手に汗を握て、息を凝して居りましたが、如何に言へばとて言つたもので此が歐羅巴の婦人でありませう。衆の前で手を握つたり、口を吸つたりするのが禮になつて居る國ほどあつて、感情を表すのが實に劇烈であります。是で十九や廿の娘、而も其家の處女と云ふのであるから、やゝ十年ほど前日本人が英吉利の私娼に馴染んで夫婦約束したのでありませうが、固より當座の嬉しがらせで、その内に否氣になつたから、さあ切れやうと爲るが女の方で離れませう。大きに持餘してゐると、急に日本へ歸る事になつたので、是幸と置去にして來る意の所を、女は早くも聞知つてステーションへ追つて來て、男の姿を見

西洋娘氣質

るとピストルを打放して、一發の下に怨を露したとの話は、奇は乃ち奇なりと雖も、生娘で這磨のがあるのを見れば私娼のピストルは大して怪むには足らぬかと考へられます。之を思ふと、鰻の頭を食せる猫は強いやうなもので、肉食をして居る人種は自から肝玉が遠ふのであります。内地雜居も目前に逼つた事であるから、吾日本の色男たる者は夙て此呼吸を心得て居らなければ、事に臨んで大いなる不覺は國辱の一端ともなりませう。實に吾人の警むべきは西洋の娘氣質であります。

女の方から恚う露出して言はれた日には、座も冷めれば、愛相も盡きるが、有繋に根強く出られるだけ、辭るにも骨が有る、まして一命をも惜むまい、と言つた口上の有る身にしては、之に對して殆ど言も無い時宜であります、そこは又歐羅巴で、女が恚なれば男の方も其のやうに、決して日本風に氣遣ふやうなものはありません。

「成程御尤です、貴方なれば樞府子爵夫人として更に可憐いことは有りません。又私も一旦誓つた言を反古には致しません、貴方の爲ならば随分一命を惜まん覺悟でありますから、それよりは容易な御頼を聽かんと云つたら、御立腹なさは當然でありますけれど、結婚の一事は命を捨てるよりも私は大事に考へて居るの

です。」

鞠緒に取つて一期の浮沈ならば、敏詮に取つても一生の安危の繋る所、今は臆する時でないと思ふから、此方もづかりと言つてのけたのであります。

鞠緒も恚う思切つて言出すまでには思案に思案をして、大略敏詮の心底をもトつて懸つたのであるから、固より二つ返事で應それとは言れまいとの覺悟は有つたのであります、始から恚う手強く斥ねつけられやうとは豈に想はないのでありますから、

「何と有仰る？」と急込みながら詰寄りました。

「外の事なら左も右も、結婚ばかりは何卒お免し下さいませ。」

「何故でございます。」

「私は貴方を愛して居りませんから。」

辭るにも種々あるが、此位露骨なものも多度は有りません。恚う挨拶をされては「も二も無いので、此上談に懸けるとすれば、口説と云ふ圖は外れて喧嘩になつて了ふのであります。けれども鞠緒は少しも驚く氣色は無

西洋娘氣質

く、寧ろ然もあらむと覺悟しておたらしい様子で、

「私を愛して在つしやらんでも可いぢやございませんか。隠さん所を申せば、私も決して貴方を受しては居らぬのでございます。で、私が結婚を願ふのは、貴方の愛情を求めたいのではないので、究竟于爵夫人になりたいのでございます。」

愈出でも愈圖太い、宛然切られお宮か、御守殿お熊などの言ひさうな白であります。然も無ければ、義理に迫つた表面の愛相盡か何ぞでなくては、日本の婦人では是丈に破壊的が言得るものではありません、それが刺へ夏家の處女、淑女ともあるべきものゝ口から出たのであるから、這際にも手賤いのは歐羅巴でも萬が稀なのでありませう、敏詮も呆れて了つて、寃でも魅して居るのではないかと、愈鞠緒の爲人を疎み果たのであります。大恩は着て居る敏詮であるが、一命に換へても此の女と夫婦にはなれぬと云ふ初一念でありますから、此方もなか／＼頑として動きません。

「それでは結婚を爲るのに愛情は要らぬといふ貴方の御意見なのです。私は又愛情が無くては到底結婚は成立たんと云ふ考最なのですから、折角ですが此結婚は不承知でございます。」

と屹と言放つて敏詮は彼方を向いて了ひました。芬と鼻の前で急に好い香がすると思へば、執念くも鞠緒が又例の薔薇を突付けて居るので、

「何卒之をお受けなすつて下さい。」

敏詮も今は肚に据ゑかねたから思はず聲を擧げて、

「私は受けません。」

然う聞いては鞠緒も眞言葉にならずには居られまいと想の外、却つて言を和らげまして、

「然ぞ私の爲方を厚かましと思召すでございますませうけれど、今日の貴方のお話の通り、或場合には差支無いです。……と私も考へますから、貴方のお氣に進まん事と知りながら、這際押付がましい事も願ふのでございます。其と云ふのが、私は樓府夫人と成つて適れ其名譽と地位とを保つて行けると十分信じて居りますし、貴方も亦私を夫人になすつて決して御不足は無らうと思ひますからでございます。今此で御即答を聞かうと云ふ譯ではないのですから、十分にお考へなすつて下さいませぬか。此方に御逗留いたして居る間には御挨拶をなすつて下されば宜しいのでござります。」

西洋娘氣質

愛情が無ければ結婚は成立ないと有仰るけれど、以前ランデェルに御一所に居りました頃のやうな友誼が有りましたらば、愛情は無くても宜しいではございませんか。又始には愛情が無くても、半年と経つ内には必ず夫婦の愛情は出るものと、私は然う思ひます。」

今は鞠緒よりは敏詮の方が激して堪へられぬ鹽梅で、

「可けません、それは可けません！私には那樣事は出来ません。夫婦になつてから愛情の出るのを待つなどと云ふ事は、到底私には出来ません。始に愛情が無ければ一日でも添つて居られるものではありません。貴方が如何程有仰つても是ばかりは平に御辭を申します。」

と突放した敏詮の挨拶でありました。鞠緒は其顔を憎さげに見遣りまして、

「貴方はお否かも知れませんが、お否ならば無理に押付けても、此望を遂げるだけの権利は私は持つて居ります。其愚事であらうと私が愚と言つたらば、其を通さなければならぬ義理が貴方にあるのでございませよ。」

と鞠緒も高飛車に出ました。さて恚言はれると有聚に敏詮は吭を緊められたやうなもので、返す言が無い。

「そ……………それ……………それは貴方が有仰らんでも能く知つて居ります。」

と例の五十磅が有るから敏詮は頭が擧らぬのでありますが、他の弱身に付込んで無理に言掛けるとは、返す返すも情き女と思ひながら、強くは言ふことが克はぬほど、心中の無念は燃ゆる如くであります。鞠緒は又もや例の薔薇を差付けまして、

「左も右も之をお受けなすつて下さいませ。」

敏詮は切齒をして頭ひながら、

「そればかりは受けられませんと申すのに。」

「受けられません？貴方は之をお受けなさいませんか。」

「……………。」

「貴方の一身上には樞府の家名に瑕の付く秘密があるではございませんか。その秘密を知つて居るものは天下に鞠緒と照佐の二人でございませよ。此花を受けてさへ下されば、彼秘密は全然此花と一處に貴方のお手に戻るのではございませよから、名譽を大事と思召すなら、彼秘密を御自分の手にお戻しなされるが肝心でござい

西洋娘氣質

西洋娘氣質

ませう。さあ、それですから此花をお受け下さいませ。如何でございますか、それでも貴方は之を受けては下さいませんか。」

敏詮の面色は灰の如くになりまして、今にも心臓が破れさうな呼吸で唇を咬緊めながら熱と俯いたまふ、

「何と有仰つても私は受けません。」

と極めて低い聲ではありまするが、胸から排出したやうな調子で、死を以て争ふ決心の程も見えました。鞠緒は物をも言はずに彼の薔薇の苗を引拵つて、地に投付けて、靴の踵で蹂躪りながら、

「貴方が受けて下さらん花なら慥して下さります、御覽下さい、慥して〜。」

と正體の失るまで散々に踏付けました、

「貴方の名譽に關る秘密の保たれて居る間は、樓府子爵は薔薇の花のやうに美しいものでありますけれど、鞠緒が靴に踏付ければ忽ち這塵になつて了ひます。屹度覺えて在つこやいませよ。」

と裾を拂つて行かうと致します。

「鞠緒さん。」

「何御用です。」

「貴方は……………」と鞠緒の顔を打目成る兩眼に涙を濺へて、敏詮は思過れるまゝに急には言も出させん。

「私が……………」

と呼留められて後を見返つたまゝの姿で、鞠緒は冷笑を含んで居ります。

「貴方は餘りです。無理を言つて他を窮らせるにも程が有るではございませんか。外の事なら左も右も結婚ばかりは那樣無理を有仰つても……………」

「無理とは。」

「無理ではありませんまいか。双方に異存が無くてこそ始めて縁は結ばるものを……………」

「それは通常の結婚でせう。私の申出したのは例外でございます。貴方の命をお拯ひ申したのは誰でございます。貴方が今日子爵の榮譽を得られたのは誰有る故でございます。その鞠緒が申出した結婚は、世間に數ある結婚とは大分事情が違ひます。決して御即答には及びませんから、篤りお考へなすつて下さい。其上で改

西洋娘氣質

めで御挨拶を伺ひませう。」
と後をも見ずして鞠緒は悠然と立去りました。

(十三)

鞠緒は敏詮の途方に昏れた様子を見て、那分ならば我を折つて承諾することは掌を指すやうなものと、はや仕済した氣で其夜はいと快く眠りましたが、それに引替へ敏詮は一夜轉輾反側して考明したのであります。那も恚も思案をして見た所で、思に絡めて締められる鎖を外す手段と云つては全く有りません。此上は情に訴へるの外は無いから、有體に言交した者が有つて其への義理が立たぬから、と段々の事情を打明け、それで了簡をしてもらはうと、翌朝になりまして、何は差措き鞠緒に會つたのであります。

昨夜は宵から掛けて心を傷めた上に、夜一夜目も合さずに氣を勞つたばかりでなく、一身の大事といふ心痛をさへ重ねて居るのであるから、實に驚くほどの憔悴で、憂愁面に溢れて病人の姿であります。之を見た鞠緒は、那事で一方ならず心配をしたのであらう。あゝ氣の毒などは有繋に思はぬでもありませんが、それでこそ我大望の成就は疑無しと考へれば、敏詮の羸れ果てた顔はおのれが勝利の色、と内心はなかく大喜

でありました。

敏詮は鞠緒に向つて、後刻食後に公園を散歩いたしませうと誘ふので澄洲先生傍に聞いて居りまして、昨夜悶着のあつたなどは夢にも知りませんから、どうも此二三日の様子は尋常ではない、子爵は娘に念が有ると覗んだが、恐く地を打つ槌であらう。仕合な娘め、好いものに好いものが有られた、子爵夫人になるとは出来し居つたと、陰に大恐悦であります。

二人は總て散歩に出ました、公園までは十町とはありません。途上は更に那樣話は無しで、公園へ入りまして午前も早いことであるから、然しては人も見えません。櫻の老木の涼しい蔭に入りまして、暫く休んで居る間に、敏詮は漸く口を切つたので、

「昨夜のお話でございます。實は那折私は非常に考量が亂れて居りましたのですから、何と申したか、定めて失禮な事も申しましたらうし、又私の思ふ所を十分にお話も致しませんでしたから、今日改めて事情を打明けてお話致します。別して是は第一にお話をせんければならんのを、昨夜は不覺紛れて申さんかつたのでございますが、實は貴方の御縁談を拒みましたのは、他に既に約束を致したのが同族の中に在りまして、晩

西洋娘氣質

くも此秋の初には式を擧げる迄に話が進んで居りまして、今更破談などは出来ん事情があるのですから、誠に重にも其處をお察し下すつて……。」

鞠緒は熱と首を掉つて、

「甚麽事情か存じませんが、貴方の私に於ける事情より、それは重い事情なのでございますか。」

「私は身にも換へられんほど其人を愛して居るのでありますから、それと結婚が出来んものならば、殆ど命を失つたも私の身に取つては同じです。」

「あなたは類に愛情と有仰いますけれど、一體愛情が甚麽に尊いのでせう。愛情の何のと言つて面白味のあるのは、結婚して半年ぐらゐのところで、その後は皆同じことだらうと私は然う考へますわ。戀の愛情の人は騒ぎますけれど、能く考へて見ると、全で一時的熱のやうなもので、冷めて了へば何でもないもの、又直に冷めて了ふものなので、寔につまらん物ぢやございせんか。そのつまらん物を此上も無く大事になすつて、而して其を楯に取つて私の方をお辭りなさるのには、些と道が違ひはしまいかと、それで猶々私は面白く

ないのでございます。甚麽事情がお有なせうとも、貴方といふものが無かつたら、其事情は立たないのでございませう、貴方といふ者が今日在るやうに致したのは私でせう、その私の爲ならば甚麽事情にも換へられない理ではありせんか。私の爲です、其事情をお棄てなさいまし、其縁は破談になさいまし。」

「貴方が命にも換へられないほどに愛して在つしやる其の御方は、何處の何方か存じませんが、御同族の中と有仰るからは、無論名譽を重んじられる御身分でございませう、その御方が後暗い秘密のある貴方と知りつゝ結婚をなさるでせうか。」

と突入れた時は實に顔の色も變つて顔へたのであります。

「如何あつても私の願を愜へて下さらんと云ふ事なら、私は貴方の秘密を漏しますから、然う思つて下さいますし。」

「あの、秘密を洩すに實に貴方は人……人非人だ！」

「私も好んで貴方の名譽が傷けたいのはありませんけれど、那樣人非人には誰が爲せるのでございます。」

西洋娘氣質

西洋娘氣質

善にも悪にも貴方の御心一つぢやございませんか。」

敏詮は潸々と悔し涙を零しまして、

「私も出来るだけの事ならば甚だに我慢をしても其秘密を買ひたいのですけれど、それが爲に生涯の愉快を犠牲に供することは、どうも出来ません。」

「あゝ、それぢや何でございませうか、貴方は名譽よりは一身の愉快の方を重く考へて在つしやるのですね。」

一旦名譽が傷けられたら回復は出来ませんよ、それでも貴方は一身の愉快……。」

「もうお黙んなさい！」と恠へかねた敏詮は血走る眼を睨いて鞠緒をばたと睨付けました。

「恩を忘れる敏詮でせうか。昔の事を懐へばこそ、是迄にしてお頼申すのに、下から出れば可いかと思つて無理ばかり有仰る！それでも貴方は淑女の名に對して可愧いとは思ひませんか。」

鞠緒は自若として息巻く敏詮を尻目に掛けながら、

「何を私が愧ぢなければならぬのでございませう。」

「怪しからん言を！既に恩を贖ふへ卑しむべきに、他の秘密を餌にして己の慾を逞しう爲やうなごとは、

人たるものゝ道でない、況んや淑女ともあるべきものが……。」

無念ではある、腹は立つ、一圖に赫として了つて敏詮は思ふやうに言も出ません。

「あゝ、宜うございませう。淑女でないとは有仰るならば勝手に有仰いませう、貴方から淑女だと言はれたいことは少しもございません。淑女でなくとも樓府子爵夫人になる價直はあるのですから、私はこれで満足して居ります。」

此執念こそ實に見入れたと云ふので、肉を食取らなければ振切ても離れぬのであります。敏詮は今も爲ん方無い、心の内では殺したいほど憎いのであるから、勝手にしろと突放したいのは山々であるが、然すれば秘密を洩して名譽を傷けやうと云ふので、悲しいには急所を抑へられて居るから逆も身動は取れません。此方に弱身が有つて見れば、妾に激して一旦の怒に任すべき所ではない、熱湯を飲むやうな堪忍をして、漸く顔の色をも和げました。

「鞠緒さん、貴方は如何あつても私の心中を察して下さることは出来ませんか。私は貴方の氣質を善く識つて居りますけれど、他の困るといふ事を強ひて爲るなご言ふ事は絶えて無いのではありませんか。それを

西洋娘氣質

今度に限つて可恨いほど意固持に爲さるのは何故ですか。」

「それは場合に據ります。子爵夫人になるのは私の一生の目的なのでございますから、その目的を達する爲には、忍ばれん事も随分忍ばなければなりませんわ。」

「で、若し私が貴方の要求を飽まで拒むとしたら、貴方は何爲さうといふ思召ですか、其をお聞かせ下さる譯には参りませんか。」

「それはお話申しても差支ございません。」

差支の無い所ではない、鞠緒の心底は何處までも子爵夫人になりたいのでありますから、願くは嚇付けて了つて此方の物にした方が、實は早手廻なのであります。

「私の願通り樓府夫人に爲すつて下さるならば、それは夫の名譽に關する事でもの臆氣にも出すことではありません。突竟貴方と結婚すると與に那の秘密は消えて了ふのでございますわ。然し、如何あつても御不承知といふ事なら、もう其までとす、私は第一に那の秘密を父に話します。」

「お話になつた所で、疾に過去つた昔の事であつて見れば、先生も今更それを左や右有仰る譯は無いでせう。」

「然うでございます、父は何も左や右は申しません。然し、其を聞いたならば世間が決して黙つては居りませんまい。私は世間へ向つて貴方の秘密を吹聴する覺悟でございます。其外に未だ一つ貴方の名譽を傷ける計畫があるのです。」

「計畫？」と敏詮は愈易からと思ひました。

「計畫とは甚麼計畫ですか。」

鞠緒は嘲笑をして、

「訴訟を起すのです。」

「訴訟を？訴訟などを起される理は有りません。」

「それが計畫ぢやございませんか。結婚破約の起訴を爲るのです。」

「ええ、結婚破約の起訴！それは貴方何ぞ有仰るのです、何日私が貴方と結婚の約束を致しました、常談も好加減になさうい。」

「そこが計畫です、貴方の名譽を傷けて、他との結婚の邪魔を爲るのです。」

「鞠緒さん、貴方は自分の名譽を棄てても他の名譽が傷けたいのですか。貴方は慾の爲に良心を裏つて在つしやる。然云ふ人を敵手に爲るのは愚の至ではあるけれど、言つて聞かしてあげます、事實の無根は謂ふにも及ばず、證據さへ無いものが訴訟になりますか。那麼愚な事を爲さると、此方の名譽よりは貴方の名譽が傷くのですよ。」

「證據は無いと有仰るか。御心配には及びません、立派な證據を持つて居りますから。第一に那の節の五十磅の請取證と云ふものが残つてございます。それから御返金の時の添手紙、是が最も價直の有る品なのです。生命と名譽とを拯れた大恩は報するに道が無いとお書きなすつたでせう。此二通が有りさへ致せば十分の證據にして御覽に入れますよ。」

敏詮の恨は此時骨髓に徹したのであります。

「ちえー！」と言ひさま我と我膝を掻撈つて、

「世間に憎むべき奴は多いけれど、貴方のやうに憎むべき……敏詮は一生此恨を忘れませんー」
 「憎いなら幾許でもお憎みなさいまし。私は子爵夫人になりさへ致せば、それで可いのです。」

如到に脅されても敏詮は屈する氣は無し、甚麼に愛相を盡されやうが鞠緒は平氣と云ふのでありますから、話の纏りさうな理が有りません。言ふだけの事を言ひ、聞いただけの事を聞いて了つて、雙方ともに言が絶えて居りました。

「貴方は私とも結婚をお嫌ひなすつて、好いた方と御一所になられなければ、樓府の殿となつて居られる効が無い、一生の愉快を犠牲に供するのだと有仰いました、それでは樓府子爵は賊を働いた事のある男だと世間に後指を指されても、貴方は一生の愉快を碍げず、又子爵の殿として今迄とほりに尊敬を受けて居られると思召すのでございますか。如何でございます。」

(十四)

澄洲先生も多くの病家を控へて居ることでありませうから、然う便々と逗留も出来ません。二三日内には暇を

取らうと、鞠緒へ内々話が有りました。因で彼の件は未だ十分の確答を得た次第でもありませんから、斷乎と云ふ所を突止めて曲り形にも承諾を爲れば可し、否とあれば破れ壊れで非常手段を執るより外は無いと、鞠緒は敏詮に會つて確答を求めたのでありますが、仍兩端を持して決しかねて居るので、其場では返事の出來かねる様子。

「それでは歸りましてからで宜しうございますから、お手紙で有仰つて下さいませ。然し長くとも一週間内にお願ひ申します。父は此間からの様子を見て、貴方に結婚の御心持が十分有るやうに思つて居るのですよ。ですから何か私も父の推察を事實に致したいのでございます。」

此言を置土産にして澄洲父子は其翌々日ランデセルへ向けて出發致しました。敏詮は實に十年の縛の縛でも解れた想で、嗚とばかり息を吐きました。然無きだに鞠緒の顔を見ると、昔の罪を目前に憶出して、今歴の貴族として尊敬を受ける身分だけに慙愧後悔も一入であります。そののみならず、抑も鞠緒といふ人物は虫が好かぬさへあるに、今度の件であります、實に強請と謂はうか、詐偽と謂はうか、男子にしても爲るに憚る大膽不敵の曲事を、彼は恬として慚る色も無く、好い金の蔓を掴中てた氣で、怒と鐵面皮で侮々と

責立てるには、呆れるの、愛想が盡るのといふ圖は外れて、女ながらも可憐い、疫病神にでも執着れたやうに敏詮は心のまゝには身助もならぬほどの憂思をしたのでありますから、此客に立たれたのは即ち怨道退散の歡喜でありました。

然しながら其は風前の虹よりも儂い一時の夢で、一週間の後には一生を苦樂二境の執に置くかと云ふ、一步に大利害を踏むべき難所が横はつて居るのであるから、それを考へれば、昨日より今日は苦勞の増した身上、今日よりは又明日が二倍の憂を懐く人なので、敏詮の頭腦は此時鐵か石かを以て造られたのでなければ、到底些の痛苦無しに過ることは難いのであります。

弱身に附込れたのと、大恩の有るのとで、一步も二歩も譲つて丸く納めやうとしたのであるが、鞠緒の鼻張が強くてそれでは承知をせぬのでありますから、三步も五歩も七歩八歩、十歩と譲つて、此上には譲るべき餘地の無い止底まで我折つて、遂に決心したのは、此結婚を辭る爲に、樓府家の財産の半を割いて鞠緒に與へる、それで了簡を爲せやうと云ふのであります。

樓府家の財産の半分と云ふからには、軽く見積つても、十萬圓の歳入の半分で五萬圓、五萬圓の年利の入つ

西洋娘氣質

て来る元金の額は莫大なものであります。その巨額を以て買収するのが何かと云へば、結婚の申込。之を思ふと鞠緒は眇たる一少婦と雖も日本の政治家などよりは實に手腕が好いやうであります。強請やうも大いが強請られ方も小氣味が好い。敏詮は此迄覺悟をして見ると、鞠緒の始めて打解けた笑を含んで、

「それ程までに有仰るならば。」と本直を吹く様子が目に見えるやうで、書面の往復では可憐い、善は急げと、前觸も無く速に思立ちまして、ランデエルへ自身に出掛けたのであります。

驚いたのは澄洲先生。然し退いて考へると忽ち釋然として、因で禿顛を拵りました。

「さてはお出なすつたのじやな。仕合な娘め、近々樓府子爵夫人か。」

早速鞠緒に會つて此旨を話しますると、案の如く心の動いた様子で暫く考へて居りますから、さて然なつて見ると、敏詮も見すく樓府家の財産の半分と云ふ莫大なものを芥を棄つるが如く唯與れて了ふのは有繋に惜まれたのであります。それでも樓府家の尊い椅子をば這際淺ましい人非人に漬されるには勝し、二つには怨敵退散と喜びました。良有つて鞠緒の答ふるやう、

「折角ですが私は依舊子爵夫人の方が所望でございますから、然う思召して下さいまし。」

敏詮は失望いたして此上討ふ力も抜けたのであります。なか／＼此は黙つて成行に任せて措れる所でありませぬ。

「樓府家の財産の半分は貴方の一生を安樂に愉快に送るには餘有るので、子爵夫人以上の生活が出来るのであります。ありませんか、それに何を苦んで、貴方も愛して居らなければ、私も愛して居らんものを、那樣無理押付な馬鹿々々しい結婚をして、不愉快極るのは目に見えた生活をお望みになるのですか。双方の利益になる事が有るのに、好んで不利益の方を取るとは愚な話ではありませんか。」

「子爵夫人になるには、樓府家の財産を半分受けるよりは私に取つては大な利益と考へますから、それで切つて望むのでございます。或物の半分と或物の全體とは何方が大うございませう。」

樓府夫人となれば樓府家の財産は我物も同じであるといふ意でございます。色氣も人情も名譽も全く棄てて掛つた鞠緒の了節でありますから、宛然一種の強制執行であります。敏詮も今は天運の盡きた所と觀念して了ひました。

「宜しい、然ほど御執心とあるなら樓府夫人にお成りなさいまし。」

西洋娘氣質

西洋娘氣質

「では御承諾下さいますか。」

「如何にも承諾しました。然し、堅くお約束致して置きますが、此奇怪な結婚は双方の合意から成つたのでありません、貴方の脅迫で一時私の意を枉げたものでありますから、結婚も致し、夫婦にもなりません。私は妻として貴方を愛さんのみか、寧ろ讐敵として飽くまで憎みますから、然う思召し下さい。」

「それは決して異存はございません。」

奇問奇答とは恐く是でせう。夫婦にはなるが憎むぞは酷い、それで異存の無いは更に酷い。如此夫婦のホネエムウンは蜂蜜の如き甘き月ではなくて、蜜蜂の剣で整合ふ月であります。然云ふ夫婦であるから見合はありません、此間から始終睨合でありました。

「お約束が出来た上は一日も早く式を挙げたいのでございますけれども、今年は貴方も御忌服中の事ですから、來春早々に致しませう。私も父に話を致しまして、是から支度をいたさなければなりません。若しそれまでにお心の變るやうな事がありますれば、私は突如に那秘密を公に致しますから、どうぞ其の御意で。」

「御念には及ばんです。貴方を怨み憎むの精神の外は敏詮の命は今日限り絶たたのでありますから、死人は

逃げも隠れも爲ません、如何なりと貴方の御自由です。」

此際まで片時も念頭を去らぬのは可憐い征矢子の事。其人をば餘所に見て恚る怨敵と縁を組まねばならぬかと思へば、敏詮は實に腸も断るゝばかりで、湯玉の如き涙を流して居りました。用が済んだら長居は無益と敏詮は、椅子を起ちまして、

「都合に因つて式を挙げるのはロンドンに致します。而して極内々で、極質素にする意で、當日まで私は旅行をしますから。」

「あ、然やうでございますか。それでは來春又お目に掛りませう。」

直に敏詮は歸つて了りました。又驚いたのは澄洲先生で、追々來たかと思ふと娘とばかり話をして、それが濟むと挨拶も無く行つて了つたので、何の事やら更に解りません。

(十五)

野内伯の家族は旅から歸りますと、不在中には變つた話も有りませんのでしたが、二三日して伯爵が外から聞て來たの是一件の大變事であります。樓府子爵が急に旅行をしたが、其先は埃及あたりといふ取沙汰。そ

西洋娘氣質

西洋娘氣質

れと聞いた征矢子の驚愕は何に譬へむ方もありません。旅から歸つたら話す事のあると云ふのは、此方でも願つたり慥つたりいたの事に違無いと、敏詮に別れて發足する時から内心其を樂にして居たのであります。然るに其人の顔さへ見られぬ始末となつたので、餘りに信じまことからぬのは夢ではないかと惘然ぼうぜんとして居りました。伯爵夫人も呆氣に取られた鹽梅で、

「而して何日頃立つたと申すのでございませう。」

「いや此の三四日前ぢやといふから、大概此方の歸來かへりも知れて居るに、最少し延して暇乞でもして行きさうなものぢやに、のう。」

「それでも直に歸るのでございませう。」

「直に歸ると云ふて、埃及エジプトまで行つたものが五日や六日で埒らちが明くものか。埃及といふは如何いふ理ぢやらう、甚だ合點の行かぬ事ぢやのう。」

「然やうでございませうね、其に就いては何ともお聞込みあそばした事はございせんか。」

「何も聞かんが餘程心配でも有りさうに久う鬱ふさいで居つたとかいふ事ぢや。」

伯夫婦は臍へそに落しかねて氣遣ひながら此噂をして居る那裏に、とたん怪しからぬ響がしたので、何事かと齊しく見返れば、二人の後の長椅子から娘の征矢子が床の上に轉げ落ちたまゝ絶息せつそくして居るので、醫者よ薬よと家内沸くが如き騒動でありましたが、直に正氣付きました。歐羅巴エウロツパの婦人は何かと云ふと引ひき付けるのが癖であります。日本では癪しゃくといふ所ですが、お姫様の癪などは開關かいかん以來無い圖であります。

翌朝敏詮からの手紙が届きました。是は英吉利イギリスの土地を離れる時認めたもので、文の大意は、若し御目に掛つたならば胸の内に在るだけのお話も出来れば、これほど失望も致しますまいけれど、違ひたいはど見られぬ切無いかにかりさは幾許いかにかりとお察し下さい。此文を認める時忘れ難き御身の美しき面影おもかげは目の前を去らず候

歐羅巴人の話の上手なことは日本人のやうな不器用なものではありません。交際の重んじられて居る國柄くにがらだけに、交際の機關たる談話の巧たくみなることは、素人が皆殺文句ころしもんくを申します。それが又故わざとらしからず、如何にも肺腑はらふちから出るやうで、巧言令色かうげんれいしよく歐羅巴の禮なりと謂つても苦しくない。既に口前が然であるから、手紙の文言などは巧いもので、實に言ひ能はざる所を言廻します。右の文言などは決して名文句でもなければ、

西洋娘氣質

西洋娘氣質

實際にも有ることですが、日本では書かぬ事でもあります。

How shall I say good-bye. 私は餘人の恐くは難しとするほどの熱心を以て御身を愛して居りましたが、此後とも未長く最期の際までも渝らず御身を愛します。私が此世を辭する時、物を思ふ最期として思ふ事は御身に就てより外にはありません。此天地の間には私の身ほど生効の無い者はあるまいと信じます、實は私の過去の生活には一件の秘密がありました、其は或婦人の手に握られて居るので、其秘密を買ふには其婦人と結婚せねばならぬ事情が此度起つたのでありますが、不幸にも私は其婦人を愛さぬのであります、樓府敏詮が愛する婦人は御身の外にはありません。然しながら敏詮は樓府の家名を思ふが故に、身は亡き物の覺悟を以て其婦人と不幸なる結婚を致します。返すくも可憐き我征矢子の君よ、憊る事を御身に語り、又憊る身にして御身を見むことの可憐さに、敏詮は破れむとする心を抱きつゝ今英國の土を去るを可哀と思召し被下度候、と讀みも了らず征矢子は岸破と泣俯しましたが、其日から纏綿と病付いたのであります。

(十六)

翌年の春でありました、ロンドンの或教會堂に於いて世にも不思議なる婚禮がありました。花婿といふのは

品の高い美男であります、病後の如く顔色憔悴して、見る目も笑止に失望を極めた様子、いよく式となつて指輪を花嫁の指に貫す段にも全で顔を背けて、手と手との觸れるのを蛇でも擱まされるやうに爲て居りました。花嫁は耀くばかり美しい娘で、唯の一人の待女郎もなく、列席者といへば嫁の父親限であります。裏店の婚禮でも這麼物可哀に寂しいことはありません。況んや有福なる千爵が一生の大禮を擧げるのに此狀は何たる事でありませう、式が畢ると父親は夫婦に暇乞をして獨り悄悄と退場致しましたが、然しも仕合の娘めと鼻高で居た澄洲先生が、ランデエルに還つてから鞠緒のまの字も人に向つて言出しません。千爵夫婦は此から直にパリイへ向けて旅行を致して、六栗鼠ホテルといふのに宿を取つて逗留致しましたが、此時はロンドンを出てからはや二月許になります。或朝英字新聞を見ると、野内伯夫婦は令嬢の病身を養ふ爲に當分暖い地方を漫遊する由を報道する一節がありました、僅七八行の雜報でありまして、通信した者も、書いた者も、乃至は讀む者も七八行の事も無い記事と看るであらうが、敏詮の胸には病身の二字さへ尠と徹へたので、曾て病のありとも聞いた事の無い征矢子が、如何にして轉地療養を爲ねば稱はぬほどの病身には成つたかを知る身には、僅に七八行の記事も一冊の可哀な物語に劣らず、敏詮は千萬無量の思に沈んで、

西洋娘氣質

西洋娘氣質

切ない涙を吐く中では暮したのであります。

本望遂げて意氣揚々たるのは鞠緒であります。婚禮こそ人知らぬ間にこそくど執行つたものゝ、適子爵夫人に成済した今日、富貴自在無量、一生の思出は此時と、夫の失望を極めて、毎日起きるから寝るまで快々として樂まぬのを見向きも爲すに、ホテルの特別上等といふ善靈し美靈したる室を幾間も借りて、パリの榮華をば一身に鍾める氣で、衣裳から裝飾品、馬車等に至るまで流行といふ流行を起つて、人目を驚かす全盛を極めまして、今日は芝居、明日は音樂會、夜會の、競馬の、内を外に連日の樂を盡すのであります。子爵夫人といひ、容色といひ、生活といひ、パリの交際社會に出入して一步も退けを取る所ではありません、俄に一點の明星が輝出でたやうに下にも置れず珍重されるのでありますから、其面白味は寝ても覺めても忘られる理のものではない。恠る樂のあるからは、夫などは如何でも可い氣になつて、敏詮の苦い顔をも靴の前を馬蚊が駆けて行くほどにも思はぬのであります。人の怪しんだのは此樓府夫人の未だ曾て其夫と手を携へて交際社會に出た例の無い一事でありました。然し其も始の程で、パリの人は面白く浮れて暮すのが命なのであるから、英國人のやうに那樣事を氣にして深く問ふ者は無いので、適に訊ねられる事でもあれば、

鞠緒の辯口で巧く言打めて了ふので、誰も二人の中を怪む者も無くて通したのであります。

凡そパリの爲たいただけの事を爲盡してから、更に伊太利へ向けて旅行いたしました。此には殆ど一年間の逗留で、那樣に長く遊んで居るのも、敏詮は鞠緒をば樓府夫人として館に入るのが、如何とも心苦いので、其が爲に一寸遊に旅枕の日を累ねるのであります。此長の月日敏詮は骨髓に徹した恨を半時でも忘れず、鞠緒を讐敵の如く睨通して居つたので、言はなければならぬ用の外には一言でも物を言掛けた事は無いのであります。始の内こそ鞠緒も其で困らなかつたのが、次第に夫婦の情とあふ味を知つて、始終二人で居るお互が睦しくしたらば如何に愉快であらうと思初めると、夫の難面さが漸く身に沁みて参りました。或日の事敏詮は安樂椅子に靠れて巻簾を持つた手を懶さうに垂れて、朝日の射入る窓を後にして悄然と物思に沈んで居りますと、鞠緒は何氣無く入つて参つたのであります。その物音も耳に入らず考證して居りますから、暫く佇んで様子を見て居りました。

従来は男振などは一文の價直も無いものに考へた鞠緒も、譬へば美しい花を見れば自から心の慰められるやうに、今更敏詮の美男に目留つて、異しく捨難い思が致すのであります。旋て儼々と進んで夫の背後より、

西洋娘氣質

西洋娘氣質

「貴方の御髪は實にお美しいのね。」と着端も無く言出し、不意に驚くと與に椅子を起して、

「何です！餘計なことを言はんが宜しい。」

と目に稜立てと寄付けさうにも致しません。流石の鞠緒も拍子抜して手持無沙汰に座敷を出て了ひました。今となつて見れば、恚う爲れてもなかく思切れませぬので、如何にもして言寄らうと絶えず折を窺つて居りましたが、或夜、敏詮が獨り讀書して居る所へ参りまして、

「貴方にお願が有るのでございませぬがね……………」

と迄は言つたが、後は少しく怯れて、夫の機嫌を料りかねて居りました。此夜の鞠緒は常にも増した媚媚さで、黒レースを配つた琥珀色の服を着て、胸にパンシイといふ葦の一種を挿して、ぱつちりした目元に溢るほどの色を含んで、さばらば落ちぬべき風情は敵意も恨も直に融けるばかりであります。例の如く敏詮は離れ面くも衝と起たうとするのを、鞠緒は後から其肩に手を掛けて、片手に夫の手を握つて力一杯に引据ゑました。「何を爲ます！」と敏詮は苦り切つた顔をして振解かうとすれば、愈纏つて、

「あの、せめて朋友になつて下さいませぬ。」

「あゝ、もう此をお離しなさい。」

「結婚致してからも一年餘りにもなるのでございませぬ。それに貴方は唯の一度でも優い言を掛けて下さつたことは無い、全で他人も同様になすつて在つしやる。何卒せめては朋友に……………」

「朋友に？既に朋友にはして居るのでありますよ。然し此上に朋友の誼を盡すと云ふことはお前さんに對しては出来ぬのです。お前さんに對する朋友の誼は十分に盡して居る意。」

「それはもう貴方が私を愛して下さいと知らんことは知つて居りますから、設ひ愛しては下さらんまでも、這様に嫌ひなさらずに朋友ほどには思つて下さいませぬ。」

其時敏詮は纏る鞠緒を掻排けて、

「否！」と頭を掉りました。

「過日私は何と言ひました。結婚は爲る、夫婦には成るが、一生讐敵として恨みますぞと言つた時、異存は有ませんと立派に言つたのは誰です。此結婚は敏詮が死ぬにも勝る苦痛を忍んで、空しく其一生を捧げた結

西洋娘氣質

婚ですよ。その思ひに比べたら、お前さんが嫉ばれる、難面くされるくらいは未だ結構なのです。私は實にお前さんの幸福が可羨しい。」

「それは御尤でございますけれど、那當時は後前見ずに唯樓府夫人になりたい、なりたいと思ふ念ばかりで、其外には何の考も無かつたのでございます。それゆゑ貴方に那麽御無理を申したのは重々私の不心得でございました。それから恚して御一所に成つて見て、始めて愛情といふ事が解りました、その樂も苦も漸く解りました。今では私は貴方を愛して居ります、貴方を愛するより外に念は無いのでございます。」

「はあ、お前さんは私を愛してくれますか。」

「はあ。」

「それは眞實に？」

「何の嘘を私が？」 と鞠緒は身を擦寄せて夫の手を取らうとすると、又素氣無くも振拂はれました。

「お前さんから無法な結婚を迫られた時に、私は此世界に二人とは在るまいと思ふほど美しい、愛らしい婦

人を愛して居つた。その婦人とは添はれず、可厭でく克はん者を妻に有つて居る敏詮が胸の内も、それで漸く解つたでせう。恚してお互に苦しい思を爲るのも何かの因縁と、まあ諦めて置くのです。」

「那樣に有仰ると私は何と言つて可いのやら、今更貴方に合せる顔もございませぬ。然ぞお腹も立ちませうし、憎い奴とも思召しませうけれど、假にも妻と名の付いた私、今では前非を後悔して、足はぬながら誠を盡して貴方に事へ、樓府夫人の名をも汚さんやうに致します心得でございませぬから、生れ換つた鞠緒と思召して、何卒一度御了簡をなすつて下さいまし。」

「樓府の財産を半分まで分けるから免してくれらうと彼程頼んだのに、お前さんは免しては下さらなかつた。それを考へたら、今日私の免さんのも決して無理ではないでせう。一生此恨は忘れんと言つた私、それで異存は無いと言つたお前さん、由來然云ふ約束なのだから、それで可いではありませんか。今後再び此事は口に爲んが可いですよ、もう聞く耳は持たんから。」

敏詮の極めて情に脆いことは或點に於ては女子か老人のやうに動され易いのを、鞠緒は善く知つて居るのでありますから、得もや程ではあるまいと期して居たのが、一髪を以て千曳の勢を襲いだやうなので、然

しもの我強も途方に背れて、從來は飾立てる日毎に遊行いて、現に全盛を極めて居つたのが、飄然と那樣事も面白くなくなつて、始終内にもみ垂籠めて、如何かして夫の機嫌を直さう、夫の氣に入られやう、世間の夫婦のやうに睦しく暮して見たいと、其事ばかり考へても、思の愜はぬ氣疾から、顔の色も常ならず、起居さへ弱々に見えるまでに羸れました。

所詮此儘思死に死なうとも、恨みに恨む夫が可憐と思酬すことは有まいから、仇とは知りながら言で已まんと、其後鞠緒は又浸々と播口説いたのでありますが、敏詮は木石の如く聴きません。それでもなかく思切られずに、間がな隙がな取付いて、おのれの罪を語り、夫の氣強さを怨んで、逾撥付けられはば逾播口説くといふ有様でありましたが、兎の毛で突いたほど敏詮の感じる氣色はありません。因で鞠緒の胸は遂に嫉妬を生じたのであります。罪を悔い、愛を捧げて這腰にも戀慕ふものを、一も二も無く承け付けぬのは、愛して居たと云ふ其女を今に忘れぬからであらうと云ふ念が起りますと、夫の顔を見るに就けて沸返る胸の苦しさに堪へかねて、鞠緒は或時、

「貴方は大相お美しい方を愛して在つたごとき毎々有仰いますが、それは何と云ふ御方のごときですか。」

「それを聞いて何爲るのですか。」

「今でも貴方は其方を愛して在つしやるのですか。」

「今でも。」と敏詮は嘲むが如き微笑を含めまして、

「敏詮は命の有らん限り其人の事を忘れません、」

然う聞いてはも赫と急上げて、聲を頭はせながら、

「何といふ御方なのでございます。」

「聞いて何爲ます。」

「見付け次第私は殺して丁ひます。」と熱と噴める目の色はとや變つて居ります。

「何の、今更殺さんでも、私と添はれなければ其人は長く生きて居るものか。」

と敏詮の落涙するのを見て、無念に堪へぬ鞠緒はひいと泣出しました。

(十七)

或宵の事鞠緒は夫の居間へ参りますると姿が見えませんが、直に嫉妬を起して探し

西洋娘氣質

の前を通ると、夫は宿の亭主と其處で話をして居りますから、傍へ参ると、

「唯今し方お着になりましたので、やはり英國の御方で在つしやいます。」

「名前は。」と敏詮が訊ねますと、亭主は宿帳を持つて参つて、

「是でございます。」と差出すのを敏詮は何氣無く受取つて見ると、野内伯夫婦征矢子の名前が記してあ

りましたから、呀といふと宿帳を取落しました。這は何事と鞠緒も亭主も驚いたのであります。南無三、氣取られてはと敏詮は益呆れた顔をした、

「實に意外な事もあるもの！是は直近所に居られる私の極の知人さ。同國の人と聞いてさへ可憐く思ふのに、此フローレンスで野内伯の家族に會はうとは全で夢のやうだ。はあ、世界は廣いやうでも狭いものなあ。」

と陽は頗に感歎して心底を紛らしたのであるが、鞠緒は早くも其様子を見抜いて、如何も尋常の知人に邂逅つたのではない、征矢子とかいふ娘もあるからには油断はならぬ。推量通り此娘が夫のその女ならば生けては置かぬから、と瞋恚を燃しながら室へ歸りましたが、十に九つ迄其と思ふに就けて、鞠緒は居ても起つても心が落着きません。

西洋娘氣質

間も無く敏詮も歸つて参りました。別に變つた様子とは見えませんが、彼容の立つて了ふまでは一寸でも夫に目は離されぬと云ふので、附切に附いて居りましたが、昔ならば知らず、今では鞠緒も心底から愛して居る夫であるから、見すく他を思はせて、始終傍に居ながらおのれは手一つ握ることさへ克はぬ悔しさは實に遣る方も無いのであります。まして夫の愛して居る女が此一つ家に居ると思へば、其女に會せたらばおのれの益疎まれるのは知れて居るから其に先んじて思を遂げなければと、狂氣の體で通りに通つたのであります。敏詮は例の聞く耳を持ちませんから、鞠緒は泣亂して夫を怨む裏に其女に對する殺意は益々急になりました。

翌日早々野内伯からの使で面會を求めて参りましたから、敏詮は其座敷へ出向きましたが、征矢子は病中と云ふので挨拶に出ません。伯夫婦からは懇に夫人の事を訊ねられます。然すれば禮として紹介を申入れるのであります。敏詮は何とも申しません。さて伯の一行の逗留は僅二日間、直に出發と聞いた敏詮の本意無さ。病中といふので今日客に會はぬほどであれば、明日とても面會は覺束無い。夕方には必ず運動場へ出るであらうから、其處を待受けて會ふに如かずと其心構で居りました。

野内伯の座敷へ行つたので、妬心彌然ゆる如き鞠緒は其一日絶えず夫の舉動に注目して居りますと、恚と
 廉立つて怪しい氣振も有りませんが、毎よりは熟と考込んで居るので、鞠緒は片時も油断は致しません。夕
 方伯から又使で散歩の誘引でありましたから、さてこそと鞠緒は目を側てました。すると敏詮は風邪と爲へ
 て之を辭つたのであります。辭れば辭つたので、外に巧があるものであらうと鞠緒は益氣を弛さぬのでありまし
 た。

薄月はありながら人顔も朧の彼誰時敏詮は颯然と室を出ましたが、鞠緒の見張をして居るのも承知でありま
 すから、背後に心を配りながら故と廻道をして運動場へ出ますと、寂寞として人一箇出て居りません。
 此のホテルの運動場といふのは家續になつて、庭から一丈許も盛上げた極めて廣い露臺様のものでありまし
 て一面は直に河に臨んで、縁には大理石の欄が付いて居りますが、故と處々を眺いて、風致を助くる爲に其
 處には草木が植込んで在ります。
 敏詮は欄際の椅子に憩ひまして入口の方に注意して居りますと、旋て物靜に出て參つたのは、白い服を着け
 て、肩から頭へ黒のレース編のシヨールを被つた長の緞削とした婦人でありました。之を見ると敏詮は身を起

して、餘所ながら其方へ進んで参りますと、婦人は男の寄つて来るのを可訝しうに足を留めて窺ふ風情で
 ありました。間近になつて卒然と顔を合せると、

「お、征矢子さまー」

「樓府様ですかー」

二人は握手した手を挫けるばかりに握緊めて、睨と目と目を見合せた限少時は言も有りません。敏詮は肩の
 揺れるほど呼吸を過ませて、征矢子は蒼くなつて顔へて居ります。轍船の水に於けると謂はうか、此時の兩
 人の歡喜は察するに餘ありません。

「何からお話申して可いやら私は胸が唯一杯で。」

と征矢子の手をば握つたまま敏詮は涙に掻昏れたのであります。

「先頃那云ふ悲しいお文ではございしましたが、何日か一度はお目に掛れやうと、私は其のみ樂に致して居り
 ました。」

「尋ない其の御言、其の御言で敏詮は此一年間の苦を忘れます。委細は昨年本國を出る折差上げました手紙

西洋娘氣質

で私の心もお解りになつたでございませうが、何卒今日は貴方のお心をお聞かせ下さいませう。」

「私から今更申さずとも……………」

「何と有仰る？」

「樓府様、私は貴方のお文を拜見いたしてから今日まで恙^{かたじけなく}して病^{やま}つて居るのでございませう。」と袖^{かみ}に咬^{かみ}付^ついて泣^なりました。敏詮^{とんせん}は嬉^{うれ}しいやら可^{あは}れしいやらで胸^{むね}は張^は裂^れけるばかりであります。

「あゝ、濟^なみません。其の御志^{ごし}は死^しんでも忘れ^われません。貴方^{あなた}も御病氣^{ごびやうき}なら、私^{わたし}だつて其に劣^せりませうか、此^こ顔^{かほ}を御覽^{ごらん}下さい、此^こ瘦^う細^こつた手^てを御覽^{ごらん}下さい。」

「その御苦勞^{ごくろう}を遊^{あそ}ばすのも、又私^{わたし}との間^まを裂^やいたのも、お文^{ふみ}にありました那^{あの}秘密^{ひみつ}ゆゑ^{ゆゑ}なのでございませう。」

「如何^{いか}にも。今は私^{わたし}を愛^{あい}して下さる貴方^{あなた}に對^{たい}して何も憂^{うれ}む事^{こと}はありませぬから、其秘密^{そのひみつ}の仔細^{さいじゆ}をお話^{お話を}致^{いた}しませう。彼處^{あそこ}に椅子^{いす}がございますから、彼^{かれ}へお出^{いで}なさいませぬか。噫^{あゝ}、あの月^{つき}を御覽^{ごらん}なさい、貴方^{あなた}は御庭^{ごてい}の栗^{くり}樹^きの下^{した}の事^{こと}を覺^{おぼ}えて在^あつじやいませぬか。」

征矢子^{せいやし}は愁^{しゅう}然^{ぜん}として、

「今の身の上では忘れて了^{しま}はなければなりませんわ。」

思^{おも}へば悲^{かな}しい逢瀬^{あひだ}ながら、眼前^{がんぜん}の樂^{たの}さに悲^{かな}しいも打^う忘^われて、敏詮^{とんせん}は病體^{びやうたい}の征矢子^{せいやし}を介抱^{かいぼう}しつゝ川景色^{かゝいけ}を眺^{なが}めながら椅子^{いす}の在^ある所^{ところ}に着^ききました。其處^{あそこ}から二間^{にま}とは距^{へた}らぬ木茂^{きしげみ}に人影^{ひとかげ}の潜^{ひそ}んだとは更に知^しらぬのでありましたが、這^こは是^こ別人^{べにん}ならず、半狂亂^{はんきやうらん}の鞆^{たもと}緒^{いと}であります。四邊^{よつた}に人無^{ひとな}しと心^{こころ}を弛^{ゆる}して語^{かた}ふならば、夜^よの靜^{しず}さといひ、間近^{まぢか}といひ、其處^{あそこ}へ二人^{ふにん}の聲^{こゑ}は手^てに取^とるばかりであります。若^わ又^{また}又^{また}を隠^{かく}持^もつならば一躍^{いちやく}して刺^さすに難^{がた}からずで、征矢子^{せいやし}が命^{いのち}は危^{あや}ま哉^や風前^{かぜまへ}一穗^{ひと}の燈^{あかり}に似^にたりであります。

可憐^{なつかし}さの二人^{ふにん}は鴛鴦^{うんおう}のやうに寄添^{よそ}ひましてあります。

「其の秘密^{そのひみつ}と有仰^{あつ}るのは如何^{いか}いふ事^{こと}なので、早くお聞^き申^まして安心^{あんしん}致^{いた}したいのでございませう。」

と征矢子^{せいやし}も憎^{にく}からぬ人の苦勞^{くろう}の種^{くさね}と云^いふのであるから、聞^きかなければ心^{こころ}が濟^なまぬのであります。「お話^{お話を}は致^{いた}しますが、それをお聞^きかせ申^ましたら貴方^{あなた}に愛相^{あいそう}を盡^{つく}されやうかと、それも實^{まこと}は一件^{ひつ}の氣懸^{きけん}なのでございませう。」

西洋娘氣質

「では貴方^{あなた}は病^{やま}ふほどの私の心^{こころ}が未^まだ能^{あた}くお解^{わか}りにならないのでございませう。」

西洋風氣質

此一言に動された敏詮は決然として、

「いや、お話し申ませう。」

彼の五十磅の私用が事の因から鞠緒の脅迫の終まで具に物語りますのを、征矢子は身軀も爲すに聴き澄して居りましたが、話の畢ると與に敏詮の膝に置く手に手を掛けさせて、

「秘密と有仰るのは其御話でございませうか。」

「面目もございませぬ。」

「而してそれぞりの御話でございませうか。」

「それぞりとば？」

「もう外に何も無いのでございませうか。」

「外には何も御坐いませぬ。」

征矢子は片頬に笑を含みまして、

「貴方が樓府家の名譽を傷ける悪事と有仰つて御心配なればすのは其事なのでございませうか。まあ、貴方も

西洋風氣質

餘りお氣の小さい、若いお方には有内のお心得違、固より善い事ではございせんまけれど、それが何で一生お心をお苦しめおそばすほどの悪事ではございませう。

秘密々々と大相に有仰るから、甚麽事かと心配いたして居りましたが、其を伺つて噫、胸が落着きました。「天を拜し、地に俯す敏詮が歡喜は釋すと神の御言があつたにも増して、

「征矢子さま、それは……………」

と不覺に取付く途端、後の方の茂の蔭で怪しい物音がしたのであります。

「おや、あの音は？」と征矢子が起上りますから、敏詮の耳へは駈と入らぬのでありましたが、然う言

れれば音のしたやうな覺もあるので、直に梢を掻分けて眺したのであります。何の異状も無い。下を覗けば

は眞黒闇で、猶目に入る物はありません。

「石か、鉢植でも落ちたのではありませぬか。」

然うとも思はれぬのであるか、征矢子は氣にして暫く耳を澄して居りましたが、單調に響く河音の外には寂寥々々として聞ゆるもの無し。

西洋娘氣質

時の移るに急がれて二人は本意無くも其夜は行末を語る間も無く別れて了ひましたが、翌朝になるとホテルは上を下へと覆す騒動であります。樓府夫人の死骸が運動場の下に発見されたといふ始末で、昨夜運動の折踏外して落ちた證據は、欄際に咲いた花が死骸の傍に散つて居ると、人々其不幸を悼んで居ります所へ、宿の亭主に導かれて証着けた敏詮は、直にさてはと心に傾かれました。然し踏外して落ちたものか、話を立聞して失望の餘自殺をしたものかは、終に判じかねたのであります。左にも右にも鞠緒の横死と與に樓府子爵が五十磅の秘密は全く此世の外に葬られたので。逾えて一年敏詮は征矢子を迎へて、いと睦しく、いと楽しく暮したと語傳へまする。

(つはり)



「噫、纒に二十年前、噫今はそれから纒に二十年の後である。此二十年の間には如何ばかりの變遷があつたのであらう。兵隊の帽子が變つた、教育の方針が變つた、蟻の苦屋が西洋造の別荘になつた、狼の通路が鐵道になつた、縦の紙幣が横になつた、金一升と云ふ日本橋の真中に公園地が設けられたことを思へば、男が好いとて其頃流行した隣町の山井先生の頭、の天邊が河童の皿のやうに禿けて了つたのも、格別怪むには足らぬ。

自分は子供の事でも世間を見る目が無かつたから、學校の事と遊戯と縁日、商の賣物と駄菓子と一玩具、具などの外は、實を謂へば知らぬのであるが、辛酸の癪の下に鋭く光る眼には、世の中が變遷なのか、變遷が世の中なのか判らぬくらゐに、見る物毎に然ぞや變つたことであらう。いたいげに金、花糖の狎兒を握つてゐた紅葉のやうな手が、名譽だ、榮利だと血淋漓になつて虚空を掴むと思へば、二十年間の進化もあれば退歩もある其變遷は尋常ではあなまらう。」

桑田氏は撫然として其鹿角菜のやうな頬髯を擦りながら座敷の内を眺めた。彼は定めて此小き座敷の内に

銀

も無数の變遷を認めるのであらう。

「然云ふ自分も變つた。或時鏡に向つて、何と云ふ事は無しに噴めてゐる間に、茫然として自失するやうに覺えた、而して猶噴めてゐると、鏡に映る佛は自分の顔でありながら或人のやうに思はれて、之が自分であらう理が無い、誰であらうと考へながら眺めてゐると物凄くなつた、それで弗と氣が着いて見れば、依然自分に違無い、すると忽ち少年の時が胸に浮むたのである。

少年の時。九才ばかりの頃、自分の二階に巡査の寄宿してゐた事がある。其巡査は其頃ポリスと言つたが、面中髭髯で、眉毛の太い所も眼色の可憐い所も、實に自分の座敷職の朱鍾植に善く肖てゐた。若し此鍾植が聲を出して鬼を叱したなら、其破鐘聲も恐く此ポリスと違ふまいと思はれるほど生寫であつた。自分ば世の中に此ポリスほど可憐いものは無いと思つてゐたが、別けて其髭髯が可憐くてならなかつたので。それほど可憐い可厭な髭髯をば何故ポリスは自慢さうに生じてゐたのであるか、不審に堪へなかつたが、家内のものも、近慮の人も、あのポリスはあの髭髯で月給を取つてゐるのだと言つた——彌自分には解らなかつたのである。尤も其頃髭髯を蓄へてゐるものは極稀であつたから、自分も化物のやうに可憐がつたし、又そ

れで月給も取れたのであらう。」

と髭髯の黒い中から白い齒を出して桑田氏は笑つた。

其ポリスを懼れた自分が今では其ポリスに似てゐやうとは意外、自分の甥は二人の伯叔を區別する爲に、自分をば鬚の翁さんと言ふ。是も變遷と謂はなければならぬ。然し這塵事は誰の身の上にもある事で珍しくもない、自分は今銀の指環に就いて言はうと思ふのである。尤もポリスの話ならば、多少の關係の無いでもない。其指環の主は自分の叔母である。叔母は町内で評判の器量好であつた、と謂つたならば其先を話すまでもなく、ポリスとの關係の如何なるものかは大方解るであらう。

後に聞けば、其ポリスは西南の役に戦死したとやら。討死せずとも濟んだものを、自ら進むで命を殞したのだ。其には其があつて、究畢失望の爲に死を求めたのだ、と或人の言つたのを小耳に挾んだが、何の失望であつたか知らぬ。

其叔母の玉のやうな指に光つてゐた銀の指環が、今では見る影も無い貧しい色をして、歪んだ火箸やら、燵枝やら、爪剪鉄の錆びたのやら、短い鉛筆やらと同一に煤けて、火鉢の小抽斗に轉じてゐる。自分は此指

環に就いて、廣く云へば銀の指環に於ける二十年の變遷を殊に感じたのである。

當節銀の指環を穿るものは、于守か、飯炊か、縁日商の楊枝を賣る婆さんか何ぞの外は無い。高島田に結つて薄色縮緬の羽織を着た美しい娘が、如何か間違つて銀の指環を穿めてゐるおたならば、人は何と見るであらう。若き慈善家や、多情なる義捐家や、しをらしい有志者は必ず町内を奔走幹旋して、此憐むべき娘の爲に十八金の玉入の指環を建立するの勞を厭はぬであらう、一つには彼の美しいのが町内の譽であるほど、其指環の白いが赤恥になると云ふ所から。けれども其は殆ど有得べからざる事で、娘盛の身が何で銀の指環などを炫かさう。若し親が其を強ひでもしたら、いつそ淵川へ身を洗めてなりと此生恥は曝すまいと、娘の突詰めるのは知れてゐる。繼母があつて惜い子を苛まうとならば、袂の抜けた衣類を着せて椎の實などを拾ひに遣らすとも、銀の指環を穿めて琴の稽古に遣るが可い。其娘はなかく小刀針の折檻よりも此銀の手枷には幾層の憂目を見るか知れぬ。爾、銀の指環よ、二十年前には榮耀の飾であつたものが、二十年の後には刑罰の具となる！ 凡そ世に在るもの一つして此二十年間を變遷の手に觸られずに過ぎたものは無けれど、爾の如くに變遷を極めたものは會て無い。是では變遷と謂はうより墮落である、墮落とよりは懲罰である。」

彼は不覺に聲色を勵して、恰も辯護士が減刑の申立を爲るやうな勢であつた。

「特に我美しき叔母の手に飾られて、世間から眺められ、慕はれ、羨まれた身では、今昔の感も一層であらう。而も爾を愛して片時も肌身を離さなかつたまは、今こそ男爵夫人と册かれて、去年の正月は黄金も飽きた、玉でも無からうと、プラチナムの鐐の指環を拵へたではないか。

此捨てられた指環は二匁五分掛つて、分厚の蒲鉾形で、甲には「松皮麩に葛」を毛彫にしたのである。叔母は之を拵へるに就いては何程苦勞をしたか知れぬ、三日三晩陸に食事も爲すに、口も陸に利かずに、拗ね散した擧句、泣き悲んだ擧句、實に採出すやうにして始めて出來たので、出來て來ると直に衣服まで着更へて、之が見せたいばかりに地主の娘を訪ねた。

地主の娘は叔母と長唄の稽古朋輩で、又無二の仲善であつたが、夙て銀の指環を持つてゐた、而も二個も持つてゐた。一個は一匁餘、一個は一匁程で、其二個を合せても叔母の一個の目方には及ばぬのが如何に彼の満足であつたか、得意であつたか、大勝利であつたか、萬歳であつたか。親達も此指環の爲に彼の美しさが遠

に耀くやうに思つたのである。猶地主の娘を妬ましたのは、その毛彫であつた。「松皮菱に蕙」は叔母が眞買のくく大好の好の高島屋の紋、地主の娘も此眞買の競争者で、彼と叔母との仲善は一つには劣らぬ高島屋眞買の故でもあつた。先じて其紋を附けられた爲に地主の娘は戀人でも奪はれたやうに感じた、叔母も無論其氣であつたのである。然ほどに寵を極めた指環が、何の間に如何して火鉢の抽斗に轉つてゐるまでに荒められたのやら、自分は全く知らぬ。十四の歳小學校を出て、築地の英語學校に寄宿する事になつたが、家を出る迄叔母は不相變此寶を秘藏してゐた。其後月に二度づつ宿に歸つた時も彼の左の薬指には宵の明星の如く耀いてゐたのであるが、一年の後叔母は家族と俱に京都へ引移つた。其間は長くもなく、再び出京して三月ばかりも経つと、今の夫の麓男爵（其頃は某省の勅任官）に嫁いたのである。

自分は停車場まで出京の迎に行つたが、叔母は其時銀の指環をしてゐたか、如何であつたか注意は爲なかつたが、今から考へて見ると、細い黄金の指環をしてゐたかと思ふ。若し銀のを穿めてゐたならば、其には自分が深い馴染が有ると無いとに關らず、必ず注意を惹かれたに疑無い、と云ふのは、其頃は東京の變遷、別しては流行の變遷が一年増に急になつて、自分のやうな書生の迂濶な目では到底其變遷を認むることが出来ぬ

ほどの勢であつたから、不圖心著いた頃には、身分の中等と見える娘で物欲さうに銀の指環などを炫かしてゐるものは地を拂つて無かつた。故に叔母が舊の通りに其を穿めてゐたならば、有聲に其の時候晩の異様なのが目を惹いたであらうけれど、其時の叔母の風俗は決して京風にも染らぬのみか、銀の指環を喜んだ頃の叔母が、何家の娘と立並んでも依樣勝れて美しかつたやうに、雲の如き停車場と群集の中に一際目立つて嬢嬢に見えた。強ち自分の眞買目でもない證據は、荷物を受取る間プラットフォームの片隅に立つてゐると、前を通る者は皆目を側めて過ぎたのである。少し行くと立留つて振返るのもあれば、叫合つて肩を撲いて笑ふのもあつた。恐く其は家暮臭い銀の指環を異めて人の目を着けたのではなからうと考へられる。

二十年も忘れてゐた指環の卒爾も發見されたのは、自分が世帯を持つに就いて叔母の家から長火鉢を譲られた、其の抽斗の奥に如何紛れたやら入つて居たので。噫、是が出来た頃には叔母は愛んで手も着けさせなかつた、美しく光るので、自分は何ぞ慙云ふやうな物が欲くつてならなかつた。此「松皮菱に蕙」の主も千歳を待たず皺の老夫になつて了つた。此紋を妬んだ地主の娘は如何なつたであらう、其後は便も聞かぬが、行方も知れぬ。先代から住付いてゐた土藏造も跡形無くなつて、一時は繁華の町であつたのが、次第弱に場末

銀

になつて、今見れば石灰製造場の圍内に蝸殻を積んである邊が其中庭であつたらしい。之を打した飾屋の親仁はツン福と云つた壁の一國もので、朝顔が所好で、家の周圍を竹垣にして、垣の周圍に朝顔ばかり栽ゑて、不斷は懶けてゐて、朝顔が咲く頃になると夜明から花の中でコックと稼いでゐると云ふ變人であつたが、彼も定めて目出度なつたであらう。」

夢るやうであつた桑田氏の目は忽ち涙を含んで、

「今で此指環を知ものは、舊の持主の叔母と自分とより外に無い！此指環の不幸は悲むべきも、賀すべきも叔母の出世である、喜ぶべきは自分の健在である。指環の不幸は悲むべきも、不幸なる指環は決して多幸の叔母を怨むべきではない。何故となれば、此指環の恚く有効無く棄てられたのは、叔母の捨てたのではなく、世間が捨てたのである。銀の指環と云ふ指環は盡く世間から取められたので、是ばかりは獨り浮漕も無く忘られてゐるのではない、輕薄なる變遷が爾を置去にしたのである。其金は赤くとも、其玉は質なりとも、黄金と名が付かなければ、人は指環として見ぬ世の中である。其頃の叔母のやうな娘達が皆黄金のを穿めてゐる。其頃南京玉のを穿めて心寛にしてゐた程の自分でさへ、銀のは愧ぢて手にも取らぬ。銀の指環は水仕奉

公の標牌になつて了つた！」

銀の指環に同情するのか、世の變遷を憐むのか、懷舊の情に堪へぬのか、但は寓する所あるのか、或は又言外に感ずる所あるのか、此物語の間桑田氏の面上は絶えず暗愁を帯びてゐた、而して瑣細な指環の話をしては、語氣が稍熱心に過ぎたやうであつたが、此時遽に顔色を解くと與に調子を砕いて、

「話といふものは如何でも一番掉尾が爲なくては完らぬ。愁歎の後であるから茶利を入れるのが可からう。」

彼は先づ笑を含んだ。

「或婢が出代つて有福な紳商の方に住込んだ所が、秘藏の飼犬があつて、首輪をしてゐるのを婢は葉鐵とばかり思つてゐたのに、驚くべくも其は純銀細工であつた。自分の大事にしてゐる指環も銀であつた、但違ふのは、同じ銀でも自分の指環よりも犬の首輪の方が三四十倍も大いだけの事！と解ると婢は立ちに指環を引抽いて、針箱の底に抛込んで了つたのである。半月ばかりして在所へ物を送る次手に、其をも封じて妹に遣つたは可かつた。其後奥様がお出掛になると、新しく出来た雪駄をば、芝罘へ廻すやうにと吩咐けられたので、それを持つて出ながら何氣無く打返して見ると、その裏金までが銀で！婢はもう驚くよりは慙ぢた。

銀

銀

又其の後軒の種を掛替へたのを見て、愈葱ぢだが、那も銀であるかと試に奥様に訊ねると、銀ではなかつたが
亞鉛と云ふものを解つたので、因で婢は熱く念つた、今度給金を溜めたら切て那の亞鉛でなりと一つ指環を
拵へやうと。「(ぎはり)

(月下の頭巾)



水色縮緬の頭巾目深にアリザリンオレンヂの中形のシオールを絡へる女と拵合ひつ
つ推並びて、稍長高く鼠縮緬の頭巾冠りたるは、大柳條の焦茶のシオールに小肥の
身を裹み、吾妻下駄を鳴し連れて、冬の夜寒く、風は梢を吹きて、燈火疎なる横
町の寂しさを語ひつゝ行けり。

水色縮緬は其伴に向ひて、狎ゆるが如く、訴ふるが如く、

「ねえ、お勝さん、逢へるかねえ、馬鹿に慥らしちまつたんだから、本當に私は如何
せうかと思つて、昨夜は夜一夜寝やしなひ。」

鼠縮緬は然も呆れたる相して、

「おや、御馳走様だよ。」

「あら、然云ふ譯ぢやないんだけれど、私は本當に心配でならないんだもの、それは随分從來には度々慥ら
れたり、怨言を云はれたりしたけれど、此間のやうな事は何が日にもありはしないだよ。もしや是で切れ
るやうな事にでも成つたら、如何せうねえ！私はお勝さん死んで了ふよ、生きてる効も有りはしない。」

安知歌親林

安知歌鏡林

嗟乎満らないく！」

慙く言ひつゝ身を頭しぬ。鼠色は此血迷へる心を安めむには怒ひ思遣の有らむよりほど、

「大概にお爲なね、此人は。自分が勝手に面白盡で慍らして置いてさ、他に憤れる奴があるものか。譲けられたり、仲直を頼まれたり、其途中で憤れられたりさ、何ぼ何でも「それぢや私の身が立たぬ」だ。」

彼は素氣無く面を背けて、唯有る土塀の内に高き鴨脚樹の絶頂に懸れる五日月を仰げり。

水色は其肩をお勝に撞付けて、

「あれさ、私は何も憤れたつてお前さんに抵つた譯ぢやないんだから、氣に障つたら堪忍しておくれよ。頼に思ふのは今はお前さんばかりなんだから、那樣事を言はれると私は心細いよ。」

「染井様と仲さへ直りや頼に爲ないと謂はないばかりだ。不實なものさ。」

「あれ、もう此人は………」

と撲たむとせし手を速にシオールの内に引入れて、

「どうせ舌頭ぢや敵はない。」

「其代り手腕で来いかい、よう、よう！」

「知らないよう！」

水色は拗ねたる風情にて、お勝を措きて獨り道を急げば、二間ばかり後より、

「お大さん、左様なら。氣を着けてお出なさいよ。」

彼は慌てゝ振返れば、お勝は其處より別れて還らむとするなり。固より其戯なるを知れども、勢餘所に見るべくもあらず、小走に取つて返して、背後より抱着かむとする機に、藤色天窓絨の横鼻緒は弗と断れて、

雪の如き白足袋の地を踏むよと見る間に、體は流れて横倒に片膝を支きたり。

「あゝ痛、た、た、あゝ、痛い。」

「如何お爲だい——何處を打つたい——怪我しやしないかい。」

惶々問慰めつゝお勝は其手を執りて、曳起さむとしたれども、お大は疵を傷みて腰を擧げざるに、彼は益狼狽へつ。

「如何お爲だよ。起きられないのかい。さあ、私の肩へお摺まり。」

安知歌鏡林

安知歌親林

「何爲、起きるから、一寸此手を引張つておくれな。あゝ、痛い、足を引挫いたよ、お前さんが餘り居るもんだから。」

「贅澤をお言ひでないよ。然云ふ了簡だから爵が當つたのさ。さあ、よう、早く下駄をお踏きなね。」

何をか爲ると思ひて、彼はお大の脚下を窺へば、踏覆せし下駄を姑く爪頭にて弄ひたりしが、

「あら、如何せう！」

其聲の氣立まじさに驚けるお勝は、彼の平生驚氣を振へる「紙屋の重さん」より、未だ一つ大嫌の物ありと謂へる蛙を踏付けたるにはあらざるかと想ひしなり。

「一件物でも踏んだのかい。」

「一件物とは？」

「蛙さ。」

「あゝ可厭だ！」

懼れて飛退くお大は痛き足をも忘れたり。

安知歌親林

「あれさ、此人は、那個物でも踏んだのかと聞いたんだね。然うぢやないの？如何したのさ。」

お大は忽ち打萎れて、

「お勝さん、切れちやつたよ。」

「然うかい、多度血でも出るのかい。」

おのれも痛を覺ゆる如くお勝は面を皺めて、不取敢國紙を抽かむとすれば、

「あれ、血が出るんぢやないよ、切れちやつたんだよう、情無いねえ。」

彼は身悶して且悔み、且嘆さぬ。

「何が切れたのさ。」

「縁が………鼻緒がさ。」

「何だつて？」

「横鼻緒が切れちまつてさ。可厭な辻占ぢやないか。折も折、時も時だ、氣になるねえ。」

「何だい、舊弊な事をお言ひでないよ。鼻緒が切れて辻占になるのは芝居ばかりさ。鼻緒なんぞ切れたつて、

安知歌親林

何も不思議は無いちやないか、賤つまごいた時に無理を爲たからだあね。」

「幾多無理を爲たつて、此間買つたばかりなのに。」

「だから安物は御爲にならないと言ふんだよ。」

「可哀かあいさうに安いものかね、是だつて壺が七十錢ばかりに……。」

「卑いやしいね、何故平民は然うだらう。」

お大は速すみりに脱げむとする下駄を辛くも操あやつりては歩みつゝ、

「餘りお慮いぢめでないよ、病人をさ。」

「病人と結構！それこそ好い辻占だ。」

お勝は三度ばかり鼠鳴ねずみなきせり。

「常談じやうだんぢやないよ、お勝さん。他ひとが鼻緒が切れたのを悪い辻占だと謂つて氣を揉んでれば、舊弊きゆうへいだなどど

貶けなして置きながら、病人が好い辻占とは何の事だよ。多度不祥たんどけちをお付けな、可いいよ。」

其怨に堪へずして彼の聲は疊りぬ。

安知歌親林

「おや、病人と言つたのがお氣に障さばつたの？御免なさいまじよ。お前の好い人の染井さんの御商賣は何だつ
けね。」

お大は其間の取つても付かぬのを怪める氣色にて、

「改まつた御訊ね。」

「是非承りたい。」

「誠に可厭な家業で、醫者でございしますが。」

「成程、そこで以つて、醫者の御客は何でせう。」

彼は鼠縮緬の頭巾の内を差覗さしのぞきて、

「洒落かい、お勝さん。」

「那樣人の悪いのぢやないよ。まあ可いから、お客は何だと言ふのに。」

「そりや種々有らあね。」

「甘いよ、本當に。男なら與太郎だ、女だからお與太さん、甘い筈だ、飴の中から與太さんが飛んで出た

よ。」

我と洒落て我ど笑へり。

「氣樂だよ。那樣事ばかり言つて。少しは私の身にも成つておくんな。」

「だから喜ばせやうと思つて、醫者のお客は何だと聞くのに。」

「醫者のお客と……………」

「あれさ、考へる事は無いぢやないか。」

「病人かい。」

「知れた事さ。」

「はいく御免なさい。」

「醫者のお客は病人だらう。」

「何ぼ與太さんでもどう解つてらね。」

「まあ、お聞きつてばさ、病人は醫者に診てもらふんだらう。」

「餘り下らないね。」

「まあ可いからさ。そこでお前の逢ひたい人が醫者だらう。」

「お勝さんお言葉の中だけけれど、是非お醫者さよと言つて貰ひたいんですね。」

「あッ、それぢや先の題でさまは振落しちやつたのかも知れない。取つとらさよ、お前に上げるから。」

「何だつて？」

「わさとおとしめなす。」

「馬鹿にしないね。」

折しも一陣の風は砂を捲いて絶に面を撲ちぬ。

「ええ寒い！さあ、もう道草を食はずに早く行かうよ。未だ餘程あるのかい、馬鹿に歩かしたぢやないか。」

「もう其横町だよ。私は足が痛いのに鼻緒が切れてると来て居るから、然うは歩けやしない。」

「常談ぢやない、清濁が出るよ、何ぼ夜だつて色氣が無過ぎぬね。」

「堪忍しておくれよ、飛んだ苦勞を爲して私は濟まないね。」

安知歌貌林

「その優しい口前だから女房子が有つても迷ふんだつさ。」

「もう誂さずに、好い辻占だと謂ふんなら、今の病人の後を聞かしておくれな。」

「猶且氣にしてゐる内が可笑い。染井さんがお醫者さまで、お前が病人だらう。可いかい、病人がお醫者様の所へ行くのだから、こりや逢へるに極つてるぢやないか。病人でなかつたら逢へないかも知れないけれど、鼻緒が切れて病人になつたのは、お醫者様に逢ふと云ふ前表だらうぢやないか。ねえ、好い辻占だらう。それ恠う祝直したら、鼻緒の切れたのも憎があるまい。」

「少し附會だけれど、然ういへば然うだね。」

「占断だの、人相だのと謂ふものは皆附會さ。」

「其氣で祝直されたんぢや、何だか利が悪さうだね。」

「利の善いのは染井様のお薬ばかりだつさ。」

「宿も宜しく申しました。」

「撲つよ！」

爰は蕭索なる片側町の仕舞うた屋檜の角に、表を左右北面牆に圍ひて、瘦せたる二本の赤松を見越に、敷松葉したる猫の額ばかりの門内には、高野槇を植込み、根徑を配へる置石の陸に霜除藁を被けるが筈の如く三つ四つ立てり。門より緩く鍵の手になれる入口に二枚の千本格子を立て、磨硝子の軒燈籠に御待合鶴菱と記したる一構あり。お大は進寄りて、

「此だよ。」と小聲に誂ふるを、お勝は頷きつゝ外構を胸して、

「一寸外見が好いね。」

「うむ。」

二人の姿は格子の内に入りて、凡そ四半時間の後裏口より走出でたる十四約の少婢は、鶴菱の紋を大きく附けたる浮浪提灯の火影に引詰、髪のお茶びい面を曝して、口三味線を弾きかけながら大路を指して急遽行けり。

夜中の代診

彼は旋て出でし大路の賑しさを横截りて、漬物屋と湯屋との間なる狭き闇黒に入りぬ。此を出で、右に折る

安知歌貌林

安知歌鏡林

れば、稍其二倍の道幅なる一條の長き裏町に出でたり。

角より五軒目に著しく筆太に染井と書きたる街燈を點せる門に走着きて、少婢は逐はるゝやうに慌忙しく耳門を入れれば、支關の障子の内に燈影ありて、讀書の聲の聞えたりしがはたと息みぬ。殆ど同時に彼は息急き、

「あの、御免なさい。あの鶴菱から参りましたが、先生に、あの、あの、先生に……………」

句切りたるは清を吸れるなり。爾時内なる書生は猛然としてラムプを撃つゝ半身を顯はせり。少婢は類に鼻を吸りて物の匂を嗅ぎぬ。餅の焦げたるが芬々として支關より香るなりけり。

「何處から？」と太く訊れる聲して、書生は無愛相に問反せり。

「鶴菱ですよ。」

「鶴……………菱……………」

彼は團栗眼を睜りて奇怪を極めたる少婢の面構を目成りつ。

「鶴菱つては解りますよ。急病人が有るんですから、先生に、あの、早く、大急ぎで、あの、直にお出なすつて下さい。」

安知歌鏡林

書生は急病人と聞くより今は己の知らざる鶴菱を研究するの違も無く、再び猛然と奥の方へ入らむとするを、

「あの、一寸待つて下さいな。」

「何じやい。」と立戻りて、式臺の片隅に腰懸けたる少婢をば、羅生門の鬼の如く、瞰下せり。

「あのね、是非先生にお出下さいましつて。忘れちゃけませんよ。」

書生の行くを見澄して、

「餘程七月の御槍だよ。田舎者、書生坊！」

提灯に燈附きて、待つ間を可悶しげに貧乏揺して、憂々と下駄の齒に敷石を踏鳴して居たり。

書生は行きて診察所の後なる奥の間の襖を啓けば、内には眞晝の如くラムプを耀して、鶏を煮る匂と葱の香

と熱燗の酒氣とは沸々として送りぬ。少婢が支關の餅の香に鼻を惹かせしよりも、彼はいと堪へ難く其

胃を緊縮せらるゝなるべし。

今は先生が晚酌の際なり。火鉢の勳燒鍋より立騰る蒸發氣の霞隠れに櫻色の醉を催せる先生は齡三十四

五と見えて、温乎たる其風采、色白く髭濃に、眉目好く齊ひて、小造に肥えたり。黄八丈の巳の時ばかり

なる長羽織を着て、實印を刻みたる黄金の指環の懸ける左手に猪口を把りて、紅竹の三脚の小テーブルには海栗の鐘詰、香物の鉢、轉磁味噌の蓋物、焼海苔の皿、何やら瓶詰など所狭く列べたるを控へて、メレンス更紗の大座蒲團に艶天の蔽膝の十分に古りたるを四つに疊みて重ねたるに、思ふまま裕に胡座を組みたり。

火鉢に相對へるは二十五六の内君なり。其面は枯骨に一層の肉を敷きたるやうに瘦せて、色蒼白く、眉極めて太く、眼尖りて、頰れかされる束髪は急雨の將に來らむする雲の如く蟬れり。藍納戸袖の羽織に、着物は絹擬の瓦斯絲の類なるべし。肩は有るか無さかに瘦織りて、始終胸の痛など絶ゆまじき面色なり。今しも内君は診察所に掛れる骨格の圖の垂れたる手にも似たる指に杉箸を把りて、鍋の内の整理に餘念無かりしが、書生の入來るに會ひて、割らんとせし玉子を控ふれば、先生は飲まむとせし盃を停めて、齊しく其方に面を向けたり。

彼は先づ 閑際に低頭して、とて言へり。

「ええ、鶴菱とか何とか申す所から……………」

「何と云ふ……………」

先生は故と問へるなり。

「たしか鶴菱とか、然う云へば解ると申しまして。」

蓋より口の端の蓋々に堪へざりし内君は此時恠へかねて、

「あゝ、解りました。鶴菱でせう。」

と其間へるは書生にして、其見る方は先生なりき。實にも先生の顔の邊は、内君が視線を藉りて以て心火の熱を傳ふる爲に、夥しく奇痒を覺ゆるなりけり。然れども故に平氣を装ひて、

「鶴菱——解つた、解つた。」

「急病人がございますで、直に先生にお出を願ひますと申して。」

「うむ、然うか。唯今直にと。」

やをら起たむとして、内君の意如何と問はまほしげに其妻びたる面を見遣りつ。彼は早くも推して非ぬ方を見たり。先生は間拔けて、起ちかけし腰を崩るゝ如く倒せり。

安知歌鏡林

支關に擾々と登音するは、代診生と薬局生と風呂より歸來れるなり。

「おゝ目黒が歸つて來た。私は風邪で寝て居るから、代診を上げると言うてくれ。」
書生は起てり。

「夜は代診の事だ。」

且は聞かせがましく、且は辯疏がましく先生の獨語つを、内君は空嘯きて、闇の夜に啼かぬ鴉の聲聞く如き顔しておたり。

先生は手酌で三四盃を呷りつけて、古の柘榴を火炎と吐きしにも劣るまじき勢にて、其熱き息をば側の壁に噴きかけたり。益素知らぬ顔の内君は皿に割りたる玉子を示して、

「是へ入れますか。」と鍋の上に傾けむとすれば、

「要らん、要らん。何を爲る！」

音吐速に烈々として、物其平を得ざれば鳴る、金石の聲無きも之に觸るれば鏗然鏘然と、振拂はれし玉子の皿は内君の手を迂りて、鍋の上に覆被りぬ。

あれ、貴方、まあ。」と急に趣きて獨りで騒ぐを、見も遣らぬ先生は支關の方に向ひて、

「目黒君、目黒君。」

呼れたる代診生は浴後の髪を麗しく梳り、顔を赤光にして、藪睨なる小さき目をば可笑しげに見据ゑて、座敷の外に命を待てり。

「君な、氣の毒だけれど、彼所の、あの、鶴菱な……………」

「鶴菱？とは、何の裏町の待合ですな。」

「然う。彼所まで行つてくれ給へ、何だか、急病人だといふから。」

「は、承知しました。」

鹿相の玉子の始末せる内君は忽ち願て、

「目黒さん、藝者の急病人ですよ。」

「へえ、藝者ですか。」

「迷つちや可けませんよ、氣をお着きなさいませ。」

安知歌鏡林

安知歌親林

「馬鹿な言をいふな。君、嘘だ、嘘だ、早く行つてくれ給へ。」
「でも待合ですから藝者かも知れませんよ。」

目黒は仍私に幾分の望を抱きて、足早におのれの部屋に赴けり。
先生は可思しげに苦笑して、

「馬鹿な！待合で藝者の病人なら、寺からぢや誰が病人だ。馬鹿な!!」

(未完)



今は昔、伊太利ふるおれんすに、系圖も正しく、富裕なる家に生れて、容清秀に、心の都雅は更なり、弱年ながら才藝備りて、ふりてりこそ由々しき武士と沙汰せし。女の方より言寄るも許多なりけるを、我からは人の妻なるもんな。さおはんなに懸想し、假初にも其姿の見まほしくて、夜遊の筈、馬上試合、花に托せ、月を名として、左右に此君を招き、念は餘所ながら盡して、端的に其とは言はねど、種々の贈物には籠むる心を、知らぬ顔に女は、操正しく、仇めく辭も懸けざりけるを、男なほ慕ひて、恚く無情も怨は他に在らず、花咲くべき梢も風寒く、所詮は我誠の至らぬゆゑなり。此上は命を捐つるに覺悟して、身の行末は念はず、さおはんが爲ならばと、あるほどの財を盡し、思を形にして運びければ、さしもの身代夢の間に傾き、昨日の榮華、今日の身になりて、ふるおれんすの住居も成難く、密に地所賣残したる田舎に立退き、住みも慣はぬ茅屋に、伊達の名残は一羽の鷹あり。是世に愛たき逸物なれば、身に換へて離さず、耕す間を山野に狩暮して、是のみぞ實に昔ながらの娛樂なりける。然れども忘れぬはさおはんが事なり。家富めりし日は心盡を見すへき因もありしに、それさへ空に礫を打ちければ、今將

鷹料理

霜の案山子、朽ちぬる袖は賤女も奉くまじきに、此戀なほ慥ふべしとも想はれねば、在るに効無き身を歎きつゝ、有弊に命もあらばと空頼の、果敢無き月日を送りしに、程なく其人は夫に先だられて、頼に夢の世を觀じ、未來は遠くもあらざれば、跡追行かむと思立ちしが、慥しき其形は消えても、魂は此土に還る男の兒あり。惜からぬ身も之に慰められて故郷に歸り、一生樂隱居の門を鎖し、庭には亡夫が好めりし花ども種をて、垣の外へは側目も轉らず、心を墨染に行清してけり。

此程より愛兒の心地例ならぬを驚き、枕を撫で之を問へば、一件の所望あり。それだに稱はゞ病は忘れむと云ふ。母は打笑ひて、亡父の財を遺されたるも、其方の最愛しければなり。金銀にて遣はむほどの事ならば、よし明日は人の門に立たむとも何か苦しかるべき。その所望聞かせよとありければ、子は嬉しく、露日に狩せしに、勝れて良鷹ぞ持てる人に會へりし。後には物言交し、折々其家にも遊びて、見るほど彌増に其鳥の欲けれども、持主亦之を愛むこと身に越えたり。如何にしても獲むとて、そのみ忘れかねて、世の中も果敢無しと訴へければ、母は思懸けず、然りとは易き事かな。それは何處の如何なる人ぞと訊ねけるに、この村端の棟の木の下に徹く暮して、ふらでりてといふ優しき人なりと答へぬ。

母は愕きて、少時兒の顔打噴りたる胸の中には、實にも我ゆるに尾羽打枯して、禱の宿に住住ふと聞きしふらでりては、此處にこそ居たりけれ。然あらぬ人ならば、子にも譲るまじき寶なりとも、千金に換むには難からじ。垣根の草もふらでりてが物を望まむは、易きに似て易からず。子細は我子に聞かすべくもあらざれど、此儘に措かば命も危からむと思亂るゝ側に、頑是なき子の請むに我折れて、左にも右にも覺悟して、其得させむ、と事も無げに賺しければ、言の下より兒の氣色麗しく、百眼の藥も之には過ぎず覺ゆるほど、もし事の成らざらむにはと、其悲も目に見えて、活くるも死ぬるも其人の返事一つ、其人の返事こそ我心一つにはあんなれ。其心苦しかりけれども、兒の最愛に思立ちて、明る朝夙に隔無き友を語らひ、そこら散歩の體に擬して、程遠からぬふらでりての際家に尋寄れば、淺まじやふらおれんすに人にも知られて、由緒あるあるへりぞい家の館は、柴門よろほひ、軒傾きて、壁もおち目の幸無く、さながら下人の棲家と見えて、訪ふさへに愧しく、恚く成果てつるも、ふらでりて殿の罪にはあらず。手は下さねども、是皆我身の爲せる業よ、と空恐しく涙滴れて、得も入らで四邊を眺盡せる間に、友なる女の訪ひければ、應といふ聲して、畑の方より人の出来る氣勢に、思はず身を退きて、人の陰に藏るゝ如く寄添ひたり。

鷹料理

ふらでりとは泥塗の手に鉄提げて、玉と見し面も一年の日に驚み、塵露に怪しの衣被て、賤の帽子を横斜に戴き、聲もあらげなく、生來の百姓と見えたる容にて、外方を覗ひければ、友なる女、これは近き邊に住めるもんな、ぞおばんななり。唯今偶然御門を過ぎて、不覺昔の懐しく、其後如何や暮したまふと言へば、ふらでりとは手に持つ物をからりと投捨て、人目も忘れて戀人に縋着き、やれ珍しの御方やと、語は其のみ。連に玉散る涙我袖に置餘りて、ぞおばんなが袂も沾るゝばかりなり。やがて泣くゝ、さても變らせられず、いつ眺めまぬらせても、我戀の彌増す御姿かな。我は其に換りて此狀、今はあるべりさいのふらでりとは申さじ、得知れぬ土民の悴の心狂ひて、あらぬ事申懸くるよと思して、申す事の一々、必ず御心にな留めたまひそ。

寔に辱なき御志。御意には染ぬながら、世をも、家をも、身をも捨て、一念焦れまぬらす不肖、少しは不便のものと思されてか、ようぞく、ようぞの御越。門過ぎて昔懐しとは、固より嘘と知りつゝも嬉し。申すは異なるものなれど、今も執念く忘れ参らせず。昨夜も夢の御見、その節はあらぬ御怨言を申掛け、覺めての後悔、今改めて御詫と、取亂してや埒無き事まで口走れば、友なる女は其心の切なるを感じて、石に立つ

鷹料理

箭もと獨語ては、ぞおばんなは彌面羞さに身を持餘して佇めば、男は其手を把りて、まづは此方へ御入あれかし。見らるゝ通の仕合なれば、意のみにて御款待の致さむやうもあらねど、さすがに御覺はあるべし、往し花散る社前の騎戦に、紅梅輪を中に飛し、夕日に耀く大身の長槍十文字に横へて、汗をも掻かず、敵七人まで突伏せたりし此手にて、鹿柔折焚べて自煎の濃茶、何は無くとも姑く慰ませたまへ、と奥の一間に導きて、早朝よりの御出、朝食は未だにて在すべし。手作の畑物數々御目にも懸けたく、到來の酒も少許あり。久しう心結ばれしが、今日料らす愁の雲霽れて、さながら病氣平癒の想なり。その賀の證までに、狂げて一盞の寸志を饗けたまへ。

いでや、此より君が爲春の野に出て菜摘の間、中座を御免と駈出で、隣の女房呼びて、竈に焚付け、我戀人は鶏にもあらぬに、菜をのみ薦めむも傍痛し。何がな想着の一皿、此身になりても昔幽しかるべき下物をと、戸棚の隅、厨の天井まで、隈無く思廻らせども、干魚の骨もあらざるを、如何は爲むと、途方に暮れたる耳元に、愛鳥の叫類なり。

ふらでりとは磁と横手を拍ち、有之かな。我なほも貧に迫り、一片の麵包に事缺き、飢果てて斃れむとも、

鷹料

やはか此鳥人手には渡すまじき秘蔵なれども、かの御方は我命にも換難きを、まして一羽の鳥、御爲に何者
 からむ。かほどの實にてこそ今日の饗應の効はあれ。いでく此鷹炙肉にして、我念情無き人の肚に入れと、
 ふりでりとは并舞して打喜び、餌や與るゝと博く鷹を解下して、吭元に諸手を懸け、今はかうよと見ゆる時、
 告別の鳴音、一聲の身に沁みて、思はず拳に取直しつ。爾心無きも、主従の契四年に餘りて、朝夕相見ぬ日と
 ても無く、恩愛我子も如かざりしを、鳥類なりとも其徳を懐へかし。徳を懐はと報謝の志やあらむ。其志も
 あらば、今我爲に死ぬを恨むべからず。以後幾年か爾が生あらむ間、雲に翔り、草に伏して、日毎に十羽の
 獲物あらむよりは、今日命を火上に致して、纒に一羽の肉となりなむ其功は百倍にして、忠義は千倍にも勝
 るぞかし。恚怒、爾、聞分けたらば潔き最期を見せよ。此年月の馴染も今を限ぞと、翼も淋漓に涙降沃きて、鳥
 は朝の林に分入る想なるべし。名残は盡さねば、心強くも細首振上げ、狂ふを膝に敷伏せて、可惜逸物も空
 しき軀となりけるを、かの女房に渡して、料理を急げば、程無く萬般調ひたり。
 手足を濯ぎ、見好げに衣更へて、東道の椅子に着させければ、野菜の後に運出づる皿より煖氣の立騰るは、其
 ぞと、塞る胸を酒に紛はし、申すほどの味には候はねど、此は殊に東道の心を籠めたる一皿なれば、御賞飯に

鷹料理

預りたしと、格別披露の、ありければ、各由々しき料理ならむと、疎ならず小刀を把りて、御心入の風味な
 るほど勝れたれど、曾て類無き此肉、いかなる鳥にてか、東道の縁聞かせたまへ、とぞおぼんなの挨拶なり。
 御意に稱ひて其肉めも然こそは満足、不肖に於ては尙以祝着。御明し申さむは最易けれども、さては興無し。
 因より御覺はあるまじき鳥肉とばかり。客も強ては問はず、唯管珍味の饗應を懼びて、心ばかりの御返に、
 明日は此方にて晝食を参らせむなど、外なる物語になりて、さおぼんなは彼事言出でむ機も無く、窓の日脚
 は、はや此家に三時ばかりや過しつらむ。
 宿には我子の待佐ぶらむ、と心切に急がれて、恚る事申すも鳥計がましく、此方様の所、思猶懸しながら、
 愛子の一命にも關はる大事。于といふもの持たねば親の心は知れずとやら、其は凡人をこそ申せ、世に勝れ
 て優しき御心根の程を便に、近頃御無心の品ありと諷かせば、ふりでりとは嬉しげに膝を進め、我等を見懸
 けての御無心とは辱なし。不肖全盛の昔、少しも金銀の沙汰せず、珍しとある品随分搜求めて、御許へ進ら
 せしは幾度か。されども曾て喜悅の御顔見せたまひし例無し。ましてや身貧の今日、何か不自由あらぬ御方
 に、御無心言はるゝほどの物恐らく持合せず。されども御望の品ありとは、ふりでりこが生前の面目。此首

鷹料理

にてもあれ、否は申さじ、と壁に懸けたる一腰取下して、小脇に挿込み、いさく御遠慮無くも勇めば、見る影も無く容は資に汚れても、飽くまで清しき男の魂を駭きて、卒に語も出でざりしが、不末なれど我も女子の端なり。尋常にては恚る事誰にか申すべき。耻を忘るるも、名を厭はぬも、最愛き兒ゆるの間に迷へる心から、と見免しもしたまへかじと、子細打明して、千金も厭はじと、理無く頼めば、ふりては無念の拳を握りて、ざりと御無心の仰せられやう晩かりけり、と地鞠踏みて涙を流す。各其意を得ざりしに、御所望の鷹は一時後にて此姿と、手も着けざりし我皿なる炙肉を、二人が前に差置きて、聲も惜まず哭いたりけり。

ぞおばんなは仰天して、氣も狂しう、さては唯今其とも知らず、さむざく口に入れたりしは、我兒が薬のなりしかと、我と我吮搔撈りて、身をさまぐくに悶へつ、悲みつ。ふりて、外の方より、切首、胴殺、之を證據と持入り、復らぬことを歎くに増して、ぞおばんなは、我子も明日は死出の山に、此鷹追ひて分入らば、いつ立歸るべき路も無し。御情餘りて仇となりぬと、鷹の軀を搔抱き、衣を朱に染めて、涙血を流すかを見る目も哀なり。弱る心をふりてりこに慰められ、頼る身は友なる女に扶けられ、残れる一皿を果敢なき

鷹料理

土産に、其亡骸も身を放さず、涕泣家路を辿りけり。鷹は死せしと聞くより、兒の氣色卒に頼少く、その明る夜の東雲、空打仰ぎて身を悶へ、動れたりくと、今はの際まで、其事なるに、母は絶入るばかり歎を盡して、そのまゝ枕も擧げず二月の臥病。今は浮出に望無し、と後には薬も手にせず、唯臨終を待つと聞くより、一門驚きて駈着け、交々説得して、やうく方快の慶日増に、一月の後健に本復せるを待ちて、亡夫の兄なる人ぞおばんの齡若きを憐みて再縁を勧めしに、初度のほどは可かざりしが、さまぐく言はれて、道れぬ義理となり、有繋に、ふりてが情も情からず、添ふならば彼人と、ありし始末を語りければ、兄なる人も涙を流し、實に立寄るべき陸は其ぞと、相生の松幾千代の契深く、家益富榮えて、六百年前の戀物語今も想はる。



今は昔、あけいあのおとすといへりし町にこそつらたすと名む呼べる貴人ありける。借老の契半にして空しく、其身は頭に降りかゝる雪の圍寒く、後妻に迎へたる美少婦は、衆皆娘かと思たり。此頃の風習とて、然るべき家には鷹、獵犬、奴の數ある中に、ばいらすとて、年若なる美男の才智勝れて、萬般賢く振舞ひけるが、特ににこそつらたすの意に稱ひて、片時も御側不去、やがては寶藏の鍵をも預かりぬべき勢なりけり。

されども志正しく、權に居らず、龍に狩らず、専ら忠勤を勵みて、世に難有る者なりけるを、後妻りぢあ深く思初めて、我如何なれば、夫持つべき身と生れながら、夢見るまでの人を外にして、かく一所に並ぶれば、主従は顛倒にて、月の前なる燈の、見る影も無き翁に添ひあて、何思出も無く、恚くても果つる一生か。世界にばいらすとといふ者ありと知りたらまじかば、今日まで唯は措かざらまじを。逢はぬ昔は是非なし、見たるが最期、道ごと一念固めて、眼に言はせ、風情に色を含みて、人無き折々は此袖牽けとばかりに見せつくれども、曉らぬ氣色なり。りぢあは齒痒く、彼人の平素を思ふに、さるべき鈍漢にあらず。さ

三箇條

ては賢人貌に行淨すか、と執を分かず思惱める色を、御意入の姫に詰まありて見尤め、御病とも見えざれば、定めて御心に濟まぬ事、私に秘ませたまふは御恨なり。いかなる御事にても、身に換へまして御報恩は恚る時と頼まるれば、りぢあは先嬉しく、頼めども徳に出でしほど、これには深き子細、そもこの思はくも愧しくて、と遅ひけるを、私風情へ愧しき御事無し。仰せられての上、此身にて御役にも立たば、火水は末、劔の中へも分入るべき心底、と誠はなるほど面に露れぬ。

あなかしこ、他にな泄しそ。此程よりばいらすに思入りて、殿の御姿二目と見るも否なり。此戀成らずば、在るに効無し、と萎るれば、さほどの御事に、と姫は進寄りて、下々より玉簾の内へ想懸参らするとならば、及びぬ例もあれど、家來への御無心、何なりとも御遠慮のあるべきやうなし。ばいらす殿の大果報者恚くと申さば二つ返事、手を合せて拜む姿が、今から見えまする、と分別無に獨合點するを、りぢあは苦々しく、我心を惱ますは其なり。端的に物こそ言はね、會ふ度毎に其色見すれど、知らぬ顔の氣強さは、前世の仇敵か、と蹉跎して歎たるを、見つとも姫は信とせず。私にお委せあらば、十が九まで御思遂げさせまぬらせむ、と事も無げに嘸下めば、覺束なくは思ながら、成らぬとよりは頼もしくして、願 愜は々褒美は

三箇條

望次第でや。必ず失るまい。爲損じて怪我さすな。

其も此も皆心得、御居間を退出で、ばいらすを捜行けば、書院の様に修らぬ後姿も、奥様に見せまほしく、下部に庭の掃除の指圖してゐたりけり。姫は故としく、御奥より火急の御用あり。彼方まで御越と賺して、一間に呼入るれば、其事とは知らず、早速承はらむ、と神妙に控へられ、明白には言れぬ仕儀となりて、奥様暴に御心地悪く、今は御命も危く見えさせたまふと取敢せば、ばいらすは打 愕きて、今朝まで御機嫌の麗はしさを拜せしに、箇抑と駈てむとするを引住めて、それに就きて奥様より貴方へ折入りて御頼あり。御秘藏の良薬一服是非に御所望、と眞顔に述べば、ばいらすは嘘塔として、心得難きは奥方の御病。名醫も數あるに不肖に御藥劑とは、彌以て不審なり。恐らく何かの謎にてや候ふべき。武者の不肖然る風流の辨無し。とてもものに有様聞かせたまへと詰られて、姫は頭を掉り、謎にもあらず、實の御病とは、よう御存の理なるに、その知らぬ御顔が彌御命を縮むる種、餘病と違ふ難症なれば、いかなる名醫も匙を投げて、貴方に御持合の薬を差措き、御全快の道も無し。外ならぬお主様の御命、つい一寸助けて進せたまへ、唯一言應とだにおほせあらば、それにて埒は明くものを、と詰寄するを、ばいらすは衝のけ、

三箇條

睨着け、御命助けまおらせぬ心底なり。御所望の服は、道を辨へたる不肖が眼に、古今の大毒薬と見極め
 たらば、大恩ある御主に薦めまおらせむこと曾て思寄らす。その服なくて死ぬる御命とならば、不肖喜び
 て御見殺に仕るべし。此日頃の御振舞心得難きことのみと存せしが、今思へば、なるほど御病氣の爲せし
 業か。この御返事こそ家傳秘法の大妙薬、少しは苦くとも御耐忍あらば、不義の御病平癒は目前なり。
 覆さぬやうに持歸られ、否とおほせられなば、随分手籠にしても御薦あるべし。之にも懲りず、重ねて恠る御
 取次勤めなば、御挨拶は此の通、と矢庭に抜放す劍の光に、仰天して逃歸りける姫は、誓ひし辭も反古に
 なりて、御調見も面目無く、途方には暮れたりしが、御返事許るべきやう無ければ、不首尾の段々詫入りけ
 るを、奥方聞き給ひて、さればこそ懸立して要無き事を爲出したれ。殿様の御耳に入らば此身の破滅ぞと泣
 かるるに、姫は在るにも在られず、御足下に領伏し、此御詫には、罪を私に引承け、忘れても御名は出
 すまじければ、せめては御心易く思召されよ、とても罪に服るならば、此儘にて已みなむも殘多し。今一
 度はいらす殿の心中篤と聞糺したく、成るも成らぬも時の運と御覺悟ありて、此御使重ねて仰付けられたし。
 木を伐る斧も幾年か磨るほどに、鉞となるべき時もあり。速に御心落し給ふなど慰られ、りぢあは愁の裏にも

三箇條

喜ばしく、なほ此上を頼めば、頼まれて、今はなかく反を懼れず、再び機を得て、ばいらすの袂に縋り、
 かねての御言葉もあれば、まづ私を撃放したまへ。首になりてから申上ぐることを數々あり、と劔の柄に手を
 掛くれば、ばいらすは驚き、さまでの御心懸辱なし、不肖とても男の端なれば、切なる御志承はりて、身も
 消むむすばかり喜悅に堪へざりしを、情無く申せしには仔細あり。御家に數ある奴の中に、不肖獨抽で
 て重く用おさせたまへば、おのづから私慾に貪り、我儘の振舞を募らせ、身のほど忘るゝこともやどの御懸
 念より、殿様御指圖にて不肖胸中を試さぬ爲、奥様の御心にも無き戀を爲掛けたまふと存じ、向者には潔白
 を御覽に入れしまでなり。
 然れども事再度に及び、尙又此方の様子、彼此謀計とも覺えざれば、此上は二言と申さず、いかにも御意に
 従ひ、御禮は染々申上る夕もあるべし。思へば殿様には山海の御恩を蒙り、仇にて報奉つる段、天爵の免
 るべきや。見よく、今にも牛裂、鋸挽の屍を野末に露し、汚名を永く後の世に流さむこと、さらく
 遺憾とも存せず。御情の嬉しさに、命は亡きものにして、思召すまゝの首尾可仕き覺悟なり。
 恠く一命に換へての大事なれば、奥様に於ても、此戀の仇ならぬ證據を給はるべし。それには此方より恐れな

三箇條

がら三箇條の所望あり。いかに、御聞届下さるべきや、とあれば、姫は歡極まりて伏拜み、如何なる御所望かは知らねども、奥様御執心のほどは、お前様の事とならば、御身にも換へらるべし。其三箇條とは。第一に、殿様御面前にて御寵愛の鷹を御手に掛けらるべき事。第二、殿様の御髭一摘。第三、殿様の丈夫なる御奥齒一本。右何れも拔取りて下さるべき事。此三箇條協へたまはば、不肖生々世々の満足之に過ぎたるは無し、と聞くだに難題言掛けられて、姫其はと當惑せしが、此無理假初にも怨しき色を曉られなば、想ひしよりは拗者のばいらす、亦何言出でむも料られねば、最易き御所望なり。申上げて喜ばせ参らせむと別れて、直様この由を取次げば、りぢあは聞く毎に眉を擧めて、飽くまで憎き仕方ながら、頓慥へむとばかりを嬉しく、さては此難題見事に埒明け、品々眼前へ衝附けて、積る恨は存分に露さむと、私に工夫を凝して、三箇條やがて成就の時節を候ひけり。

にこそすつらたす客を愛して費を惜まず、目覺しき夜宴の催類繁なり。心祝の事ありて、今宵も嘉礼の識れる限を請じ、銀燭眩く、玉壺を傾けて主客やうく興に入る時、りぢあは諸の裳を曳き、粧を凝して顯れければ、寒林忽ち花を着け、暗雲披きて月の輝くか、と満坐鳴を鎮めたり。

三箇條

りぢあは閉に一禮して、彼方に据ゑたる樓架に進寄り、縁緒とくく鷹を取下せば、衆目之に注ぎて、爲むやうを眺めてけるに、搏く鳥の頸に諸手を掛け、引扛けて壁に打着けく、年來の怨恨今思知れ、と眉逆立ちて息捲けば、にこそすつらたすは飛ぶが如く驅寄りて、こは物にや狂ひたる。聊爾すなど、りぢあが腕を支ふる時を、一足晚く、無惨や鷹は死したりけり。

にこそすつらたすは此體に怒憤増して、此鳥何の罪有りてか、我儘の成敗奇怪なり、と面色烈火の如く、拳を握りて詰寄すれば、りぢあは少しも騒がず、いかに、各位聞かせたまへ。我夫此鷹を愛でらるる餘、日毎の田獵に家を忘れ、晨に出づれば日晏まで歸りたまはず。春の日を語暮し、秋の夜を起明して、なほ慄らぬ最愛の夫に、一日相見ぬ妾が心は如何にぞや。まして幾日か打續きて、次第に御契も薄く、妾を外になしたまふは、御心奪ふ此鷹のあればなり。いつぞは亡きものにして、後を安く、今までの恨をも露さばやと規ひしが、逃匿るべき敵にあらねば、唯一撃にせむは容易けれども、人無き所にては後護く、大事に思召さるる鳥なれば、御不興のほども恐しくて、今日までは過ぎにき。幸ひ各位の光臨を待ちうけ、かく首尾好く懐を遂げたれば、仔細具に申述べて、妾が聊爾か、應めが不便か。御裁斷仰ぎたまき心得なりと、語涼

三箇條

く挨拶ありければ、一坐動搖めま、通なる御働。人の妻たるもの何人も恠くぞ有りたさと稱へて、御中今より逾陸しう、萬々歳渝らぬ御壽の盃參らせう、と惣立になりて盃を捧げ、哄と笑ひて、夫婦を上坐に据ゑ、衆口に殿の御果報羨めば、にこすつらたすも釋然と心解て、御機嫌始に増して麗しかりけり。これより殿の御寵愛いと勝りて、錦帳夢暖に手枕の私語、彼此御戯のありける時、りぢあは然り氣無く殿の髪を弄り、それより肩を撫で頬を摘み、やうく御髭に手は觸れたれども、有紫に撈るべき機も無し。如何にせまじと思煩ひつゝ、なほ指頭に絡みて物語ふ間に、殿のをかしき事言はれけるを、此時と、身を反して笑ひさま、力を籠めて曳きければ、殿は得堪えず、呀と叫びて仆れたり。我手を見るに、いと長き髭六莖ばかり、根元に皮の附きたるもあり。逸早く推隠して、こは如何にしたまひたる、と抱起しまゐらせけるに、殿は御手を口に掩ひ、面を擧めて、ほろくくと涙を流したまふ。りぢあは疵所の心許なく御手を取除くれば、髭の脱けたる孔より血入染み、苦痛も然こそと想はれて、御怒の聲暴く罵りたまふを、語を極めて慮外を詫びければ、固より過失の事とて深くも尤められず、御氣色復りて、なほ睦しく夜を明しぬ。

三箇條

嬉しや二ヶ條は爲了せられたと、殿の奥齒を獲むことは、龍の腮の珠を攫るとも謂ふべくや。りぢあが頼才も計に盡きたりしが、爰に先妻に二人の男子ありて、若草のめでたく生立ち、花は行儀を見習の爲、父が三食の膳に給仕して、兄は肉を斫り、弟は銚子の役、いづれも神妙なりけるなり。りぢあは一日二人を招きて、さる方より此度母の聞きたる事あり。凡そ老たる人は精衰へて、譬へば夜明の燈の油の盡きなむとするが如し。かゝる老體に、血氣盛なるものも呼吸は、壽命を短むる大毒之に過ぐるはなしとかや。かへすくも恐るべき事なり。聞かざる先こそ是非なけれ、此後御給仕の節は、始終面を背けて、假初にも父上に向ひたまふなかれ。然れども此事人には語りたまふな。父上問はせたまふとありとも、努々子細を明したまふべからず。如知られなば、如何なる人をも避けて、深山の奥へも入らむなと、由々しき大事に及ばむも難測し、唯々心に秘めて、妙う振舞たまへかし。是大なる孝行ぞや、と言巧に唆かせば兒たちも之を信として、其日の晩餐より母の教を固く守りぬ。りぢあは機を見合せ、近頃和子達御給仕の様子常に變れり。御心着無さやと問ひければ、然れば我も疾より訝しと思ひつゝも打過さしが、如何なるゆゑにかあらむとありければ、りぢあは御顔つれぐと打噴りて、

三箇條

それには至理なる子細あり。苦からずば申上げむ、と聞くより、有様申せと苛ちたまへば、りぢあは御側に寄添ひて、恐れながら御口中の臭きゆゑなり。妾こそ得忍びまゐらすれ、和子達わこたちの面を背けたまふこと道理ことわりと覺ゆると申せば、殿は呆れて、我口中得堪ふまじく臭きとか。奇怪なることを聞くもの哉と、自ら御手に息を吐きかけて、頬に嗅ぎたまふに、何ともあらざりければ、御首幾度か左右に傾かたむたり。氷は自ら冷かなるを覺えず。御自身には知られずとも、齧齒わしはなどの今朽つるにやあらむ。左右は御見せあるべし、と窓の明るき方に伴ひまゐらせ、口中具に視る眞似して、是よくと小膝を搦つかてば、殿は思も寄らず、何か有るかど仰せられぬ。奥齒一つ眞黒に虫喰みて、全く朽ちたり。此儘に差措かれなば、其毒隣より隣に及び、竟には口中盡く腐るべし。書を除き給ふは今の間、と一々信まことじやかに聞ゆれば、言の下より、齒醫者召せと急まじまじたまふを、りぢあは止めて、妾わらわ経験あり。渠等の手に掛りたまはば、その苦痛等へむ方なく、さりとは無法むぼうの暴療治あつれうぢ、拷問かうもんの責せも如此やと、今憶出して身毛も彌立よだつ。身に換へて最愛の殿に、何とて然る憂目を見すへや。妾わらわ躬みづから心を用ゐて療治しまゐらせむ。亡父の齒を三度まで抜きし事ありて、いさゝか心得も侍りしと賺せとも、殿はなほ危む氣色なるを、やうく我居間に伴ひ、かねて用意の粉を含ませ、有問が程に齒根の池いけむを料りて、牀しやうじ几ぎに依りたまふ背より、例の狐翼縛こしよとばがひじめに抱附いだきつき、りぢあは膝に乗懸りて、隠し持たる釘拔御口に差入れ、始の程は徐に齒の動搖を誘ひけるに、殿は早疼痛の堪へがたき御機嫌と見るより、今は用捨もあらず力の限曳ひきければ、手足を悶もたへ、牀几を蹴返して、殿は仰様に打僵れ、鮮血は縷いとの如く頤に傳ひ、哀に苦き聲を揚げて、命も覺束なげに呻うなたまふ。りぢあは此間に巧置たくみきたる齧齒わしはに變換すりかへ、首尾好く殿の御眼を眩くらし、丈夫なる奥齒一つ血附のまゝ、直様ばいらすの手許に届け、三ヶ條の難題見事埒明けたる上は、今宵にも否は言はせぬ爲の一札、墨の乾きもやらぬを姫懐にして立歸る時、殿口中の御痛未だ去らず。蒼白たる頬を抱へて、素性も知れぬ齧齒わしはを御手に、恨めしく御覽じつゝ涙を浮べて在したりけり。

三箇條

いにし年でかめろんを讀みて、おかしと思ひし條をば、程經て筆の調にうる覺のまゝ書流せしを、はからずも爰に取出たるなれば、辭句は更にも謂はず、筋などの相違せるも多からむかし。されば署名しよめいの下に譯とも名乗らず、作ともことわらず。文章も様變りて、今の紅葉の口吻にも似ざれば、誰にかあらむ、十千萬とはするしたり。さてはぼツかしおのでかめろんにもあらねば、紅葉

三箇條

の譯にもあらず、これやこの牛鍋の葱の牛臭を類なるらむ。
ことと三月

紅葉山人

紅葉集 第二卷終



明治四十二年十月廿五日印 刷 紅葉集 (第二卷)
 年十月卅日發 行 定價金 壹圓參拾錢

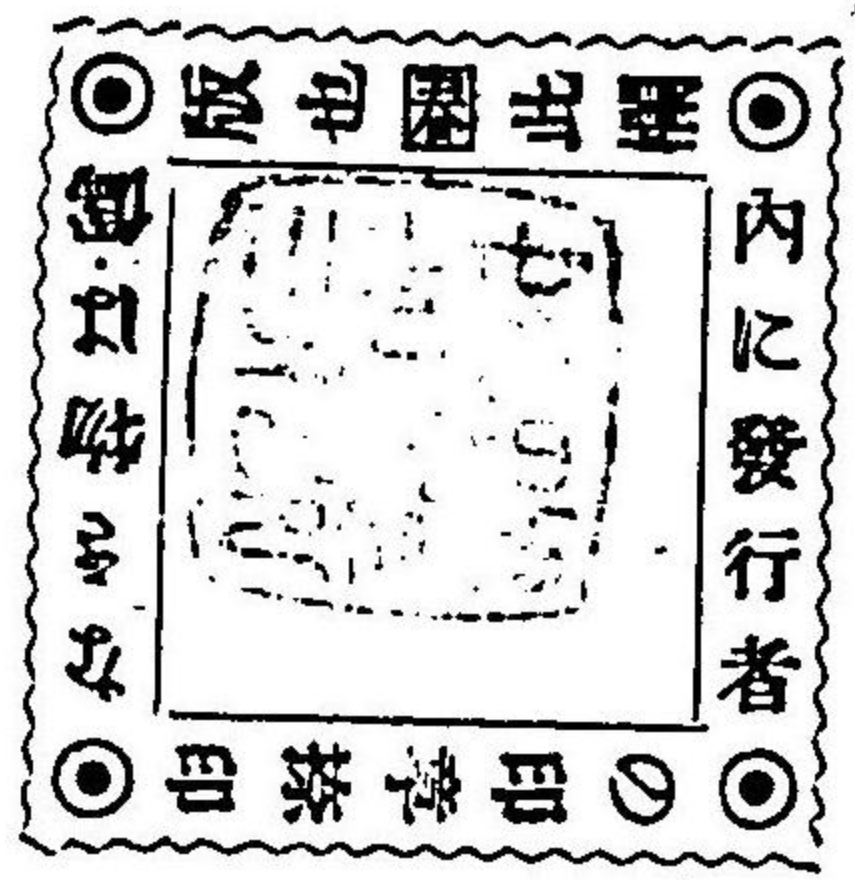
著 作 者 尾 崎 紅 葉
 發 行 者 和 田 靜 子
 印 刷 所 東京市日本橋區通四丁目五番地
 神 谷 岩 次 郎
 東京市日本橋區兜町二番地
 東京印刷株式會社

發行所 東京市日本橋區通四丁目五番地
 春 陽 堂
 電話本局五十一
 電報局東京二六一七

この集は、昭和十三年の秋、東京の各書局に於て、
昭和十三年三月

紅葉集 山人

紅葉集 第二卷終



明治四十二年十月十日 印刷
同 年十月廿日 發行
紅葉集 (第二卷)
定價金 壹圓參拾錢

著 者 尾崎 紅葉

發 行 者 和田 静子

印 刷 者 神谷 岩次郎

印 刷 所 東京印刷株式會社

發 行 所 春陽堂

東京市日本橋區通四丁目五番地
電話本局五十一
振替口座 東京一六一七

紅葉集 目第一次卷	妻	人	三
	夏小袖 夏 瘦	關東五郎 紫	伽羅枕 冷 熱
		心の闇 男 心	

紅葉集 目第二次卷	三ヶ條、 アンチヘプリン	西洋娘氣質、 浮木丸	鷹 料理 銀	多情多恨、 不言不語 隣の女
--------------	-----------------	---------------	--------------	----------------------

紅葉集 目第三次卷	戀心の船、 伽羅物語	偽金、八重澤、此ぬし 東西短慮の又、茶碗割	紅白 毒饅頭 二人女 おむさぼる 玉子舟	七新色 二文命の安く賣
--------------	---------------	--------------------------	----------------------------------	----------------

30
232



